

福島町安心生活創造事業推進 及び地域福祉計画策定委員会 (議案)



日 時：平成21年12月1日(火) 午後6時30分
場 所：役場2階健康づくり研修室

町民課福祉グループ

次 第

1. 開 会
2. 委員長あいさつ
3. 吉岡1・2・3町内会における懇談会の報告について
4. 福島町地域福祉計画（素案）について
 - (1) 素案の全体的な説明
 - (2) グループワークによる基本方針の検討、発表
 - (3) 全体協議及びまとめ
5. 安心生活創造事業について
6. 災害時要援護者避難支援プランについて
7. その他

福島町地域福祉計画

(素案)



平成21年12月

町民課

目次

第1章	はじめに	1
1	地域福祉計画ってなに？.....	2
2	計画の位置づけ.....	3
3	計画の期間.....	4
4	策定の経過.....	4
5	地域福祉推進にあたってのまちの現状.....	5
6	地域福祉推進のための圏域設定.....	8
第2章	ふくしまの地域福祉推進の理念	9
1	福祉のまちづくりへの挑戦.....	10
2	地域福祉の基本的考え方.....	11
3	施策の体系.....	12
第3章	地域福祉の進め方	15
1	みんなが元気なまちづくり(健康・生きがい).....	16
2	みんなで手をつなぐまちづくり(見守り・相談).....	20
3	みんなが笑顔になるまちづくり(情報・安全安心).....	24
第4章	計画の推進	29
1	地域福祉への参加.....	30
2	地域福祉の推進・調整.....	31
3	計画・取組の周知.....	32
4	地域福祉の進み具合の評価.....	32
資料編		33
1	本町の特徴.....	35
2	アンケートの主な結果.....	37



第1章 はじめに

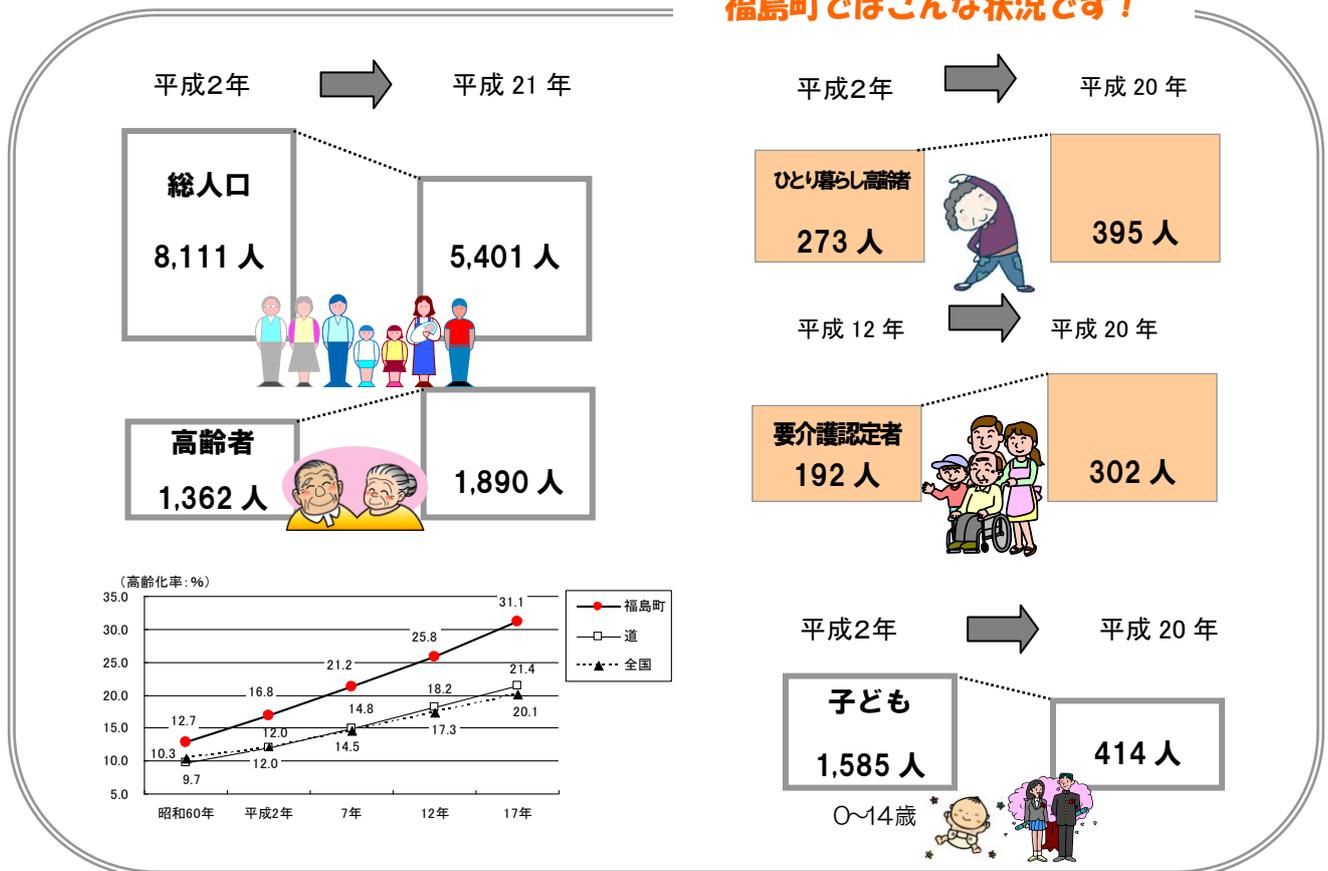


1 地域福祉計画ってなに？

すべての住民一人ひとりの生活様式を大切にしながら、安全に安心していきいきと暮らすことができるまちをつくる取組が「地域福祉」です。

わたしたちのまち福島町では総人口は減少の一途、65 歳以上の高齢者が3分の1を超え、北海道・全国を大きく上回っており、子ども1人に対し高齢者がおよそ5人という状況です。高齢者が多いため、要介護認定者やひとり暮らし高齢者も増加しています。

福島町ではこんな状況です！



注：総人口、高齢者及び子どもは、平成2年は国勢調査、平成21年は住民基本台帳

要介護認定者は各年10月、ひとり暮らし高齢者は、平成2年は国勢調査、平成20年は住民基本台帳等

本町では、このような支援が必要な住民に対して様々なサービスを行っていますが、サービス対象者は増加してきており、住民一人ひとりの生活様式に合わせてきめ細やかに対応することが難しくなっています。

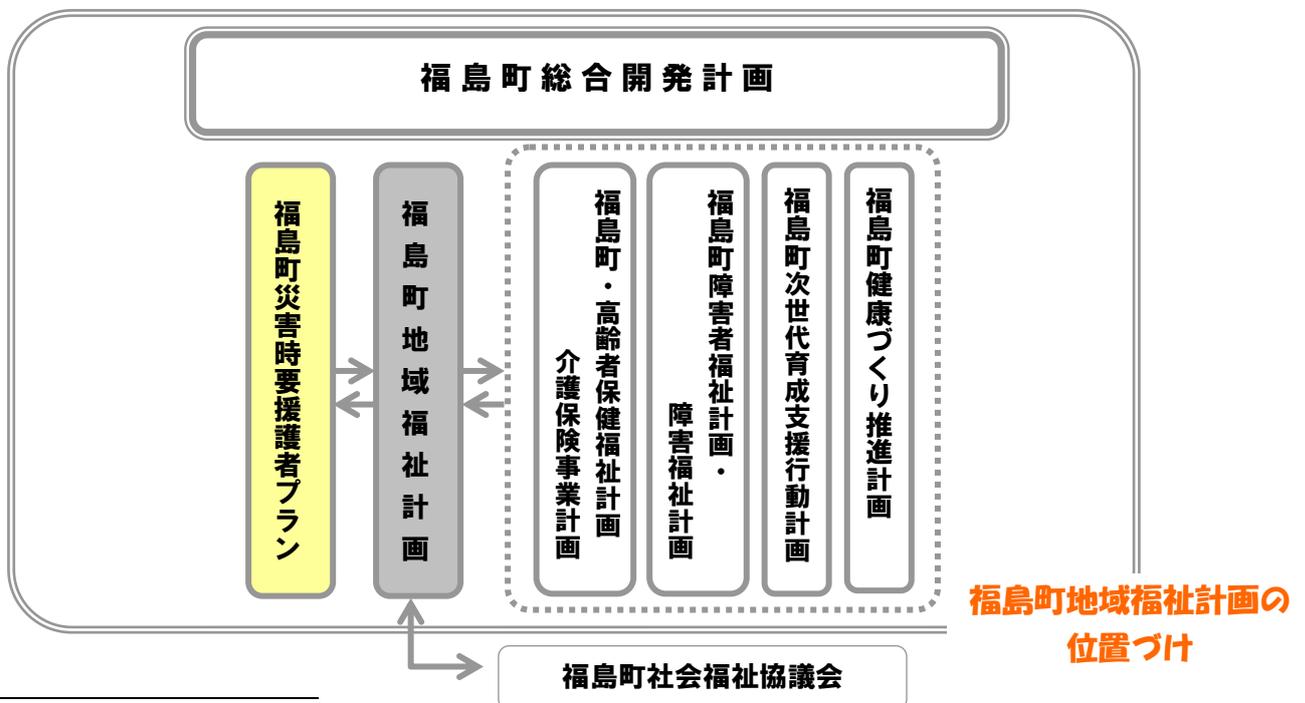
そこで、同じ地域に暮らす住民同士の助け合い、支え合いの関係が必要です。このような地域の住民が力を合わせていくことが「地域福祉」の姿です。

2 計画の位置づけ

これまでの福祉施策は、支援を必要とする人に対する行政からの一方的なサービス提供や措置が主な内容でした。少子高齢化の進展やひとり暮らし高齢者が増加している本町では、家族内で支える力が低下しており、地域での助け合う力もこれまでのように自然派生的な個々人の力に頼ることは難しくなっています。

本町が策定する地域福祉計画は、社会福祉法第107条¹に基づく「市町村地域福祉計画」であり、町の将来を見据えた地域福祉のあり方や推進に向けての基本的な方向を定めるものです。また、上位計画となる「福島町総合開発計画」に盛り込まれた保健福祉関連施策について、地域福祉の視点から具体化を図るものでもあります。

具体的には、対象者ごとの個別計画として策定している高齢者の計画（高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画）、障害者の計画（障害者福祉計画・障害福祉計画）、子どもの計画（次世代育成支援行動計画）、及び健康に関する計画（健康づくり推進計画「いきいき健康ふくしま21」）に共通する理念や福祉ビジョンを踏まえて、住民の生活に密着した保健福祉サービス提供体制の基盤づくりを住民・町内会・町社協・サービス事業者・関係機関・行政の協働によって推進していくための指針となるものです。



¹ 社会福祉法第107条：

市町村は、地方自治法第2条第4項の基本構想に即し、地域福祉の推進に関する事項として次に掲げる事項を一体的に定める計画（以下「市町村地域福祉計画」という。）を策定し、又は変更しようとするときは、あらかじめ、住民、社会福祉を目的とする事業を営業者その他社会福祉に関する活動を行う者の意見を反映させるために必要な措置を講ずるとともに、その内容を公表するものとする。

- 1 地域における福祉サービスの適切な利用の推進に関する事項 2 地域における社会福祉を目的とする事業の健全な発達に関する事項 3 地域福祉に関する活動への住民の参加の促進に関する事項

3 計画の期間

この計画は、平成 22 年度から平成 26 年度までの 5 年間です。

【計画の期間】



4 策定の経過

この計画は、アンケート調査、地域福祉にかかる関係団体などによって組織された「福島町安心生活創造事業推進及び地域福祉計画策定委員会」の協議のほか、地区における懇談会を行い、策定しています。



※1 住民アンケート

調査対象	福島町に居住する 18 歳以上町民
標本数	1,000
回収率	54.9%
抽出法	無作為抽出
調査方法	郵送による配布・回収
調査時期	平成 21 年 8～9 月

※2 策定委員会（ワークショップ）

開催目的	私たちの周りの気になることをテーマに、グループで考え、共有化する。
開催時期	平成 21 年 8 月 18 日
場所・時間	青函トンネル記念館 18 時～20 時
参加者	3グループ 20 人

※3 地区懇談会（ワークショップ）

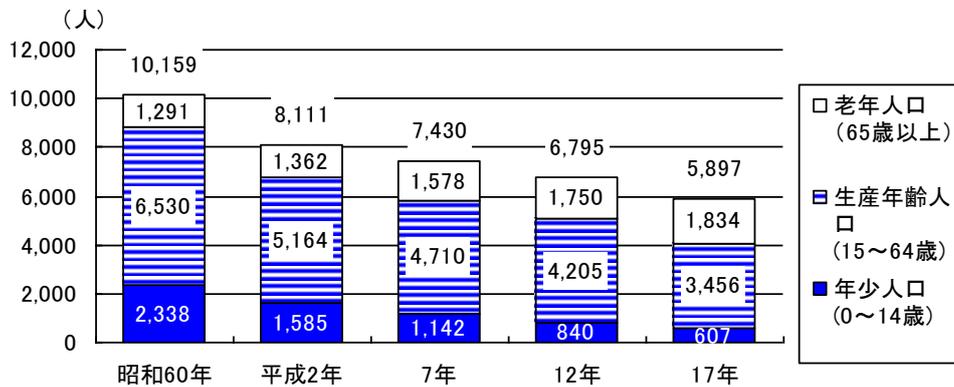
開催目的	吉岡 1・2・3 町内会における課題解決を提案する。
開催時期	平成 21 年 10 月 19 日
場所・時間	吉岡生活改善センター 18 時 30 分～20 時 30 分
参加者	4グループ 24 人（策定委員含む）

5 地域福祉推進にあたってのまちの現状

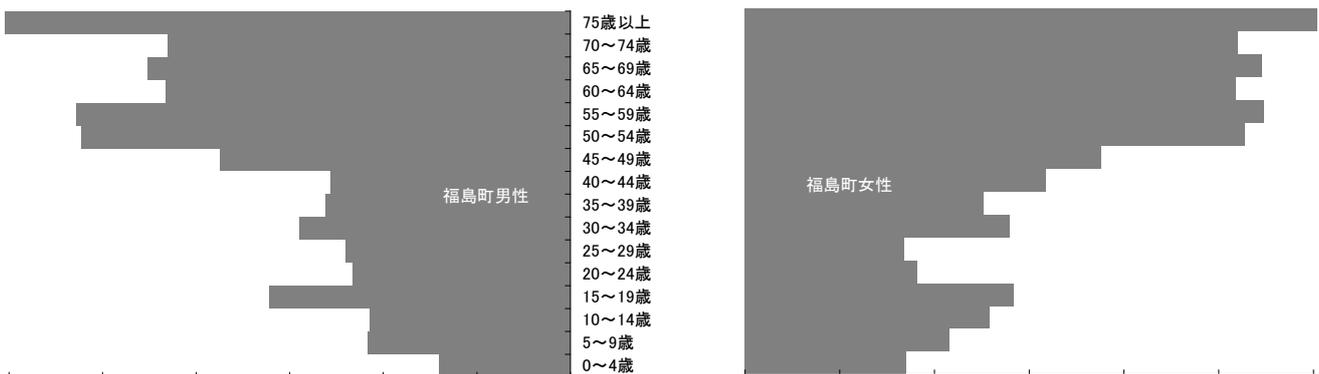
**本町は人口減少が著しく、60代・70代の住民や
高齢女性が多いまちです。**

本町の総人口は昭和60年では10,159人でしたが、平成17年は5,897人と6千人を下回りました。平成17年の老年人口（65歳以上）比率は31.1%と道（21.4%）・全国（20.1%）を大きく超え（P2 図参照）、60～70代の住民、とりわけ高齢女性が多くなっています。

【福島町の総人口及び3区分人口の推移】



【福島町の人口構造】

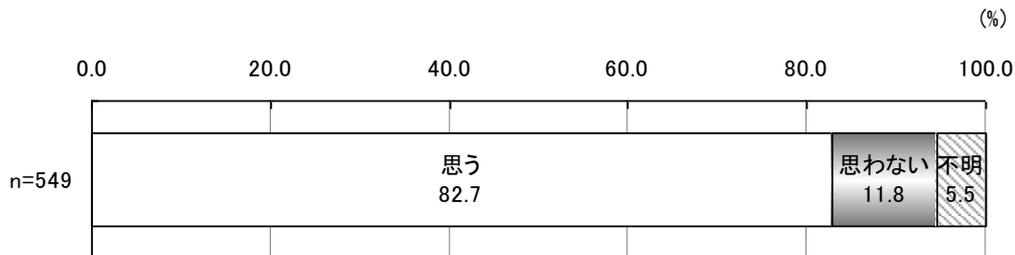


資料：国勢調査

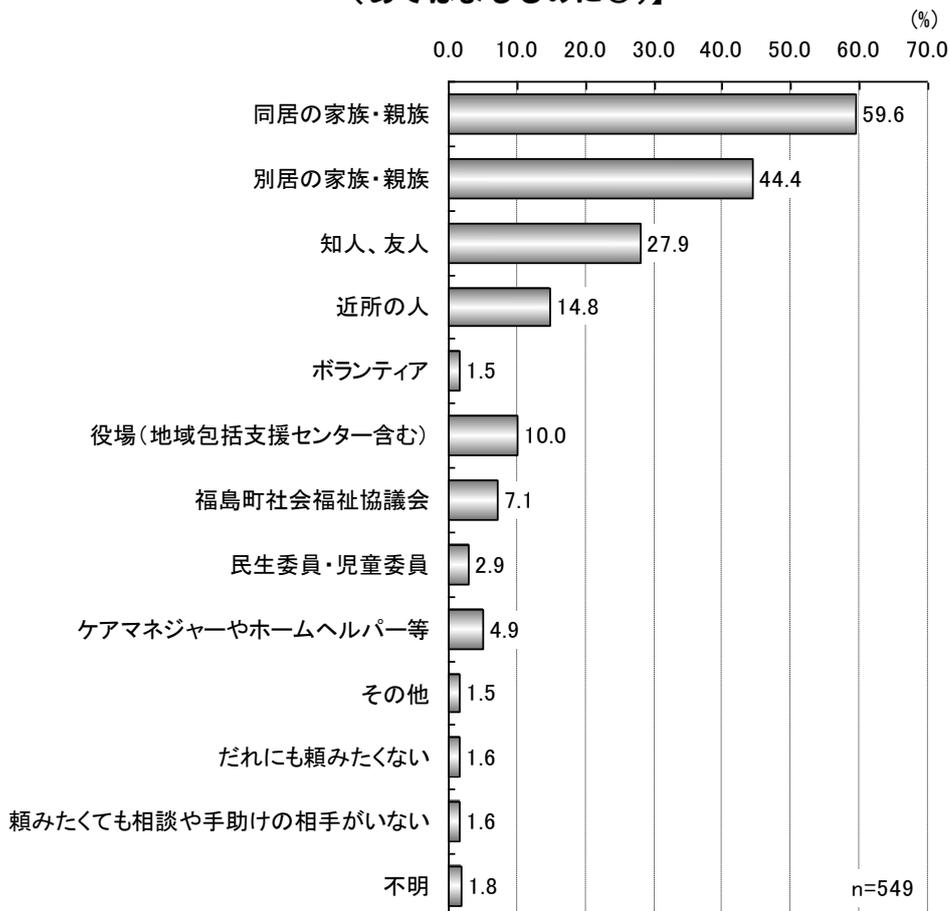


**困っている人を手助けしたいとする人は8割を超えていますが、
手助けされる側は、親族を望む人が圧倒的多数です。**

【となり近所や地域の中で、高齢者や障がい者（児）の介護、あるいは子育てなどで悩んだり困っている世帯があったら、何か手助けをしたいと思いませんか（1つに○）】



【生活上の問題で相談や助けを必要とするとき、だれに手助けを頼みたいですか（あてはまるものに○）】

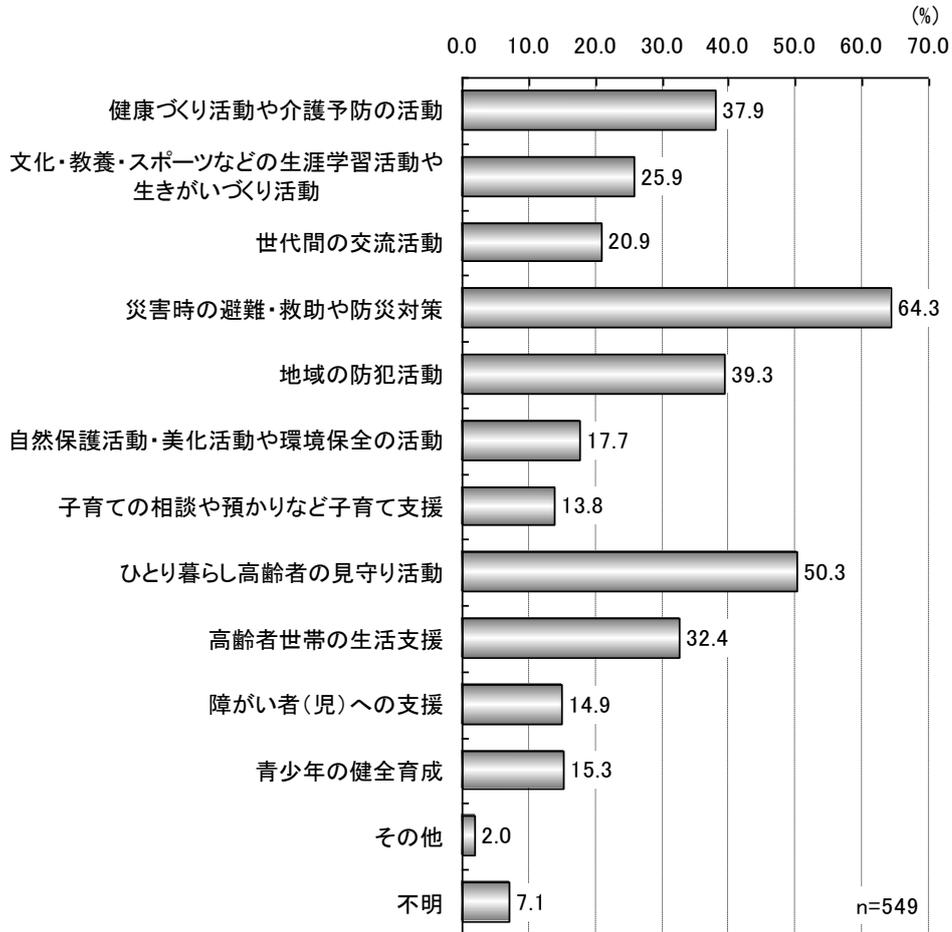


資料：住民アンケート（平成 21 年 8 月）

地域で悩みや困っている世帯に手助けをしたい人は8割を超えています。一方、困った時の相談や手助けを頼みたい相手は「同居の家族・親族」(59.6%)や「別居の家族・親族」(44.4%)など親族をあげています。

**地域で最も協力すべきことは、災害時の避難や防災対策、
続いて、ひとり暮らし高齢者の見守り活動です。**

【地域でみんなで協力して行った方がいいと思うのはどのようなことですか（5つまでに○）】

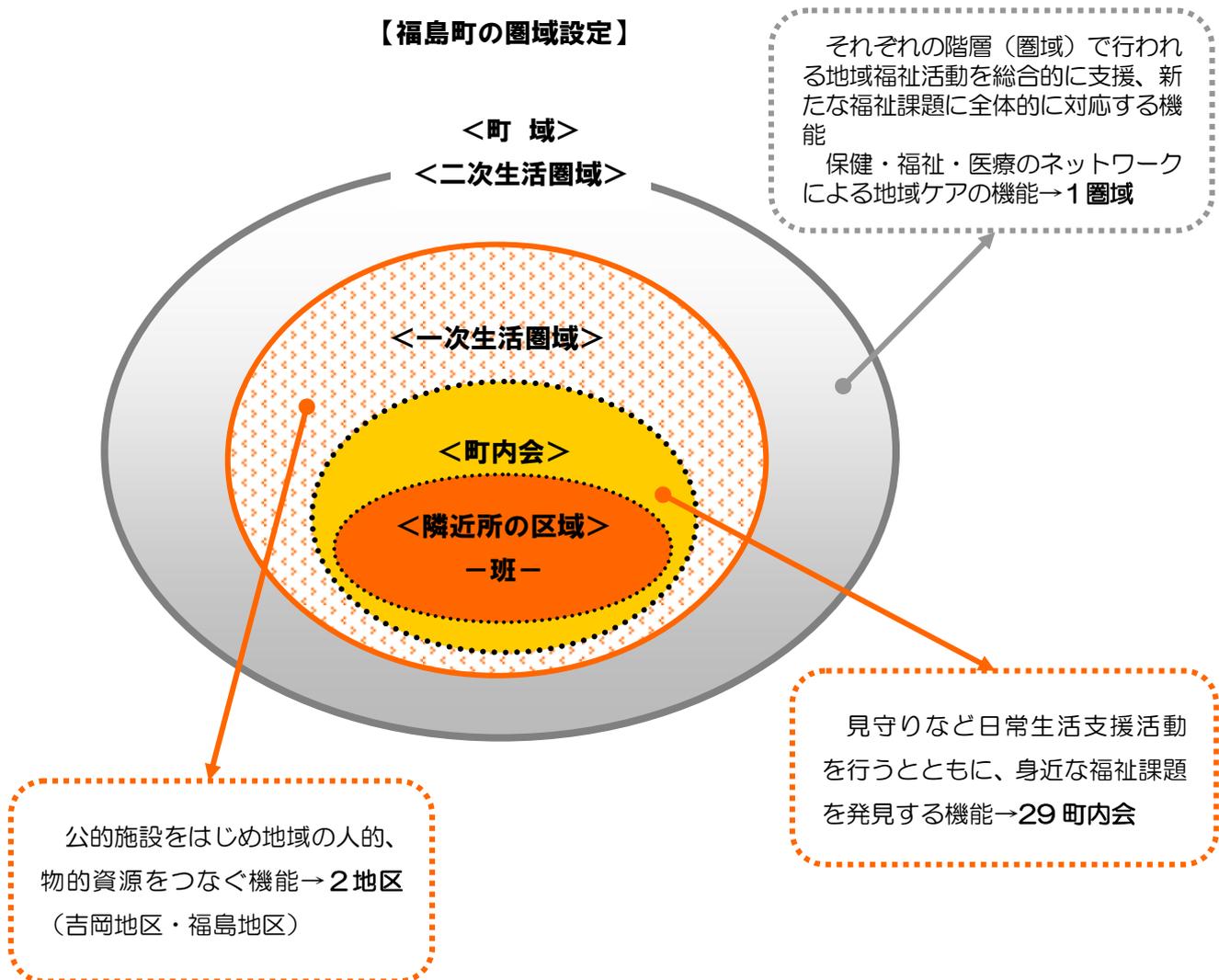


地域で最も協力すべきは「災害時の避難・救助や防災対策」で6割を超え、すべての年代で第1位です。第2位は「ひとり暮らし高齢者の見守り活動」で5割となっています。

6 地域福祉推進のための圏域設定

支援を必要とする住民へのサービスの提供や住民を主体とする地域福祉を推進していくためには、施設配置や人材などの社会資源をいかにネットワーク化していくかが問われています。

住民の誰もが住みなれた地域の中で安心して暮らし続けられることを第一義に、本町の実情に即して、吉岡地区・福島地区を「一次生活圏域」に設定するとともに、次のような圏域設定により、活動を支援する環境づくりを進めてきます。



第2章 ふくしまの地域福祉推進の理念

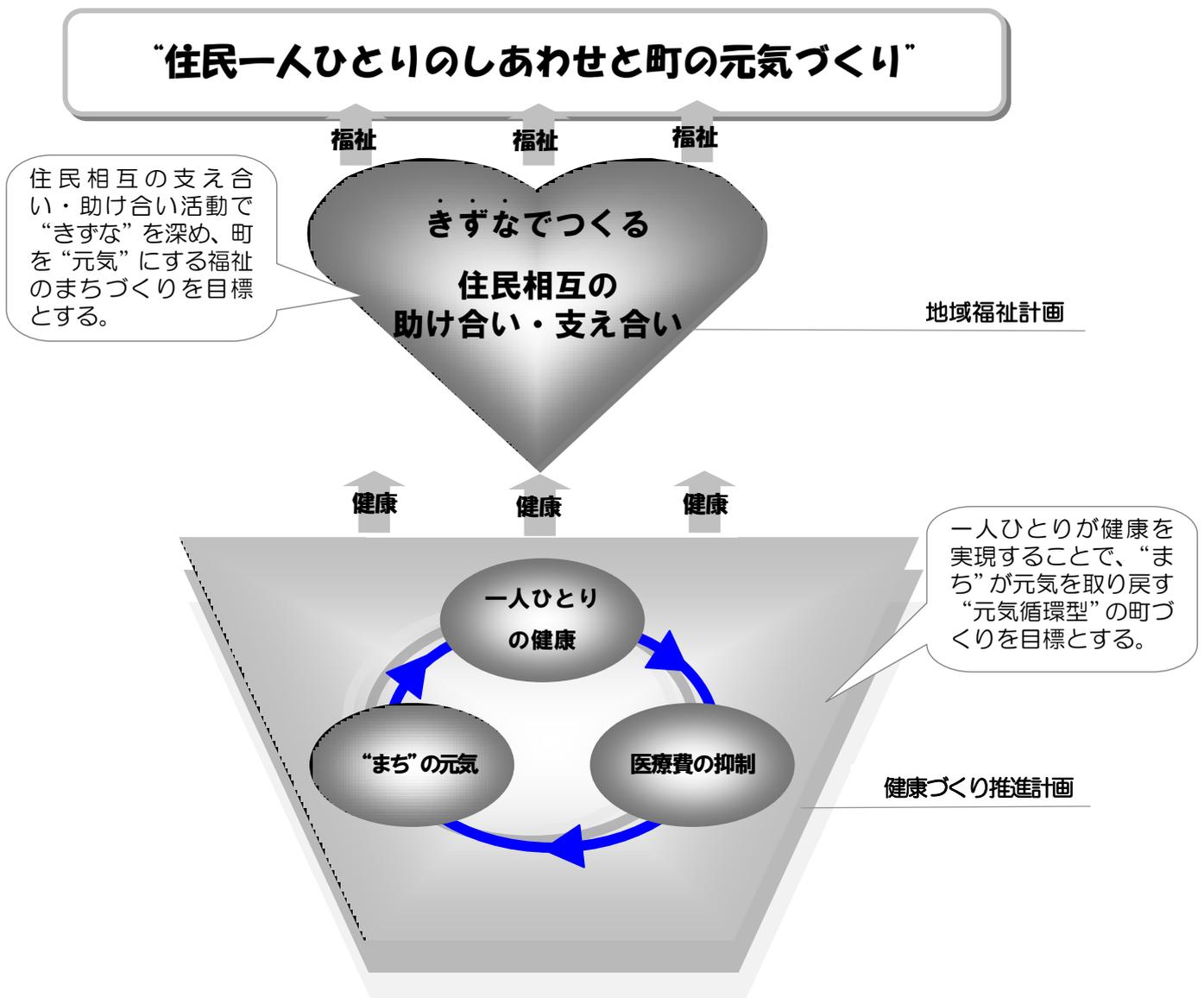
1 福祉のまちづくりへの挑戦

今、本町では、健康づくり推進計画（いきいき健康ふくしま 21）を推進することによって、住民一人ひとりの健康を実現することで町の元気づくりに挑戦しています。

本町は人口5千人の小さな町ですが、健康づくりに続き、一人ひとりが福祉に目覚めることによって、すべての住民が支え合う資源となり、町を元気にする可能性を秘めています。

本計画は一人ひとりのしあわせを実現するという大きな目標に向かって、自分の健康・支える人となるための健康づくりを進めながら、住民相互の支え合い・助け合い活動で“きずな”を深め、助けられる人のしあわせと助ける人の生きがいをつくり、その仕組みが町を“元気”にするという、福祉のまちづくりに挑戦するものです。

図 本町の福祉のまちづくりへの挑戦イメージ



2 地域福祉の基本的考え方

本町はイカ漁など漁業を中心としてきましたが、高度成長期には男性・若者の出稼ぎや季節労働によって支えられてきました。その後、青函トンネル工事の基地となって転入者が増え、昭和 50 年のピーク時には総人口 1 万 2 千人台を記録するなど町は活気を帯びました。しかし、昭和 62 年の工事完成が近づくにつれ、転出者の増加や猟師の転職などにより人口は激減しました。このような人口減少と少子高齢化の進展が相まって、高齢者や女性が中心となって地域を支えており、今後もこの状況が続くことを前提にした、福祉のまちづくりを行っていく必要があります。

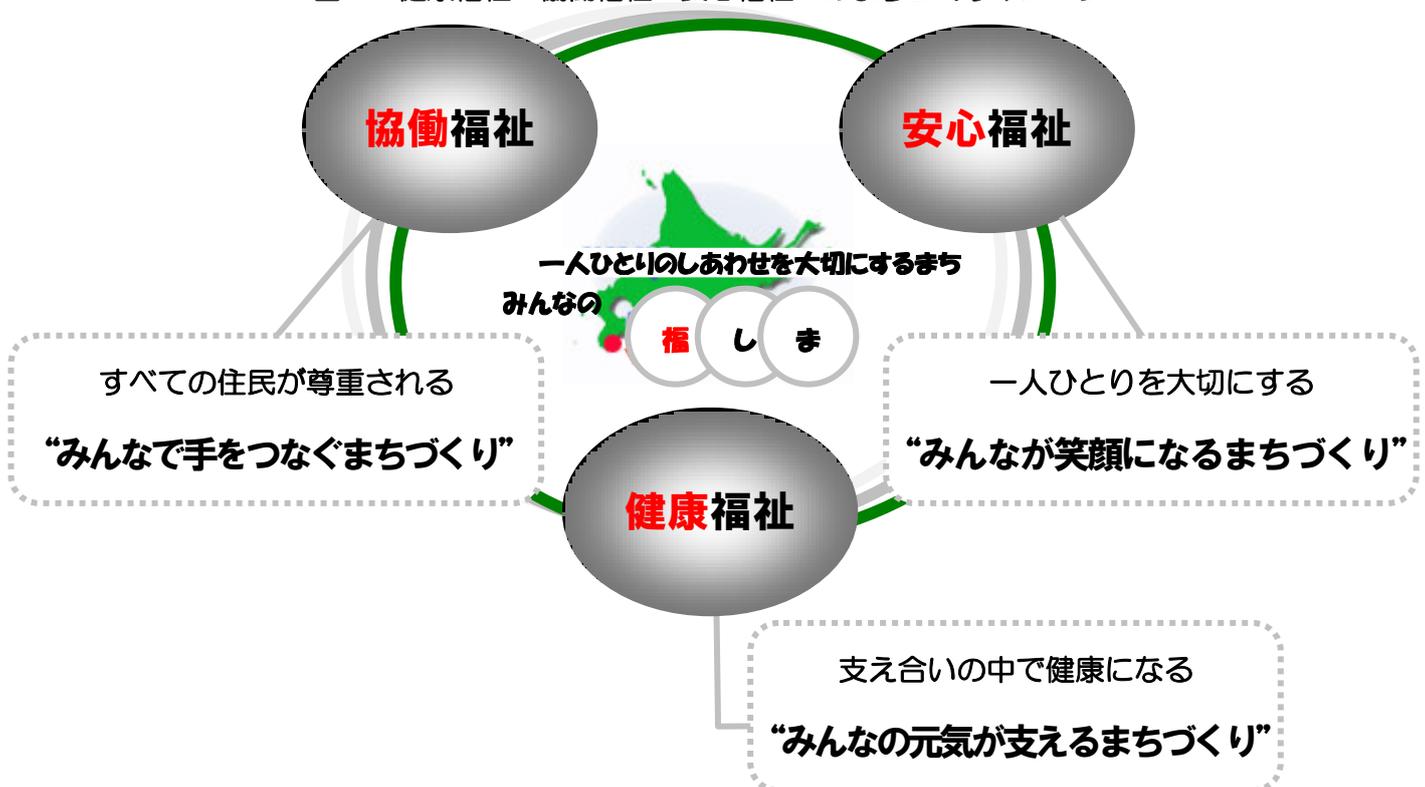
本計画では、住民**みんながしあわせになる**まちをつくるため、支え合いの中で健康になる（**健康福祉**）、男性も女性も、高齢者も若者もみんなが協力し合い（**協働福祉**）、一人ひとりを大切に、みんなが笑顔になる福祉（**安心福祉**）を基本方針と定め、実現する目標を、

一人ひとりのしあわせを大切にするまち みんなの**福**しま

～しあわせ  ランド ぶくしま～

とします。

図 “健康福祉・協働福祉・安心福祉” のまちづくりイメージ



3 施策の体系

目標

視点

一人ひとりのしあわせを大切に
するまち

みんなの福しま

しあわせ
あ
ランド
ふくしま



健康福祉

やってみようかな。

いつも隣の家の雪おろしを手伝っているよ。

わたしもよ。



協働福祉

便利なサービスがあると聞きましたよ。早速社協に相談してみましようね。

ひとり暮らしなので重いものを動かすことができないのよ。



安心福祉

災害が起こったら、うちの地区はどうやってみんなを避難させようか？



基本方針

重点的に行うこと

1 みんなの元気が



支えるまちづくり

1 健康・生きがい

支え合いの中で健康になる

重点①：みんなで健康になろう。

重点②：生きがいをつくろう。

2 みんなで手をつなぐ



まちづくり

2 見守り・相談

すべての住民が尊重される

重点①：見守り活動を広げよう。

重点②：悩みはみんなで解決しよう。

3 みんなが笑顔になる



まちづくり

3 情報・安全安心

一人ひとりを大切にする

重点①：情報収集に上手になろう。

重点②：いざという時に備えよう。

福 **し** **ま** の女性は元気です！

漁から帰ってくる
父さんを待つ浜の
おかあさんは元気。



福島町森づくり協
議会と協働で「お
魚殖やす植樹祭」
も行っています。



「女だけの相撲大
会」には道内、海外
からの参加者や応
援が集まります。





第3章 地域福祉の進め方

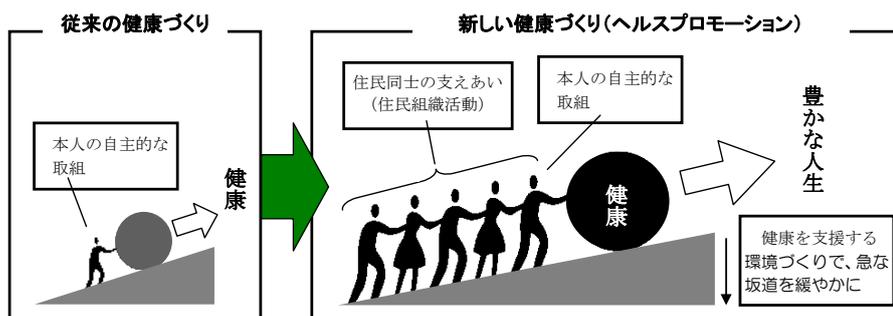


1 みんなが元気なまちづくり(健康・生きがい)

(1) 健康

<現状と考え方>

いきいき健康ふくしま 21 (～健康横綱への挑戦プラン～) の考え方



平成 12 年度に救急まつりでスタートした健康フェスティバルは、住民の健康を何とかしたいとの熱い思いが後押しになって、民間団体が実行委員会を組織して大きなイベントに成長しました。平成 19 年度には「いきいき健康ふくしま 21」(「ふくしま健康横綱への挑戦プラン」)を策定し、栄養・食生活、身体活動・運動、歯と口腔、生活習慣病の予防、がん対策を重点に、住民の主体的な健康づくりを支援しています。健康づくりは一人で行うよりもみんなで取り組んだ方がいいという新しい健康づくりの考え方(ヘルスプロモーション)に基づき、今後は食生活・運動を基礎とした健康づくりを地域の人々で実践し、「健康の連鎖」を広げていくことが大切です。

みなさんからこんな提案がありました！

こんなことが気になるね

- ▼朝食を食べない人が多い。
 - ▼「以前から食べる習慣がない」(44.0%)が最も多い理由。
 - ▼一般町民男性は塩分・糖分・脂肪の摂り過ぎ傾向。
 - ▼青・壮年期(19～44 歳)の女性は意識して運動している人が大変少ない。
- (平成 19 年8月町民アンケートによる)

わたしたちの提案

- 日常生活を通じて、気軽に身体活動の機会を確保できる「ウォーキング・散歩・冬のノルディック・ウォーキング」の効果を広める。
- 人を支えるために自らが健康であることをめざす。

<今後の取組>

重点①：みんなで健康になろう。

- * 朝食を摂って、1日あたり8,000歩以上歩く人を増やそう。
- * 地域で「いきいき健康ふくしま21」を広げよう。

みなさん、やってみましょう!

(住民が行うこと)



- 健康フェスティバルに参加する。
- まず、自分の体重を知ることから健康への関心を高める。
- 気軽に楽しくウォーキングする仲間をつくる。

いっしょにやりましょう!

(地域や関係機関・町が協働すること)



- 健康フェスティバルの企画を充実し、開催を継続する。
- 声を掛け合って、ウォーキング仲間を増やす。

しっかり取り組みます。

(町が行うこと)



- 健康フェスティバルの企画を充実し、開催を継続する。
- 早ね・早おき・朝ごはん運動を推進する。



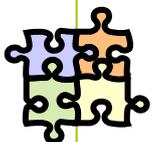
シンボルマーク

- スポーツ大会、健康ウォーキング教室、健康料理教室など健康づくりを支援する。
- 健康レシピを普及して栄養バランスのとれた食事を推進する。
- いきいき教室など介護予防事業を推進する。
- 健康づくりに取り組む住民を支援する「いきいき健康ふくしま21」を推進する。

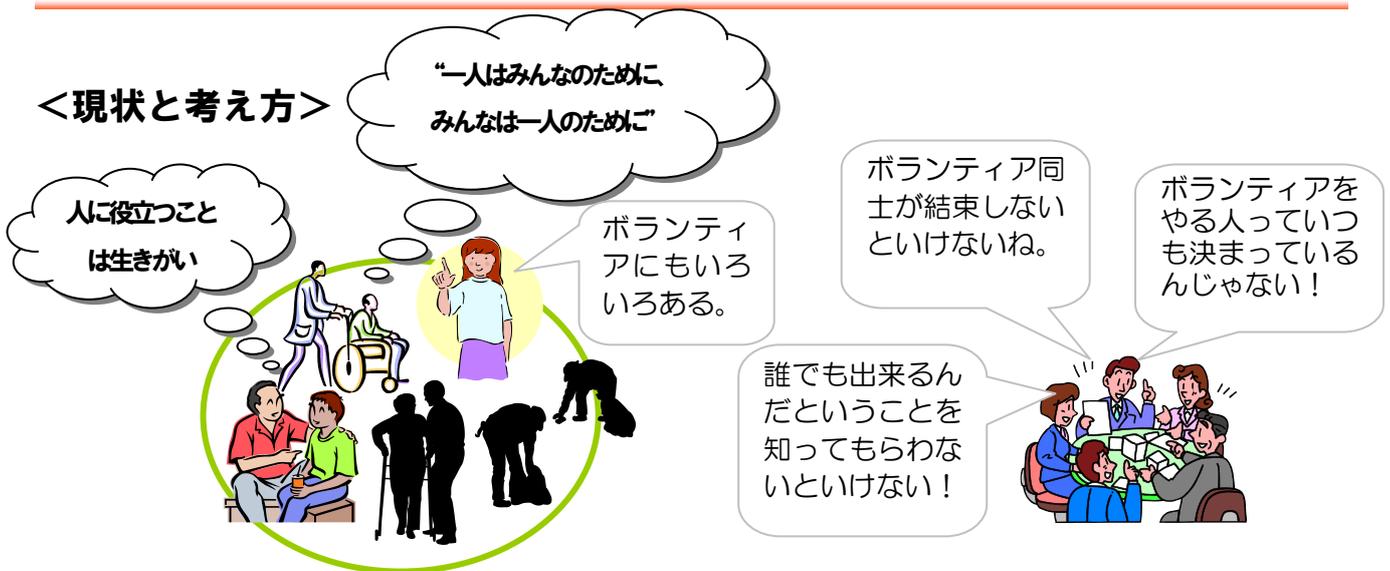
- ・新緑公園の遊歩道などが「新緑公園いきいきコース」として、道が推進している「すこやかロード※」に認定されました。



※道民自らの健康運動を推進するための環境整備の一つとして、身近で気軽に楽しくウォーキングを行うためのコースを認定し、その情報を広く道民に提供することを目的としています。



(2) 生きがい



体の健康と心の健康は健康づくりの両輪の関係にあります。心の健康を維持増進するためには生きがいをつくることも方法の一つです。趣味や学習も生きがいですが、人が喜んでくれること、困った人を助けること、誰かの役に立つこと、社会に貢献できることなどは生きがいとして実感できるものです。「一人はみんなのために、みんなは一人のために (One for all, all for one)」という言葉がありますが、隣人に対する思いやりの心をもつこと、それが高齢になっても自分の居場所を見つけ、人を助けることで生きる喜びを感じる“いくつになっても、いきいきとした、輝く人”をつくっていきます。

これからは自分の生きがいとするためにも、誰もが実践できるボランティア活動を推進し、地域の支え合い活動の仕組みを構築する必要があります。

みなさんからこんな提案がありました！

こんなことが気になるね

- ▼ 老人区クラブに入る人が少ない。
- ▼ 若者が福祉に無関心。
- ▼ ケガをした時の保障があるのか？
- ▼ 同じ人がいつも活動している。
- ▼ 受ける側に素直に受け入れない人がいる。
- ▼ ボランティア活動の中身がわからない。
- ▼ 福祉に関心がある人が多いのに、ボランティア活動も地域活動も何も参加していない人がいる。

わたしたちの提案

- ボランティアニーズを把握する。
 - 安心してボランティアできるよう確実なボランティア保険に加入する。
 - (単発的な犬の散歩、隣のおばあさんの昔話を聞く、温泉場での背中流し等) 個別的ニーズを把握する。
- <長期的視野に立って>
- ポイント制度を導入する。

<今後の取組>

重点②：生きがいをつくらう。

- * 人の役に立つこと（ボランティア）を気軽に経験する機会をつくります。
- * ボランティアすることが励みになるようなボランティアポイント制度を本町の実情に合ったものとして開発していきます。

みなさん、やってみましょう！

（住民が行うこと）



- ボランティア活動への関心を高める。
- 気軽にボランティアを体験してみる。

いっしょにやりましょう！

（地域や関係機関・町が協働すること）



- 支援を希望すること、支援できることをアンケートや聴き取り調査などで把握する。
- ボランティア団体のネットワークをつくり、PRや協働を進める。
- ボランティア保険の加入について、わかりやすい説明をしていく（社協）。
- 小中学生がボランティアを体験できるよう「児童・生徒のボランティア活動支援事業」に積極的に取り組む（社協）。
- 本町に適したボランティアポイント制度を行政と一緒に調査研究していく。

しっかり取り組みます。

（町が行うこと）

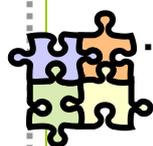


- 広報ふくしまや町ホームページでボランティア活動をPRするなど支援する。
- 小中学校におけるボランティア体験実習の機会を継続する。
- ボランティアが励みとなり、生きがいとなるポイント制を調査研究し、本町に適した制度として検討していく。
- 「防災とボランティアの日」²を制定する。
- “いかす！おせっかい憲章”（仮称）の制定を検討する（第4章 計画の推進を参照）。

・ ボランティアサークルひまわりの会では花いっぱい運動や独居世帯のお弁当プレゼントなど幅広いボランティア活動をしています。

・ ちょいボラではふれあいスポーツ大会、乳幼児健診や健康フェスティバルなど町のイベントでちょっとしたお手伝いをしています。

・ 新日本婦人の会福島支部では毎月第3木曜日・土曜日によみきかせの会を行っています。



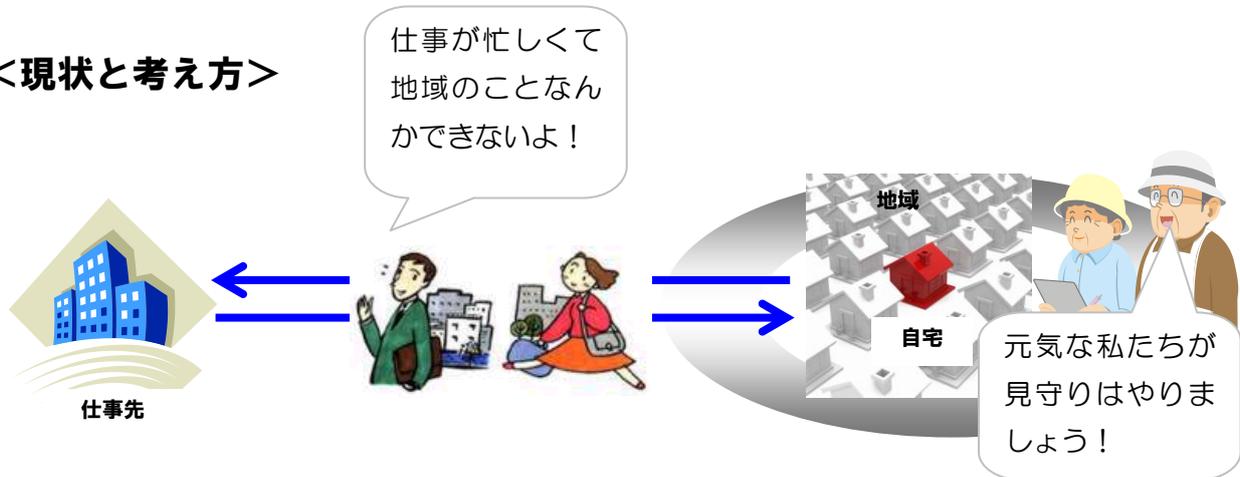
² ボランティアの日：

平成7年1月17日に発生した「阪神・淡路大震災」を踏まえ、災害時におけるボランティア活動及び自主的な防災活動についての認識を深めるとともに、災害への備えの充実強化を図るため、閣議了解により設けられました。「防災とボランティア週間」は毎年1月15～21日まで、「防災とボランティアの日」は毎年1月17日です。

2 みんなで手をつなぐまちづくり(見守り・相談)

(1) 交流

<現状と考え方>



住民アンケートでは、半数以上の住民がひとり暮らし高齢者の見守りを地域で行うべきだと答えています。日常に若者や男性が少ない本町では、留守を預かる女性の力や健康で元気な高齢者の力を借りていかなければなりません。普段から地域にいる住民が中心となって交流を進めながら、ひとり暮らし高齢者の見守りに取り組んでいく必要があります。また、災害時などいざという時のためにも、一人ひとりの意向を尊重しつつ、普段からの交流を深めながら、互いに信頼される人づき合いをしていくことが大切です。

みなさんからこんな提案がありました!

こんなことが気になるね

- ▼ふれあい教室は近くなので参加しやすいが、参加者が少なく、いつも同じ人。
- ▼ふれあい教室は春から秋は月2回だが冬は月1回になってしまう。
- ▼町内会ごとのつながりは深い。それ以外は薄いのではないかと。
- ▼人によって受けとめ方が違い、人と付き合うのは難しい。
- ▼隣近所のことには気にかけている。
- ▼一日顔を見ないと心配な関係。
- ▼社交的でない人はどうすればいいのか。
- ▼独居世帯、老人世帯の憩いの場が少ない。

わたしたちの提案

- 参加を楽しみにしているふれあい教室の回数をもっと増えたら、みんなが集まってひとり暮らし高齢者の状況把握もできるのではないと思う。
- 大人と子どもの挨拶はうまくコミュニケーションがとれているのだから、大人のあいさつ運動をしよう。
- 教室や催し物などが行われる時は、参加するよう近所へ声をかけていこう。

<今後の取組>

重点①：見守り活動を広げよう。

- * ひとり暮らし高齢者の見守りについては、“見守りさん”（仮称）の設置を検討していくとともに、声かけ訪問サービス等各サービス事業者や郵便配達員など日常からの連携を推進します。
- * 街中で誰もがいつでも集まれる“おしゃべりハウス”（仮称）づくりを進めていきます。

みなさん、やってみましょう！

（住民が行うこと）



- “見守りさん”（仮称）に協力する。
- 地域の行事に積極的に参加する。
- 教室や催し物に参加する時は、ご近所にも一声かけて誘い合う。
- “おしゃべりハウス”（仮称）に協力する。

いっしょにやりましょう！

（地域や関係機関・町が協働すること）



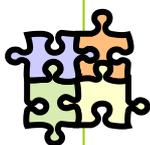
- 町内会、学校などが協力して、全町であいさつ運動を推進する。
- 「回覧板」を回す時に、一声かけることを推進する。
- 空き店舗や空き家などを工夫し、“おしゃべりハウス”（仮称）づくりを推進する。

しっかり取り組みます。

（町が行うこと）



- 定期的な声かけ訪問（声かけ訪問サービス）で高齢者の状態を把握する。
- 総合相談支援事業（包括的支援事業）において、関係機関等と連携し、高齢者の実態を把握する。
- 支援が必要な人に設置する“見守りさん”（仮称）の事業や、郵便局員、水道検針員などとの協力関係とネットワークを築き、日常的な見守りを通して災害時要援護者の支援にもつなげる。
- 空き店舗や空き家などを活用して、街中で誰もがいつでも集まれる“おしゃべりハウス”（仮称）づくりを推進する。
- 役場においても、率先してあいさつ運動を推進する。



- ・ 毎年 10 月、ふれあいスポーツ大会が開催され、高齢者や障がいのある人、保育園児などが一堂に会してレクリエーションやスポーツゲームを楽しみながら交流を深めています。

(2) 相談

<現状と考え方>



住民アンケートでは、困った時の相談や手助けは親族が圧倒的に多く、専門の担当などはごくわずかでした。その原因は、どこへ相談に行ったらいいのかわからないこと、役場に行く交通手段がないなど不便なことが考えられます。

現在の福祉サービスは行政から提供されるものだけではなく、社協や様々な事業者と契約を結んで、複数のサービスを組み合わせて利用することが多くなっています。このためその人の状況に合ったサービスの相談に乗ったり、しっかりと契約できるようお手伝いしたりすることが必要になっています。住民の立場に立った相談しやすい体制をつくり、周囲が連携することが大切です。

みなさんからこんな提案がありました！

こんなことが気になるね

- ▼相談場所がわからない。
- ▼高齢者が相談に来るがどこまで個人で対応しているのかわからない。
- ▼まったく身寄りのない高齢者が増え、介護サービスの手続き、入退院、財産管理などで困っている。
- ▼認知症の人やその家族介護者も心配。
- ▼支援が必要な人に対してどうすればいいのか。

わたしたちの提案

- 相談する場所としての役場（地域包括支援センター含む）、社協の広報や周知を工夫する（共助・公助）
- 地域で日常的に色々な話ができるような人づき合いをする（共助）。

<今後の取組>

重点②：悩みはみんなで解決しよう。

- * わかりやすい相談窓口を推進するとともに、相談の出前に取り組んでいきます。
- * 身近な地域で相談できるよう集える場所やネットワークづくりを進めます。

みなさん、やってみましょう！

(住民が行うこと)



- 思い悩まず、まずは相談する。
- 家族や友人の様子の変化に気をつける。
- 適度な距離感を保ちつつ、隣近所に関心をもつ。

いっしょにやりましょう！

(地域や関係機関・町が協働すること)



- 民生委員・児童委員と町内会が連携し、身近なところで気軽に相談できるよう人材を増やす。
- 身近なところで、地域の人のお世話でいきいきサロンを開き、誰もが気軽に集まっておしゃべりする。

しっかり取り組みます。

(町が行うこと)



- 役場（地域包括支援センターを含む）や社協など相談窓口の一覧表を対処別に作成するなど工夫し、公共施設などに設置する。
- ふれあい教室やイベントでは可能な限り相談窓口を設置し、出前相談を推進する。
- 町のあちらこちらで、いきいきサロンが開催されるよう支援する。
- 複数の機関にまたがる課題について、チームを組んで連携して対応する。

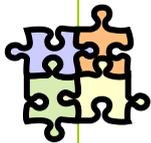
<町のチーム例>

高齢者：「地域包括支援センター」総合相談支援

障がい者：「地域自立支援協議会」

児童：「福島町子育て支援ネットワーク会議」

- ・ 地域包括支援センターでは、介護に関する相談や心配ごとのほか、健康や福祉、医療や生活に関することなど総合的な相談を受け付けています。
- ・ 障がいのある人の相談については、町民課福祉グループ、身体障害者相談員、知的障害者相談員が対応しています。
- ・ 育児の相談については、地域子育て支援センター（ゆりっこ広場）、役場、福島保育所、子育てテレホンサービスで対応しています。
- ・ 役場ではインターネットによる各種行政相談をでも受け付けています。



ゆりっこ広場

■生活	戸籍、住民票、印鑑証明、国民年金などに関すること
■福祉・介護	生活保護、心身に障害のある方、保育、介護保険などに関すること
■保健・環境	国民健康保険、各種検診、健康相談高齢者、ゴミなどに関すること
■教育	教育、生涯学習、文化などに関すること
■防災・選挙	防災、交通、選挙などに関すること
■スポーツ	スポーツ、各種大会などに関すること

こんなときは？

- 要介護認定を受けていないのですが、その場合、地域包括支援センターは利用できないのですか？
- 高齢のみなさんは誰でも、地域包括支援センターを通じて介護予防の支援を受けられます。地域包括支援センターでは、介護予防に関する情報の提供をはじめ、地域の実情に合わせて、介護予防教室の立ち上げなどを支援します。必要と判断されたら、運動器の機能向上や認知症予防などの支援も受けられます。まずは一度、足を運んでみてください。

3 みんなが笑顔になるまちづくり(情報・安全安心)

(1) 情報

<現状と考え方>



住民アンケートから、福祉などの情報源は広報ふくしまや回覧板が圧倒的に多いことがわかりましたが、介護保険サービスなど自分が利用する可能性があるサービスについて知らない高齢者が多く見られました。バスの時刻表やごみの収集日など生活に密着した情報は利用する人の立場に立って作成したり、障がいのある人には援助する必要があります。

みなさんからこんな提案がありました！

こんなことが気になるね

- ▼ 広報・回覧は見ているが、いざとなったら忘れてる。
- ▼ 温泉バスやゴミ処理の表が見にくい。

わたしたちの提案

- 広報・回覧はきちんと個々で管理して必要などきに見返すようにする(自助)。
- 広報・回覧はなお一層の発行を工夫！！読む人の立場になって！！(公助)
- 温泉バスやゴミ処理については、地区ごとの表などをつくって見たらどうか(公助)。

<今後の取組>

重点①：情報収集に上手になろう。

- * 利用する人の立場に立った誰もがわかりやすい、情報提供を行っていきます。
- * 身近な地域の情報により、一人ひとりに役立つ、生きた情報を提供していきます。

みなさん、やってみましょう!

(住民が行うこと)



- 広報ふくしまや回覧版をよく見る。
- 大事な情報、役立つ情報は冷蔵庫など普段、目に付くところに貼っておく。



いっしょにやりましょう!

(地域や関係機関・町が協働すること)



- 広報誌「社協」の内容充実と読みやすさを工夫する。
- ホームページを活用する住民が増えるよう初心者向けパソコン教室を開催する。
- 手話通訳や点字、音読などコミュニケーションを支援する人材を増やす。

しっかり取り組みます。

(町が行うこと)



- 広報ふくしまなど町が発行するものについては、字の大きさ、専門用語、行政用語の排除、カタカナ語の排除などに配慮する。マンガやイラストを多用し、肖像権に留意しながら住民の顔を入れるなど親しみやすい情報誌の作成に取り組む。
- 町ホームページをさらに充実する。
- 障がい者のコミュニケーション支援事業を継続する。
- 住民が必要とする情報をタイムリーに提供する。
- 災害時の連絡も視野に入れた新しい情報通信システムの構築について検討していく。



- ・ 育児相談はメールでも受けつけています。メールは、保健師以外の職員が見ることはありません。町ホームページから入れます。



(2) 安全安心

<現状と考え方>



高齢者の増加に伴って、要介護者あるいは障がい者など災害時の避難に支援が必要な住民は増えています。住民アンケートでは、地域で最も協力すべきこととして「災害時の避難・救助や防災対策」がすべての年代で第1位となっています。

このような住民の意向を踏まえ、日常から要援護者の状況を察知するアンテナとなる人材と、一人暮らし高齢者の見守りなど日常からの支援のネットワークを構築していく必要があります。

また、安全安心に暮らしていくために、子どもや高齢者、障がい者を狙った犯罪や虐待の防止など地域の何気ない“目”や“手”も必要です。

みなさんからこんな提案がありました！

こんなことが気になるね

- ▼災害、犯罪や病気・要介護の町民の対応など安全に暮らすため体制が不足している。
- ▼災害時の避難体制に不安がある。
- ▼災害時に高齢者の避難を援助したいが、どこに誰が住んでいるのかわからない。
- ▼災害時には自分の家族のこともあり、どう動くのかマニュアルはあるのか？
- ▼道路の段差があり車イスや杖利用、歩行器、小さい子どもが歩きづらい。
- ▼子どもの安全な遊び場が心配。
- ▼高齢者でいつも詐欺に遭う人がいるが、なかなかアドバイスを聞き入れてくれない。
- ▼空き家が多くなり、防犯や災害時の問題がある。
- ▼防災無線が聞こえない。

わたしたちの提案

- ハザードマップを作成する。
 - 避難用具を整備する。
 - 地区ごとの避難訓練を行う。
 - ボランティアを募り、地区での体制をつくる。
 - 連絡網をつくる。
 - 町の広報に町内会単位の避難場所の地図を載せる。
 - 避難路を早期に整備する。
- <長期的視野に立って>
- 防災無線の個別受信器を設置する（一部自己負担もあり?）。

<今後の取組>

重点②：いざという時に備えよう。

- * 地域と協力して福島町災害時要援護者プランを推進します。
- * 自分の身は自分で守る意識を普及しながら、地域での防犯・防災対策を推進します。

みなさん、やってみましょう！ (住民が行うこと)



- 避難に心配がある人は災害時要援護者登録台帳の登録を申し出る。
- いざという時のために、緊急連絡先や必要な支援内容をあらかじめ整理し、いつも所持する。
- 可能な限り防災訓練に参加する。
- 日頃から近所の人とかかわりをもつ。

いっしょにやりましょう！ (地域や関係機関・町が協働すること)



- 訪問調査を通じて要援護者を把握するなど災害時要援護者台帳の登録を推進する。
- 日常的な見守りや各種サービスの利用を通じて災害時の体制をつくる。
- 子どもを犯罪や危険から守るための「子ども110番の家」を推進する。
- 小学校の登下校時の防犯・見守り活動を推進する。
- 松前地区防犯協会福島支部が中心となって警察等と連携し、防犯の普及活動を行う。

しっかり取り組みます。 (町が行うこと)



- 災害時要援護者台帳登録の必要性をPRし、推進する。
- 災害時要援護者登録台帳について適切な情報管理を行うとともに、定期的な状況調査と情報更新を行う。
- 町内会単位などで災害時要援護者に配慮した緊急連絡体制を整備する。
- 郵便局員、水道検針員などとの協力関係を築き、災害時要援護者の日常적인見守りを推進する。
- 高齢者などを中心に、保険証、お薬手帳や通帳・印鑑など大切な物を一括にまとめておく“いのちのおたすけ袋”（仮称）の配布を検討する。
- 高齢者や障がいのある人等が緊急に手助けを必要となったときに近隣等に気軽に連絡できる情報通信システムの構築を検討していく。
- 子どもが犯罪等の被害に遭わないよう防犯・見守り活動を支援する。





・「自らの身の安全は自らが守る」ことが防災の基本です。日頃から、その自覚を持ち、平常時から災害に対する備えを心がけるとともに、災害時には自らの身の安全を守るよう行動することが大切です。このため、次のような非常時の持出品を用意しておきましょう。

区分	用意するもの
防災用具	ヘルメットなど保安帽、懐中電灯、ラジオ、マッチ、ナイフなどは必需品です。
衣類	数日分の下着、タオルなど日用品のほか、軍手か手袋も用意しましょう。
食料品	飲料水、乾パン、缶詰、インスタント食品など、保存できるものを備えておきましょう。缶切りも忘れずに。
貴重品	現金、預金通帳、キャッシュカード、印鑑、有価証券などは、一つにまとめておきましょう。

このほか、赤ちゃんがいる家庭では粉ミルク、ほ乳びん、紙オムツ、お年寄りや身体の不自由な方のためにおぶりひも、常備薬など家族構成に合わせて、必要なものをまとめておくと良いでしょう。



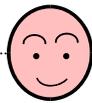


第4章 計画の推進

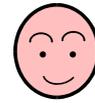
1 地域福祉への参加

この計画は、住民と町内会、行政、民間の福祉サービス事業者等が協働で取り組むべきもので、わたしたち一人ひとりが地域のことに関心を持ち、地域福祉の活動に積極的に参加していくことが必要です。計画の策定に参加した団体をはじめ、地域で活動している団体や行政が、計画の中に盛り込まれた「今後の取組」を踏まえて、地域福祉の推進に積極的にかかわることが大切です。

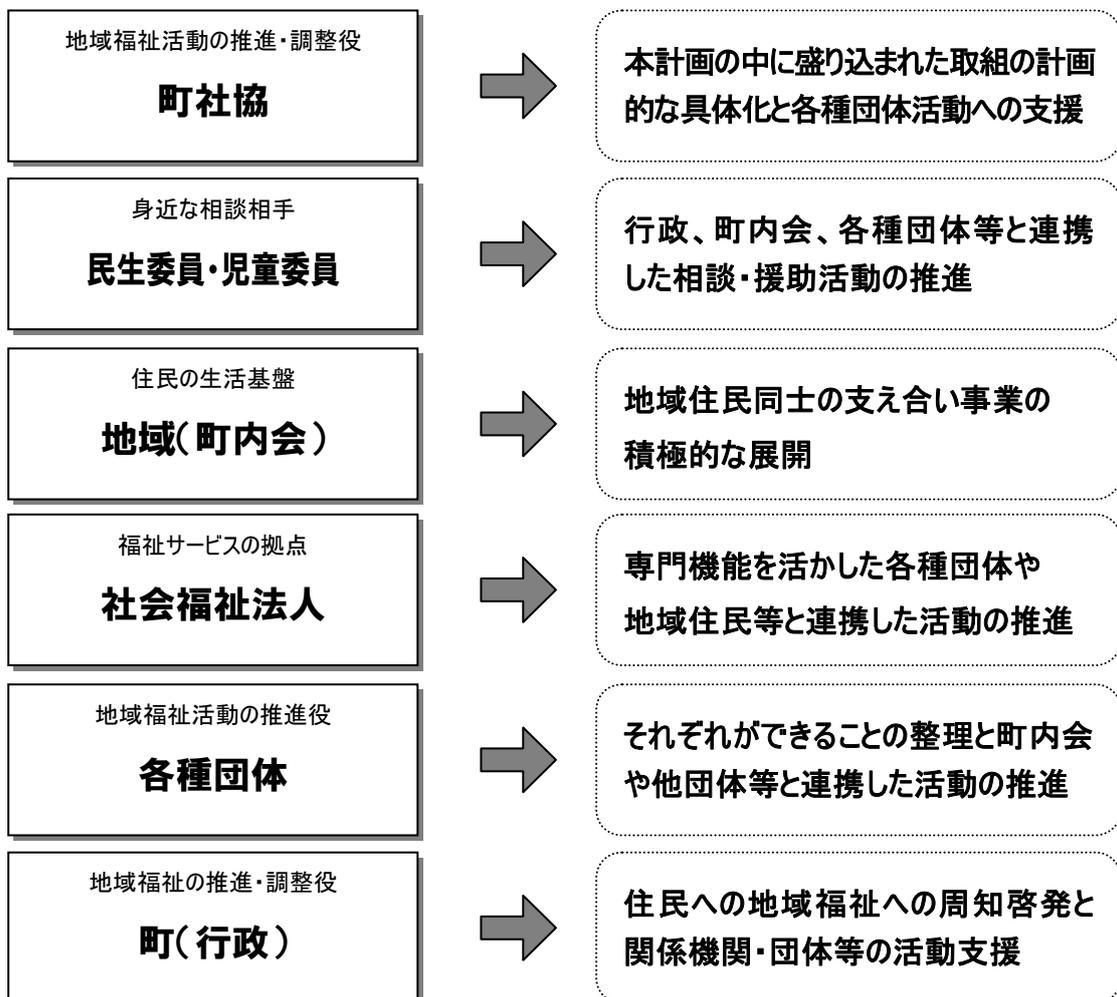
この計画を推進するためには、次のような役割分担で、おのおのが何ができるのかを話し合い、出来ることから着実に取り組んでいきます。



住民一人ひとりの役割



- 身近に困っている人がいたら、自分にできることを考え、行動する。
- 自分の町内会や身近な民生委員・児童委員、社会福祉協議会などの活動に関心を持ち、活動に協力する。
- 困っている人の支援の仲間をつくったり、地域の活動に加わったりする。



本町では、今でも地域の人とのきずなは強く、出来る人が“お世話”（おせっかい）することはあたり前なこととして暮らしてきました。しかし、社会情勢の変化や人口減少が続く中で、ひとり暮らし高齢者など支援が必要な人が増加している今、地域での様々な問題を解決するためには、これまでの一人ひとりの自然派生的なお世話では対応できない状況になっています。このため、“おせっかい”を福祉の共通の考え方として定め、それを地域福祉推進の“力”としていくことを提案するものです。



いかす！おせっかいの3か条

第1:いつまでも“おせっかい”をする側に立てるよう、自らが健康づくりに挑戦する。

第2:おせっかいを受ける側に立った“いかす！おせっかい”を心がけ、愛される“おせっかい人”に挑戦する。

第3:“いかす！おせっかい”仲間を増やしていくことに挑戦する。

2 地域福祉の推進・調整

この計画の推進・調整の役割を担う福島町社会福祉協議会と行政は、次のようなことを行います。

(1) 福島町社会福祉協議会

町社協は、地域の様々な団体で構成され、従来から地域住民を主体とした住民参加により、福祉のまちづくり活動を推進するとともに、行政からの公的な福祉事業を積極的に受託するなど、公共性の高い民間の非営利組織として活動してきた実績があります。

これらの実績を踏まえ、この計画の推進・調整役の1つとして、町社協は住民の福祉ニーズをしっかりと把握することを前提に、「一人ひとりのしあわせを大切にす^まちみんなの福しま～しあわせ 愛 ランド ふくしま～」をめざし、「様々な問題を抱えた人を見過ごすことなく、地域で安心した生活ができるよう、一人ひとりの生活を縦

合的に支援していく」ための実践活動を推進する役割を担います。

(2) 行政（町）

地域福祉の推進にあたっては、住民や関係団体等の自主的な取組が大切です。

町は住民や関係団体等の自主性を尊重しつつ、さまざまな形で協力するとともに、必要に応じて推進・調整を図っていきます。

また、町が主体となって取り組むべき施策を推進するにあたっては、庁内の福祉・保健・企画・教育・人権・防災・建設・情報部門など、部門や組織の枠を超え、施策の検討・調整を行うとともに、住民や関係団体等と協働で地域福祉を推進します。

3 計画・取組の周知

この計画は、広報ふくしまや町ホームページに掲載し、広く住民に周知します。

また、計画に基づいて行われる住民主体の福祉活動や団体による地域福祉の取組についても広報ふくしまや町ホームページを通じて紹介していきます。

4 地域福祉の進み具合の評価

計画の進捗状況の評価にあたっては、地域福祉活動の中心的役割を担う住民、保健・医療・福祉等の関係機関・団体の実務者が評価にかかわる仕組みをつくります。また、本計画に盛り込まれた取組が着実に実践されるよう、実施計画の作成についても町社協と検討していきます。



資料編



1 本町の特性

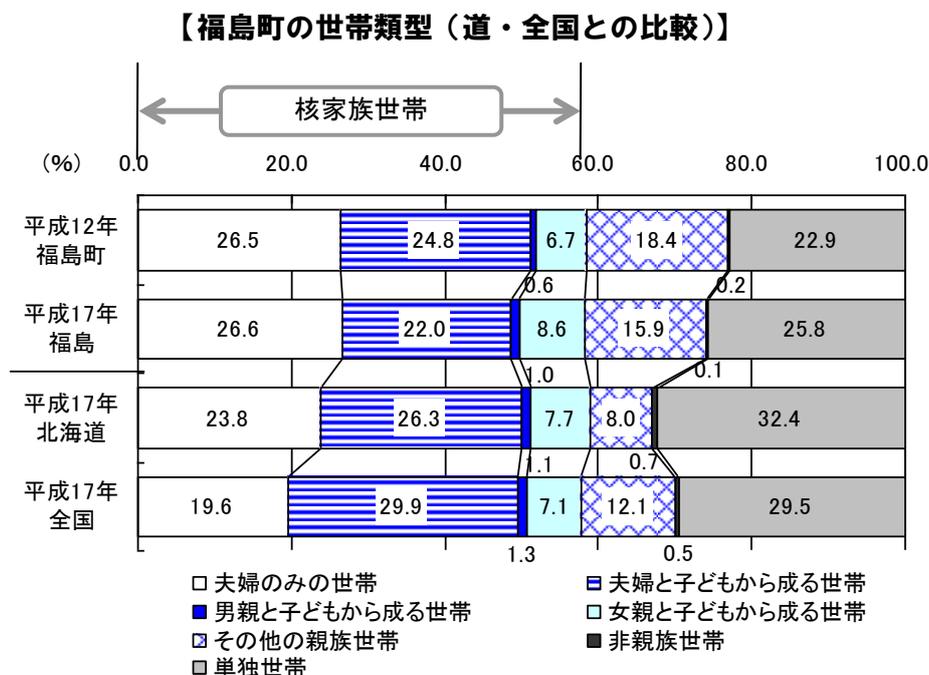
(1) 世帯類型

平成17年における本町の世帯の状況は、「夫婦のみの世帯」が26.6%、「夫婦と子どもから成る世帯」が22.0%、「男親と子どもから成る世帯」が1.0%、「女親と子どもから成る世帯」が8.6%となっており、これらを合わせた“核家族世帯”が58.2%と6割近くに上ります。一方、3世代同居などの「その他の世帯」は15.9%、単独世帯（ひとり暮らし）は25.8%となっています。

“核家族世帯”は道（58.9%）・全国（57.9%）と大きな違いはありませんが、「単独世帯」や「夫婦と子どもから成る世帯」が少なく、「その他の世帯」がたいへん多いという特徴があります。

しかし平成12年と比べると、「夫婦と子どもから成る世帯」と「その他の世帯」が減少し、「単独世帯」が増加しました。

福島町では核家族や3世代同居が減り、ひとり暮らし世帯が増えています。



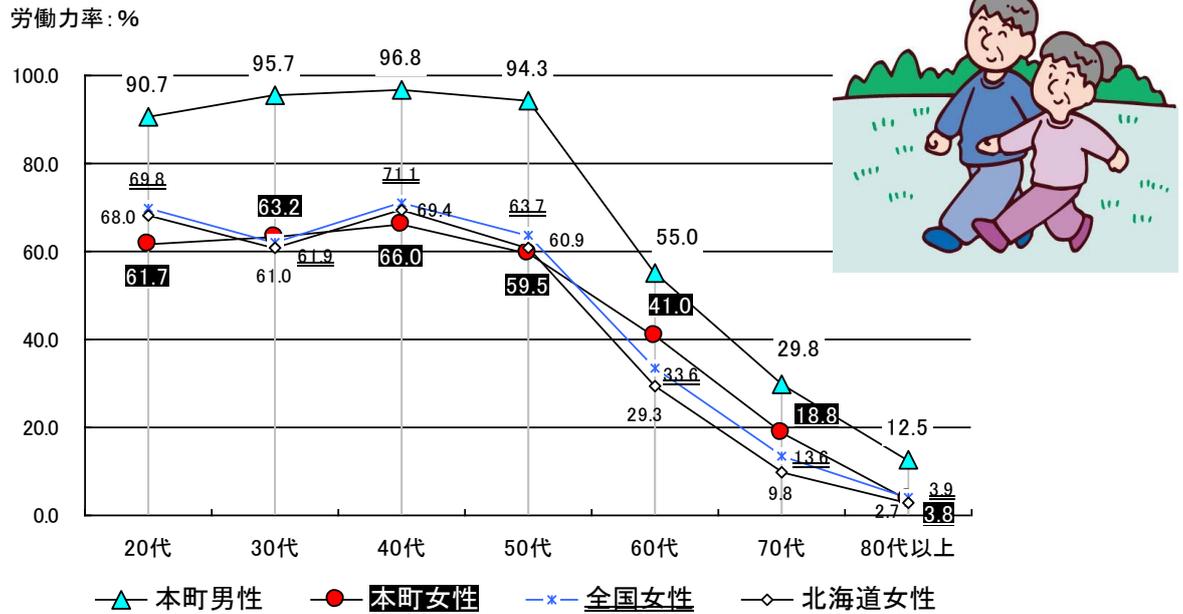
資料：各年国勢調査

(2) 就業構造

本町では50代以下の女性の労働力率³は全国に比べ低いです。60代及び70代では高くなっており、働く高齢女性が多いことを示しています。

福島町は60～70代の働く女性が多いまちです。

【福島町の働く住民の割合】

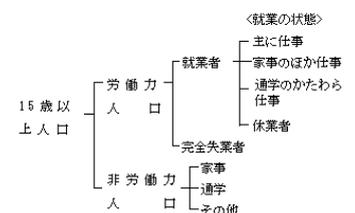


(%)	男性			女性		
	本町	北海道	全国	本町	北海道	全国
20代	90.7	78.0	78.5	61.7	68.0	69.8
30代	95.7	90.9	92.0	63.2	61.0	61.9
40代	96.8	93.7	94.0	66.0	69.4	71.1
50代	94.3	93.0	92.9	59.5	60.9	63.7
60代	55.0	59.9	62.6	41.0	29.3	33.6
70代	29.8	23.2	29.2	18.8	9.8	13.6
80代以上	12.5	8.9	12.7	3.8	2.7	3.9

資料：平成17年国勢調査

³ 労働力人口：

15歳以上の人口に占める労働力人口の割合で完全失業者を含みます。15歳以上の者について、平成17年9月24日から30日の調査週間に「仕事をしたかどうかの別」により区分（右記参照）。



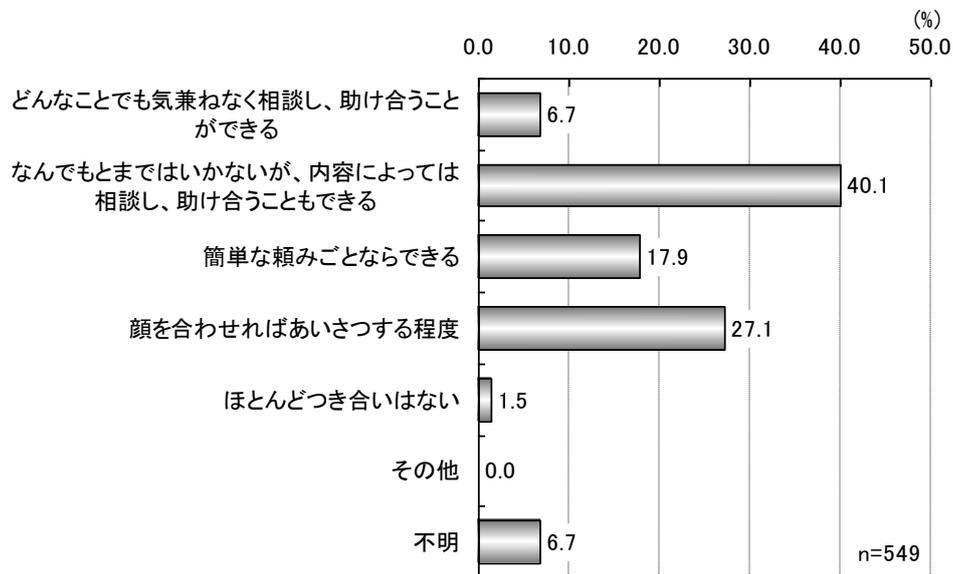
2 アンケートの主な結果

(1) 地域のつながり

助け合うことができるつき合いをしている人は 46.8% (40.1%+6.7%) と半数を下回り、「簡単な頼みごとならできる」を含めると、ある程度助け合うことができるつき合いをしている人はおよそ 65% となっています。一方で、あいさつする程度の軽いつき合いは 30% 弱です。

**ある程度助け合うことができるつき合いをしている
住民は 3分の2 近く。**

【となり近所や地域の人とどの程度のおつき合いがありますか (1つに○)】



(2) 福祉への関心

福祉に関心がある人は9割近くに上りますが、若い世代で福祉への関心がやや低い傾向にあります。

福祉に関心がある人は少なくありません。

【「福祉」について関心がありますか (1つに○)】

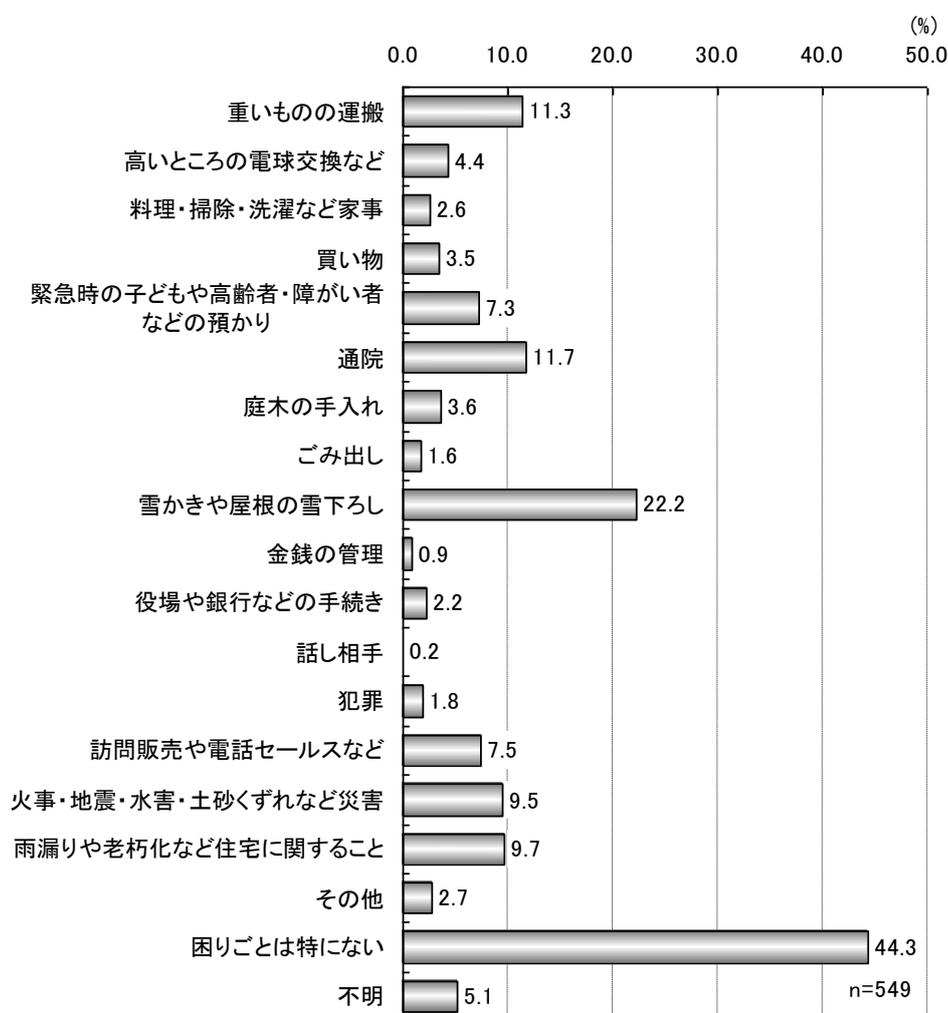


(3) 困っていること

最も多い困りごとは「雪かきや屋根の雪下ろし」が2割強、「重いものの運搬」が1割強となっています。ひとり暮らしで困ることは「雪かきや屋根の雪下ろし」「重いものの運搬」「高いところの電球交換など」「料理・掃除・洗濯など家事」の順です。

ひとり暮らしでは雪かきや雪下ろしのほか電球交換など軽易なことにも困っています。

【ふだんの暮らしの中で次のような困りごとはありますか（あてはまるものに○）】

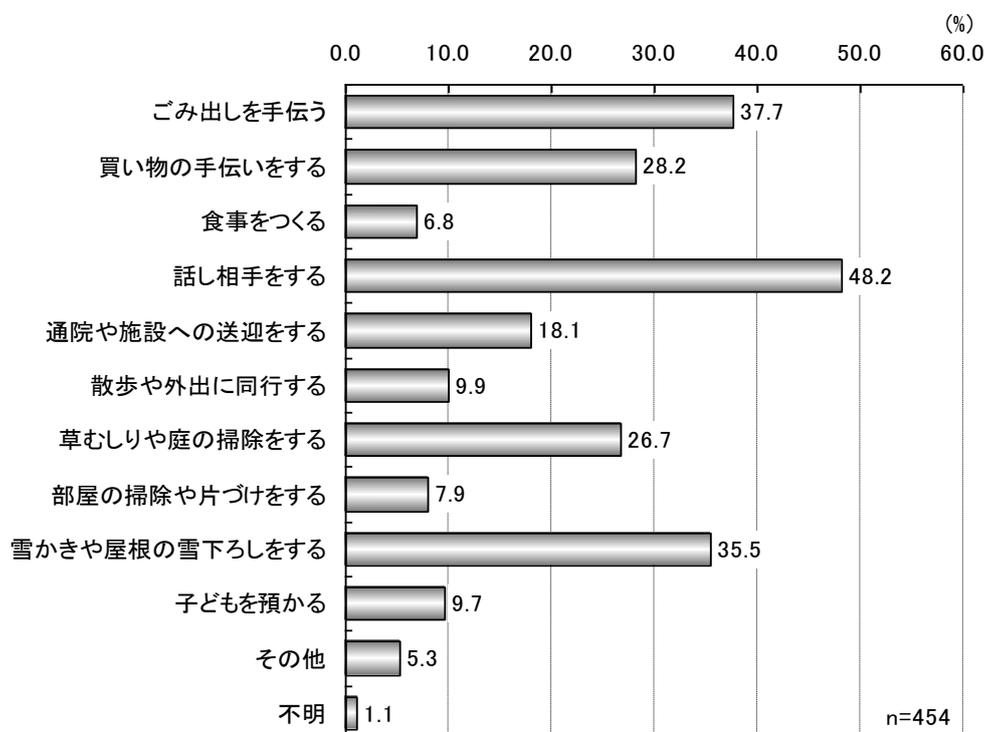


(4) 困っている人に手助けしたいこと

地域で悩みや困っている世帯に手助けしたいと答えた人に、手伝う内容を聞いたところ、「話し相手」が最も多く、次いで「ごみ出し」「雪かきや屋根の雪下ろし」が続いています。雪かきや雪下ろしは40代以下、買い物の手伝いは50代が多くなっています。

手助けできることは力仕事や話し相手など様々です。

【それは、どのような手伝いですか（あてはまるものに○）】



※ 前問で「手助けしたい」と回答した454人について行った設問

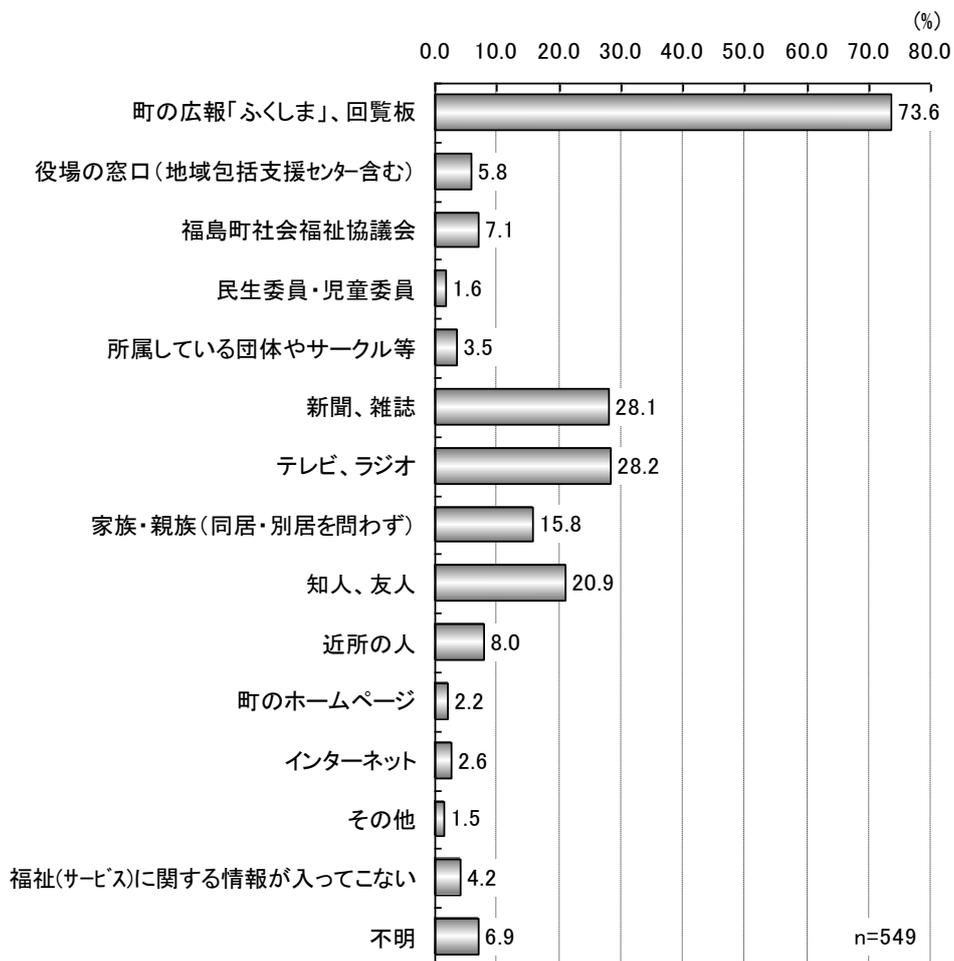


(5) 暮らしの情報

福祉など暮らしの情報はどの年代も広報「ふくしま」や回覧板から得ている人が圧倒的多数です。

福祉など暮らしの情報は広報紙や回覧板からが圧倒的です。

【福祉サービスに関する情報を主にどこから得ていますか（3つまでに○）】

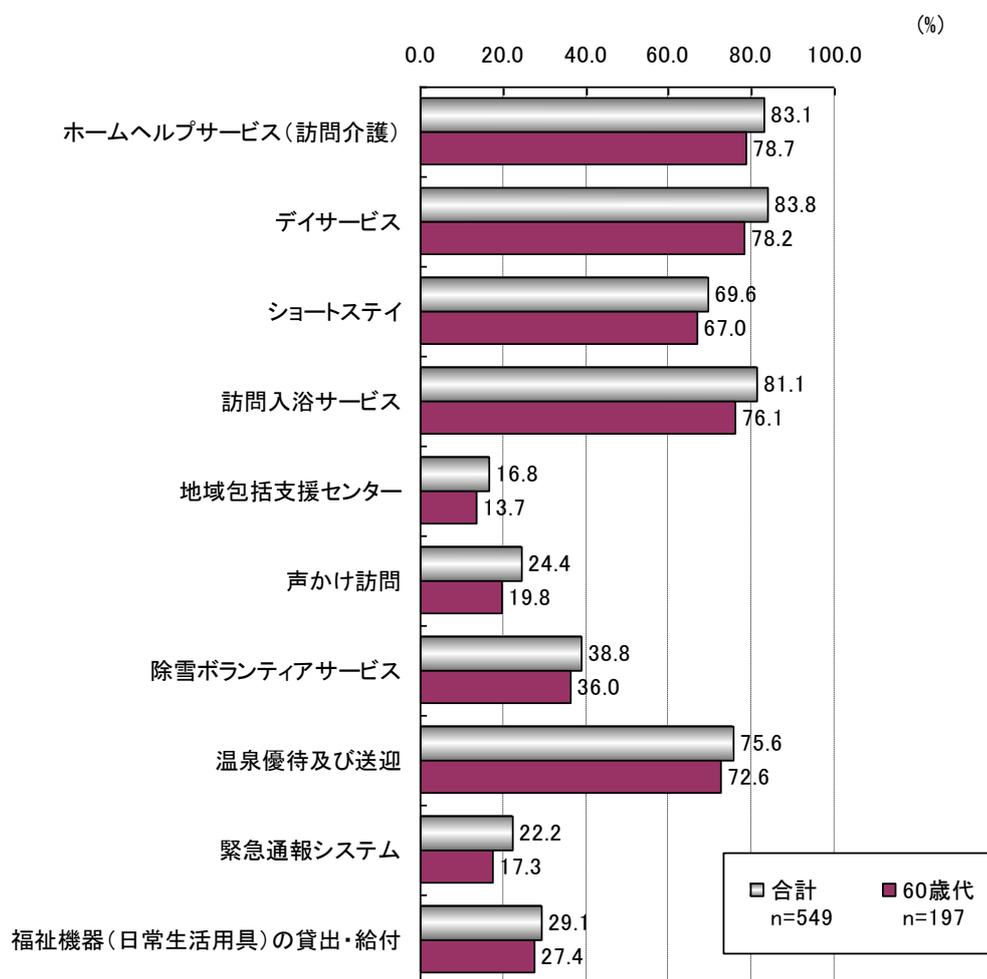


(6) 保健・福祉・介護サービスの認知度

「デイサービス」「ホームヘルプサービス（訪問介護）」「訪問入浴サービス」を知っているとする人は8割を超えていますが、60歳代では利用の可能性があるデイサービスや緊急通報システムをはじめ、すべてのサービスについて全体（合計）に比べ認知度が低くなっています。

60歳代では利用する可能性があるサービスを知らない人が多いです。

【次の保健・福祉・介護サービスを知っていますか（あてはまるものに○）】

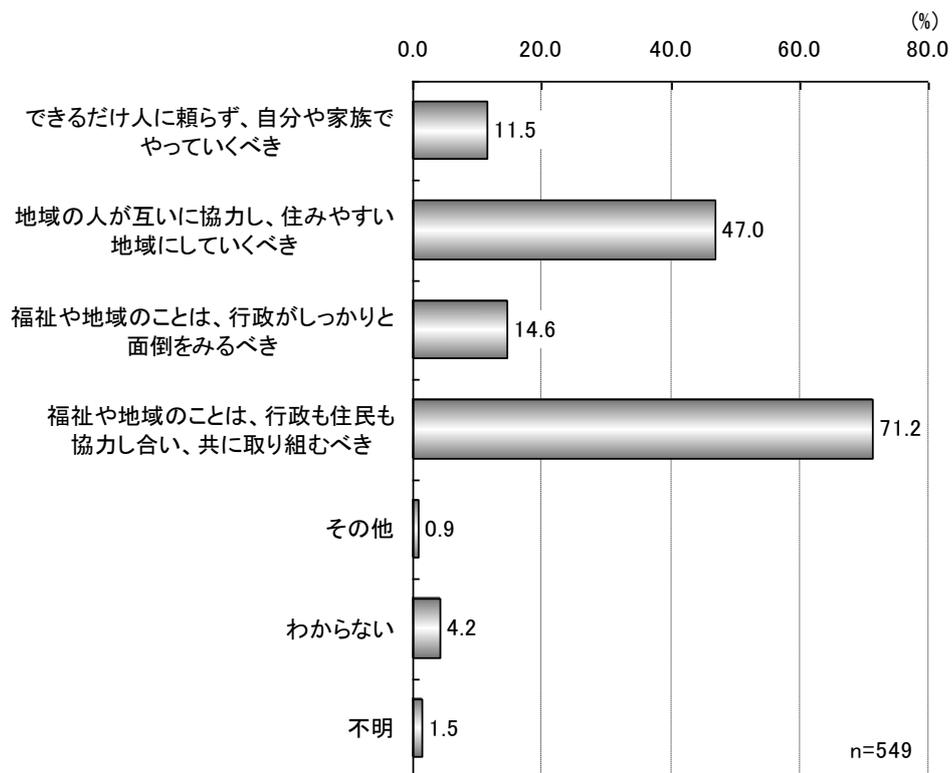


(7) これからの福祉と取り組むべき施策

これからの福祉は行政と住民が協働すべきとする人が7割を超えています。また、地域の人が互いに協力するべきも5割弱に上ります。

福祉や地域のことは行政と住民が協働すべきが7割を超えています。

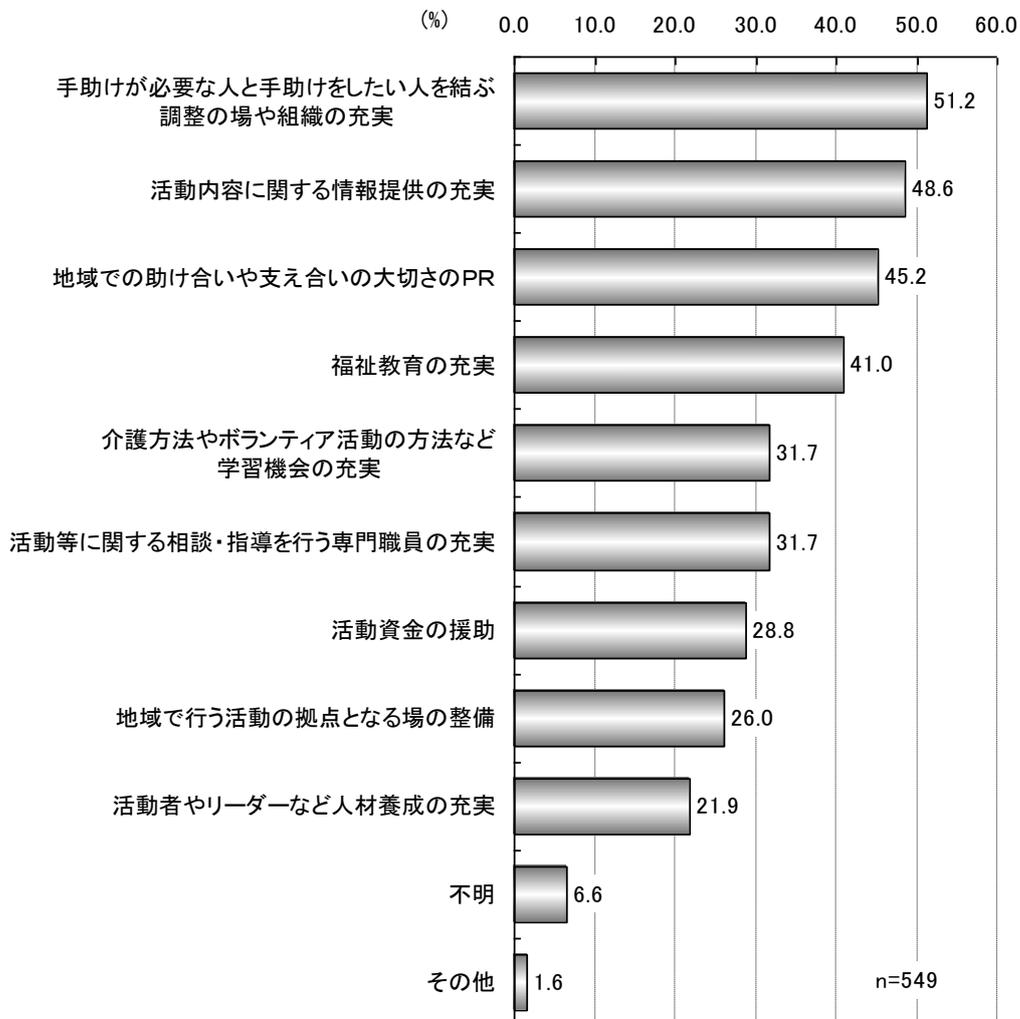
【これからの福祉について、あなたはどのように考えますか（2つまでに○）】



地域での助け合いや支え合いの活動の輪を広げていくために最も必要なことの上位2項目は、「助けが必要な人と助けたい人とを結ぶ組織の充実」と「地域活動の情報提供の充実」です。次いで、「地域での助け合いや支え合いの大切さのPR」「学校教育や社会教育などを通じた福祉教育の充実」が続いています。

【地域での助け合いや支え合いの活動の輪を広げるために、今後特にどのようなことが重要だと思いますか（5つまでに○）】

助け合い活動を推進するためには、組織の充実や情報提供など多様な施策が望まれています。



テーマ1 サービスを豊かに利用するための情報・相談

グループ 秋桜（コスモス） メンバー 住吉、佐藤、三影、諏訪、工藤（クニ）、塚本（リーダー）、山田（記録・進行）、塚本・花田（発表）

わがまちがめざすこと(目標)

わたしたちの提案

■情報を必要とする人の立場に立った情報提供と自ら知るための努力・工夫をしよう！！

そのためにみんなが改善すべき点は？

<地区懇談会で出た課題>

- ▼せっかくの防災無線が聞こえない。
- ▼広報・回覧は見ているが、いざとなったら忘れてる。
- ▼温泉バスやゴミ処理の表が見にくい。
- ▼相談場所がわからない。

<策定委員会で出た課題>

- 高齢者のひとり暮らしが不安。
- 高齢者が相談に来るがどこまで個人で対応しているのかわからない。
- まったく身寄りのない高齢者が増え、介護サービスの手続き、入退院、財産管理などで困っている。
- 認知症の人やその家族介護者も心配。
- 支援が必要な人に対してどうすればいいのか。

効果大～2年以内にする

- 広報・回覧はきちんと個々で管理して必要なときに見返すようにする（自助）。
- 広報・回覧はなお一層の発行を工夫！！読む人の立場になって！！（公助）
- 温泉バスやゴミ処理については、地区ごとの表などをつくってみたらどうか（公助）。
- 相談する場所として役場、社協の広報や周知を工夫する（共助・公助）
- 地域で日常的に色々な話ができるような人づきあいをする（共助）。

効果小～2年以内にする

効果大～2年より後です

- 防災無線の個別受信器を設置する（一部自己負担もあり？）。

効果小～2年より後です

テーマ2 地域のきずな

グループ	ひまわり	メンバー	西田、中山、新山、堀井、高田、坂口（リーダー・発表）、工藤（泰）（記録・進行）
------	------	------	---

わがまちがめざすこと(目標)

■家族のようなきずなで結ばれているまち！！

そのためにみんなが改善すべき点は？

<地区懇談会で出た課題>

- ▼若い人がいないので年寄りだけで、困っていること（ひざの調子が悪いが運動したい、避難場所がわからない、避難路の山道は登れないが避難できるのか等）の持っていき先がわからない。
- ▼ふれあい教室は近くなので参加しやすいが、参加者が少なく、いつも同じ人。
- ▼ふれあい教室は春から秋は月2回だが冬は月1回になってしまう。
- ▼老人区クラブに入る人が少ない。
- ▼町内会ごとのつながりは深い、それ以外は薄いのではないか。
- ▼人によって受けとめ方が違い、人と付き合うのは難しい。

<策定委員会で出た課題>

- 共働き家庭の子どもが行き場として託児所、児童館がない。
- 独居世帯、老人世帯の憩いの場が少ない。
- 独居世帯、老人世帯が増えており心配。
- 若者が地元を離れてしまう。
- ごみを川に捨てる人がいる。
- ごみの分別が悪い。
- 夜のウォーキングスタイルに気をつけてほしい。
- 母親や女性が子どもの前でたばこを吸うのはどうなのか。
- 非社交的な人への対応に苦慮しているが、どうすればいいのか。

わたしたちの提案

効果大～2年以内にする

- 挨拶は基本（大人と子どもの挨拶はうまくコミュニケーションがとれている）。
- 教室や催し物などが行われる時は、参加するよう近所へ声をかけていく。

吉岡のよいところは

- ・ 隣近所のことは気にかけている。
- ・ 一日顔を見ないと心配な関係。
- ・ あいさつはみんながしている。
- ・ 温泉があって助かる。
- ・ 吉岡に病院があるので安心。
- ・ 吉岡の中に病院、郵便局、店があり便利。

効果大～2年より後でする

テーマ3 安全安心なくらし

グループ	やまゆり	メンバー	木村、菊池、平沼、小笠原（幸）、澤田、福井（記録）
------	------	------	---------------------------

わがまちがめざすこと(目標)

■みんなで協力していざという
 ときのために備えるまち！！

そのためにみんなが改善すべき点は？

<地区懇談会で出た課題>

- ▼各地区の避難場所が明確でない。
- ▼防災に対する町の周知が遅い(情報手段の不足)。
- ▼要介護者等の避難用具(車椅子、タンカー等)がない。
- ▼町民すべてが避難場所をわかっていない。
- ▼ハザードマップがない。
- ▼地区ごとのボランティアが少ない。
- ▼要介護者等が町内会では把握できない。
- ▼町内会の連絡網がない。
- ▼災害、犯罪や病気・要介護の町民の対応など安全に暮らすため体制が不足している。

<策定委員会で出た課題>

- 災害時の避難体制に不安がある。
- 防災無線が聞きづらい。
- 災害時に高齢者の避難を援助したいが、どこに誰が住んでいるのかわからない。
- 災害時には自分の家族のこともあり、どう動くのかマニュアルはあるのか？
- 道路の段差があり車イスや杖利用、歩行器、小さい子どもが歩きづらい。
- 子どもの安全な遊び場が心配。
- 高齢者でいつも詐欺に遭う人がいるが、なかなかアドバイスを聞き入れてくれない。
- 空き家が多くなり、防犯や災害時の問題がある。
- 空き家の財産としての処理はどうなっているのか。

わたしたちの提案

効果大～2年以内にする

- ハザードマップを作成する。
- 避難用具を整備する。
- 地区ごとの避難訓練を行う。
- ボランティアを募り、地区での体制をつくる。
- 連絡網をつくる。
- 町の広報に町内会単位の避難場所の地図を載せる。
- 避難路を早期に整備する。

効果小～2年以内にする

効果大～2年より後でする

効果小～2年より後でする

テーマ4 ボランティア

グループ	福&福	メンバー	竜川、長谷川、川口、塚本、小笠原（実）、金沢、山名（発表）、木村（記録）
------	-----	------	--------------------------------------

わがまちがめざすこと(目標)

■全住民(特に若者)がボランティアになる町へ

そのためにみんなが改善すべき点は？

- <地区懇談会で出た課題>
- ▼若者が福祉に無関心。
 - ▼ケガをした時の保障があるのか？
 - ▼同じ人がいつも活動している。
 - ▼受ける側に素直に受け入れない人がある。
 - ▼ボランティア活動の中身がわからない。
- <策定委員会で出た課題>
- 福祉に関心がある人が多いのに、ボランティア活動も地域活動も何も参加していない人がいる。

わたしたちの提案

効果大～2年以内にする

- ボランティアニーズを把握する。
- 確実なボランティア保険に加入する。

効果小～2年以内にする

- (短期の犬の散歩、隣のおばあさんの昔話を聞く、温泉場での背中流し等) 個別的ニーズを把握する。

効果大～2年より後でする

- ポイント制度を導入する。

効果小～2年より後でする

-

福島町

地域福祉計画策定のための
アンケート調査

結果報告書

平成21年10月

町民課

目次

I 調査の概要

1. 調査の概要	2
(1) 調査目的	2
(2) 調査対象及び調査方法等	2
(3) 回収結果	2
2. 数値の基本的な取り扱いについて	2

II 調査結果

1. 対象者の属性	4
(1) 性別	4
(2) 年齢	4
(3) 職業	5
(4) 居住地区	6
(5) 家族類型	6
(6) 家族の中で何らかの援助が必要な人の有無	7
2. 暮らしの中で困ったことや情報について	8
(1) 困りごと	8
(2) 手助けを頼みたい人	10
(3) 福祉サービスの情報源	11
3. 保健・福祉・介護サービスについて	12
(1) 保健・福祉・介護サービスの認知度	12
(2) 保健・福祉・介護サービスの利用	14
4. 災害時について	16
(1) 緊急情報を知る手段	16
(2) 災害時の避難	17
(3) 災害時の避難ができない理由	18
5. 地域でのつき合いやつながりについて	19
(1) つき合いの状況	19
(2) 近所づきあいの意向	21
(3) 近所づきあいへの満足度	23
6. 地域での活動について	25
(1) この1年間の地域の行事や催しへの参加状況	25
(2) 地域の行事や催しに参加しなかった理由	27
(3) 地域で協力したほうがよいと思う事	29

7. 地域の福祉について.....	32
(1) 近所や地域の中で手助けできること.....	32
(2) 手伝えること.....	33
(3) 福祉への関心.....	34
(4) 福島町社会福祉協議会の認知度.....	35
(5) これからの福祉への考え.....	36
(6) 地域社会に支えられているか.....	38
(7) 支え合い活動の発展に必要な事.....	39

III 自由意見

IV 資料：アンケート票

I 調査の概要

1. 調査の概要

(1) 調査目的

「健康で生きがいのある、安心して暮らすことのできるまち」をめざし、町民、行政、福祉関係者などが互いに助け合い、支えあう仕組みを共に考えていくための「福島町地域福祉計画」の策定にあたって、「地域福祉」に関する町民のご意見やご要望を収集するために実施しました。

(2) 調査対象及び調査方法等

調査対象	福島町に居住する 18 歳以上町民
標本数	1,000
抽出法	無作為抽出
調査方法	郵送による配布・回収
調査時期	平成 21 年 8～9 月

(3) 回収結果

配布数(票) A	回収数(票) B	回収率 B/A
1,000	回収数 549	回収率 54.9%
	有効回収数 549	有効回収率 54.9%

2. 数値の基本的な取り扱いについて

- ①比率はすべて百分率(%)で表し、小数点以下2位を四捨五入して算出しています。従って、合計が 100%を上下する場合があります。
- ②基数となるべき実数は、 $n=〇〇〇$ として掲載し、各比率は n を 100%として算出しています。
- ③質問に(MA)とある問は、1人の回答者が2つ以上の回答を出してもよい問であり、従って各回答の合計比率は 100%を超える場合があります。
- ④図表として示したものの中には「無回答者(不明)」を省略した部分があります。そのため、区分ごとの実数(n の値)の合計が全体の標本数と一致しないことがあります。
- ⑤ n の値が 30 以下の場合には回答者が少ないために、1人の回答結果が比率(%)の変動を大きくします。そのためコメントしていない場合があります。

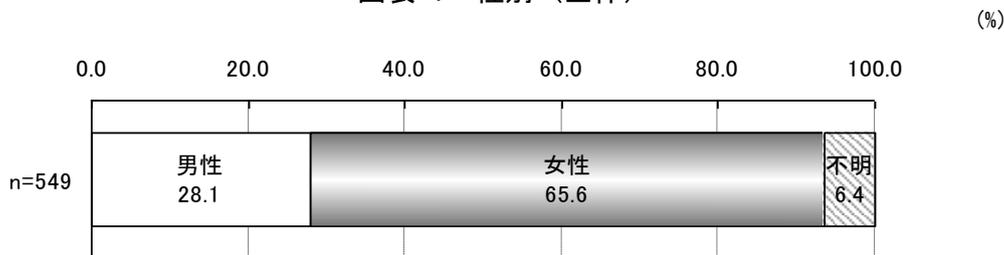
Ⅱ 調査結果

1. 対象者の属性

(1) 性別

「男性」が 28.1%、「女性」が 65.6%となっています。

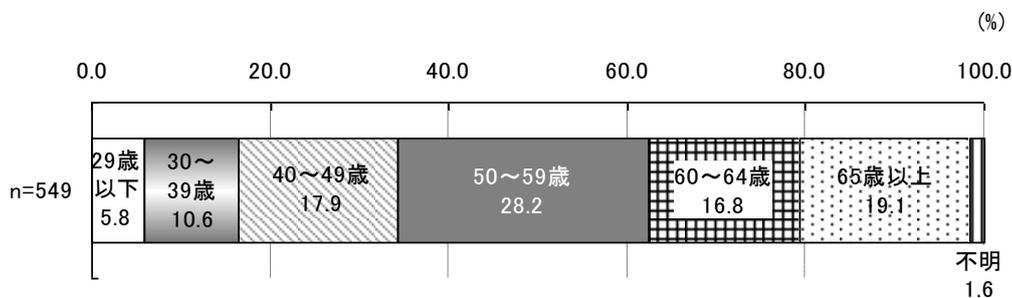
図表 1 性別（全体）



(2) 年齢

「50～59 歳」が 28.2%と最も多く、「65 歳以上」(19.1%)、「40～49 歳」(17.9%)、「60～64 歳」(16.8%)、「30～39 歳」(10.6%)、「29 歳以下」(5.8%)の順となっています。29 歳以下を除いた年代ですべて女性が男性の2倍以上となっており、30 歳代以上では女性の回答が反映される傾向となります。

図表 2 年齢（全体）



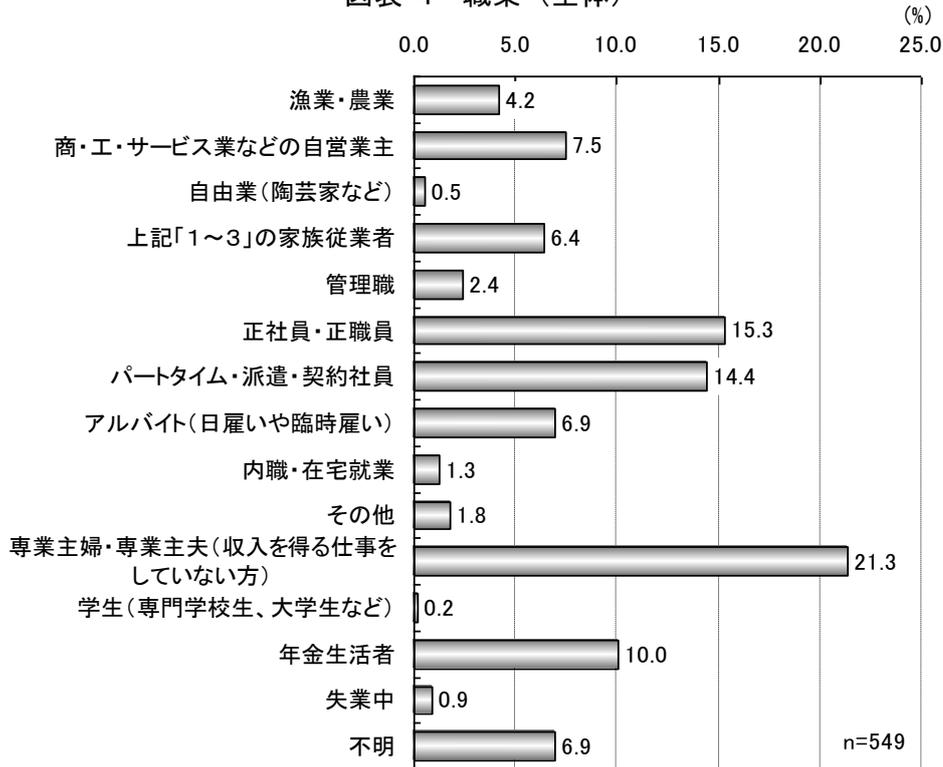
図表 3 年齢（性別）

	全体	男性	女性	不明
合計	549 100.0	154 28.1	360 65.6	35 6.4
29歳以下	32 100.0	13 40.6	18 56.3	1 3.1
30～39歳	58 100.0	17 29.3	39 67.2	2 3.4
40～49歳	98 100.0	27 27.6	69 70.4	2 2.0
50～59歳	155 100.0	47 30.3	99 63.9	9 5.8
60～64歳	92 100.0	23 25.0	66 71.7	3 3.3
65歳以上	105 100.0	27 25.7	64 61.0	14 13.3
不明	9 100.0	0 0.0	5 55.6	4 44.4

(3) 職業

「専業主婦・専業主夫(収入を得る仕事をしていない方)」が 21.3%と最も多く、「正社員・正職員」(15.3%)、「パートタイム・派遣・契約社員」(14.4%)、「年金生活者」(10.0%)、「商・工・サービス業などの自営業主」(7.5%)、「アルバイト(日雇いや臨時雇い)」(6.9%)、「家族従業者」(6.4%)などが続いています。

図表 4 職業 (全体)



職業を下表のようにグループ分けして年齢との関係を見ると、無職・学生の方は概ね 65 歳以上が 31.5%、60～64 歳と 50 歳代が 20%台となっています。

グループ	内容
自営・自由業など	漁業・農業、商・工・サービス業などの自営業主、自由業(陶芸家など)、「1～3」の家族従業者
会社・組織などに勤めている方	管理職、正社員・正職員、正社員・正職員、アルバイト(日雇いや臨時雇い)、内職・在宅就業、その他
無職・学生の方	専業主婦・専業主夫(収入を得る仕事をしていない方)、学生(専門学校生、大学生など)、年金生活者、失業中

図表 5 職業 (年齢)

	全体	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65歳以上	不明
合計	549	32	58	98	155	92	105	9
	100.0	5.8	10.6	17.9	28.2	16.8	19.1	1.6
自営・自由業など	102	4	10	23	25	20	20	0
	100.0	3.9	9.8	22.5	24.5	19.6	19.6	0.0
会社・組織などに勤めている方	231	21	32	55	79	21	19	4
	100.0	9.1	13.9	23.8	34.2	9.1	8.2	1.7
無職・学生の方	178	5	15	16	39	43	56	4
	100.0	2.8	8.4	9.0	21.9	24.2	31.5	2.2
不明	38	2	1	4	12	8	10	1
	100.0	5.3	2.6	10.5	31.6	21.1	26.3	2.6

(4) 居住地区

福島地区が70.3%、吉岡地区が18.9%です。

図表 6 居住地区（全体）

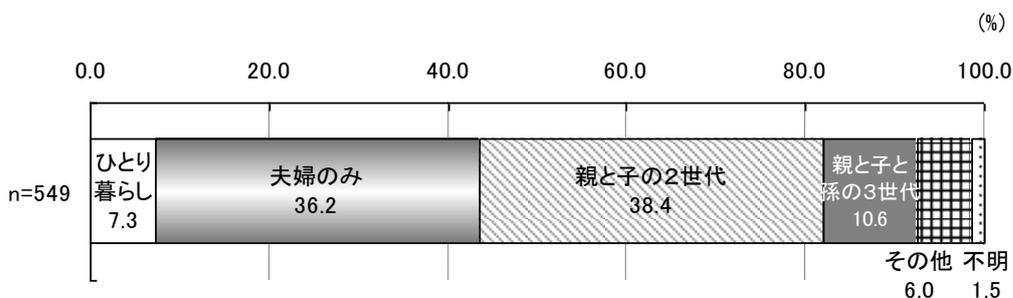


(5) 家族類型

「親と子の2世代」が38.4%、「夫婦のみ」が36.2%、「親と子と孫の3世代」が10.6%、「ひとり暮らし」が7.3%の順となっています。

地区の特色として、吉岡地区では「親と子と孫の3世代」(15.4%)が多くなっています。

図表 7 家族類型（全体）



図表 8 家族類型（地区別）

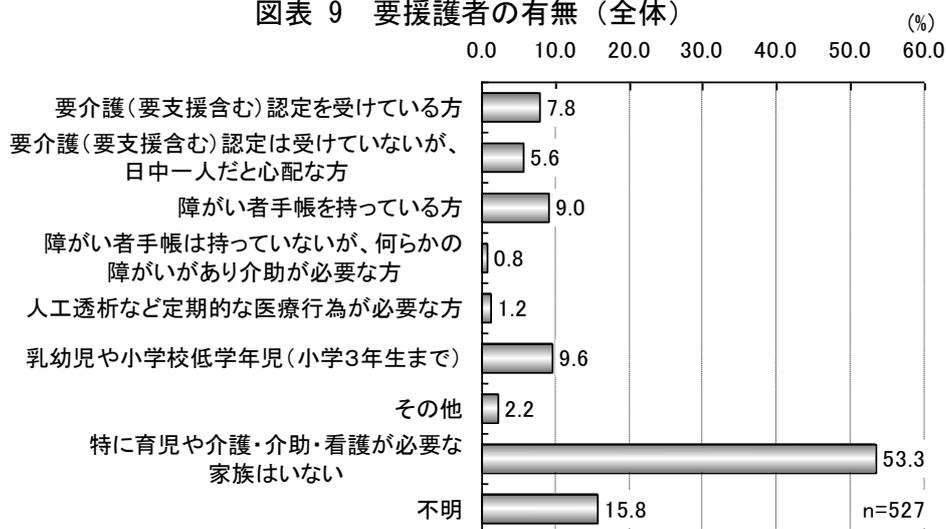
	全体	ひとり暮らし	夫婦のみ	親と子の2世代	親と子と孫の3世代	その他	不明
合計	549 100.0	40 7.3	199 36.2	211 38.4	58 10.6	33 6.0	8 1.5
福島地区	386 100.0	33 8.5	138 35.8	155 40.2	34 8.8	23 6.0	3 0.8
吉岡地区	104 100.0	5 4.8	37 35.6	35 33.7	16 15.4	7 6.7	4 3.8
不明	59 100.0	2 3.4	24 40.7	21 35.6	8 13.6	3 5.1	1 1.7

(6) 家族の中で何らかの援助が必要な人の有無

「特に育児や介護・介助・看護が必要な家族はいない」が 53.3%と半数を超えていますが、援助が必要な順としては、「乳幼児や小学校低学年児(小学3年生まで)」(9.6%)、「障がい者手帳を持っている方」(9.0%)、「要介護(要支援含む)認定を受けている方」(7.8%)、「要介護(要支援含む)認定は受けていないが、日中一人だと心配な方」(5.6%)などが続いています。このほか「人工透析など定期的な医療行為が必要な方」が 1.2%、「障がい者手帳は持っていないが、何らかの障がいがあり介助が必要な方」が 0.8%です。

援助が必要な人をグループ分けして家族類型との関係を見ると、下表のようになっています。

図表 9 要援護者の有無 (全体)



グループ	内容
要介護者がいる	要介護(要支援含む)認定を受けている方、要介護(要支援含む)認定は受けていないが、日中一人だと心配な方
障がい者がいる	障がい者手帳を持っている方、障がい者手帳は持っていないが、何らかの障がいがあり介助が必要な方
人工透析等がいる	人工透析など定期的な医療行為が必要な方
小学校低学年以下の子どもがいる	乳幼児や小学校低学年児(小学3年生まで)
その他	その他
要援護者はいない	特に育児や介護・介助・看護が必要な家族はいない

図表 10 要援護者の有無 (家族類型別)

	全体	要介護者がいる	障がい者がいる	人工透析等がいる	小学校低学年以下の子どもがいる	その他	要援護者はいない	不明
合計	501	67	49	6	48	11	267	79
	100.0	13.4	9.8	1.2	9.6	2.2	53.3	15.8
ひとり暮らし	0	0	0	0	0	0	0	0
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
夫婦のみ	199	9	17	2	1	7	126	41
	100.0	4.5	8.5	1.0	0.5	3.5	63.3	20.6
親と子の2世代	211	37	14	2	34	3	108	24
	100.0	17.5	6.6	0.9	16.1	1.4	51.2	11.4
親と子と孫の3世代	58	14	6	1	13	0	24	6
	100.0	24.1	10.3	1.7	22.4	0.0	41.4	10.3
その他	33	7	12	1	0	1	9	8
	100.0	21.2	36.4	3.0	0.0	3.0	27.3	24.2

2. 暮らしの中で困ったことや情報について

(1) 困りごと

問2	MA	ふだんの暮らしの中で次のような困りごとはありますか(あてはまるものに○)。
----	----	---------------------------------------

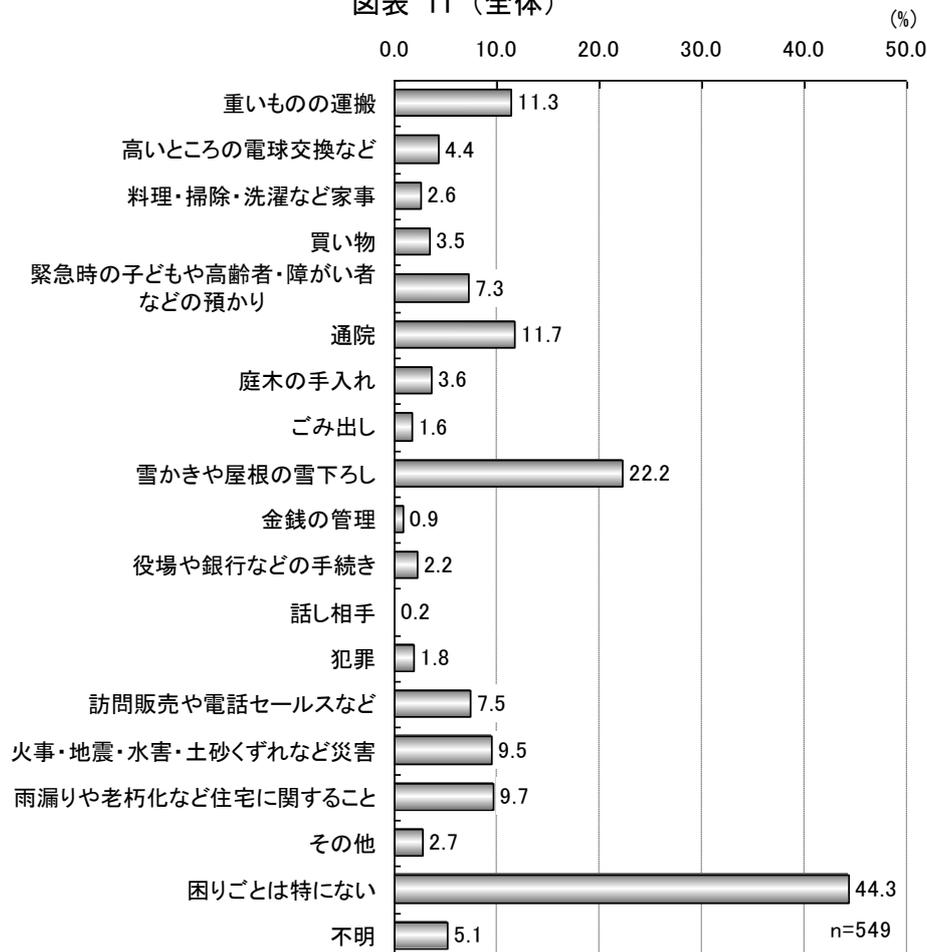
◇最も多い困りごとは「雪かきや屋根の雪下ろし」で2割強、続いて1割強で「重いものの運搬」。

◇ひとり暮らしで困ることは「雪かきや屋根の雪下ろし」「重いものの運搬」「高いところの電球交換など」「料理・掃除・洗濯など家事」の順。

「困りごとは特にない」が44.3%です。一方、困りごとで最も多いのは「雪かきや屋根の雪下ろし」(22.2%)です。続いて「通院」(11.7%)、「重いものの運搬」(11.3%)などとなっています。

家族類型別で全体に比べ多いものを見ると、ひとり暮らしでは「雪かきや屋根の雪下ろし」(35.0%)、「重いものの運搬」(17.5%)、「高いところの電球交換など」(12.5%)、「料理・掃除・洗濯など家事」(7.5%)、親と子の2世代では「緊急時の子どもや高齢者・障がい者などの預かり」(12.8%)となっています。

図表 11 (全体)



図表 12 (家族類型別)

	全体	重いもの の運搬	高いところ の電球交 換など	料理・掃 除・洗濯な ど家事	買い物	緊急時の 子どもや 高齢者・障 がい者な どの預かり	通院	庭木の手 入れ	ごみ出し	雪かきや 屋根の雪 下ろし	金銭の管 理
合計	549 100.0	62 11.3	24 4.4	14 2.6	19 3.5	40 7.3	64 11.7	20 3.6	9 1.6	122 22.2	5 0.9
ひとり暮らし	40 100.0	7 17.5	5 12.5	3 7.5	0 0.0	0 0.0	5 12.5	3 7.5	0 0.0	14 35.0	0 0.0
夫婦のみ	199 100.0	27 13.6	12 6.0	3 1.5	9 4.5	5 2.5	20 10.1	8 4.0	4 2.0	48 24.1	1 0.5
親と子の2世代	211 100.0	19 9.0	3 1.4	5 2.4	7 3.3	27 12.8	23 10.9	7 3.3	4 1.9	37 17.5	2 0.9
親と子と孫の3世代	58 100.0	3 5.2	1 1.7	2 3.4	0 0.0	5 8.6	8 13.8	2 3.4	0 0.0	13 22.4	2 3.4
その他	33 100.0	6 18.2	3 9.1	1 3.0	3 9.1	3 9.1	8 24.2	0 0.0	1 3.0	10 30.3	0 0.0
	全体	役場や銀行などの 手続き	話し相手	犯罪	訪問販売 や電話 セールス など	火事・地震・水害・ 土砂くずれ など災害	雨漏りや 老朽化な ど住宅に 関すること	その他	困りごとは 特にない	不明	
合計	549 100.0	12 2.2	1 0.2	10 1.8	41 7.5	52 9.5	53 9.7	15 2.7	243 44.3	28 5.1	
ひとり暮らし	40 100.0	1 2.5	0 0.0	0 0.0	3 7.5	1 2.5	3 7.5	1 2.5	11 27.5	1 2.5	
夫婦のみ	199 100.0	4 2.0	0 0.0	3 1.5	14 7.0	22 11.1	12 6.0	5 2.5	101 50.8	11 5.5	
親と子の2世代	211 100.0	3 1.4	0 0.0	4 1.9	18 8.5	15 7.1	24 11.4	7 3.3	92 43.6	10 4.7	
親と子と孫の3世代	58 100.0	3 5.2	1 1.7	2 3.4	3 5.2	8 13.8	7 12.1	0 0.0	26 44.8	2 3.4	
その他	33 100.0	1 3.0	0 0.0	1 3.0	3 9.1	6 18.2	6 18.2	1 3.0	9 27.3	2 6.1	

(2) 手助けを頼みたい人

問3	MA	あなたが生活上の問題で相談や助けを必要とするとき、だれに手助けを頼みたいですか(あてはまるものに○)。
----	----	---

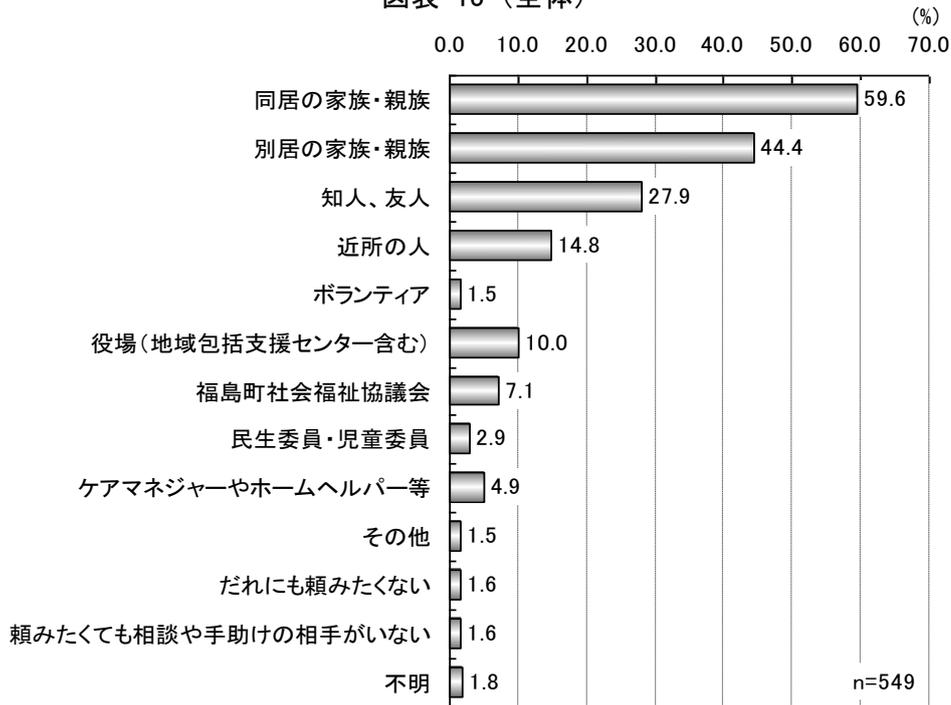


◇困った時の手助けは親族を望む人が圧倒的多数。続いて、知人・友人、近所の人。

「同居の家族・親族」が59.6%と最も多く、「別居の家族・親族」が44.4%で続いており、多くの人は親族をあげています。次いで「知人、友人」(27.9%)、「近所の人」(14.8%)と知り合いが続きます。次に「役場(地域包括支援センター含む)」(10.0%)、「福島町社会福祉協議会」(7.1%)となっています。一方で「だれにも頼みたくない」や「頼みたくても相談や手助けの相手がいない」(各1.6%)が見受けられます。

年齢別で全体に比べ多いものを見ると、40歳未満では「別居の家族・親族」(54.4%)及び「知人・友人」(38.9%)、40歳代では「同居の家族・親族」(67.3%)及び「知人・友人」(36.7%)、60歳代では「近所の人」(20.3%)となっています。

図表 13 (全体)



図表 14 (年齢別)

	全体	同居の家族・親族	別居の家族・親族	知人、友人	近所の人	ボランティア	役場(地域包括支援センター含む)	福島町社会福祉協議会	民生委員・児童委員	ケアマネジャーやホームヘルパー等	その他()	だれにも頼みたくない	頼みたくても相談や手助けの相手がいない	不明
合計	549	327	244	153	81	8	55	39	16	27	8	9	9	10
	100.0	59.6	44.4	27.9	14.8	1.5	10.0	7.1	2.9	4.9	1.5	1.6	1.6	1.8
40歳未満	90	59	49	35	5	0	6	4	2	1	2	2	1	0
	100.0	65.6	54.4	38.9	5.6	0.0	6.7	4.4	2.2	1.1	2.2	2.2	1.1	0.0
40歳代	98	66	35	36	12	2	9	7	3	4	1	3	2	1
	100.0	67.3	35.7	36.7	12.2	2.0	9.2	7.1	3.1	4.1	1.0	3.1	2.0	1.0
50歳代	155	95	73	49	23	2	15	8	3	8	2	1	2	1
	100.0	61.3	47.1	31.6	14.8	1.3	9.7	5.2	1.9	5.2	1.3	0.6	1.3	0.6
60歳代	197	101	86	31	40	4	25	20	8	14	3	3	4	6
	100.0	51.3	43.7	15.7	20.3	2.0	12.7	10.2	4.1	7.1	1.5	1.5	2.0	3.0

(3) 福祉サービスの情報源

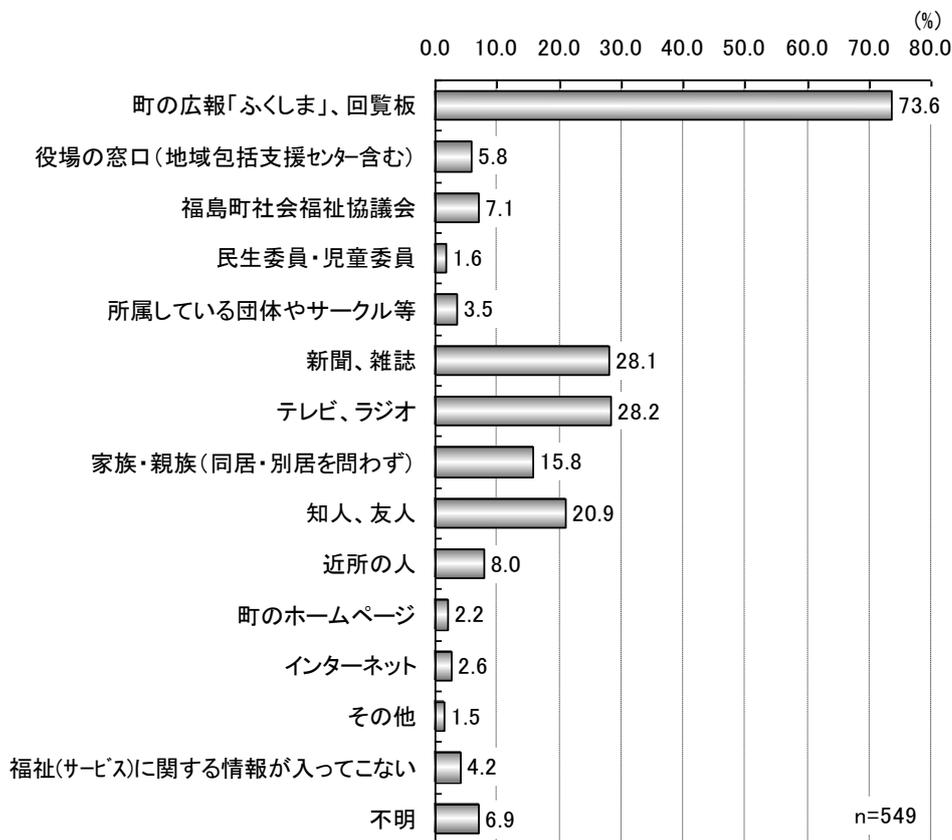
問4	MA	あなたは、福祉サービスに関する情報を主にどこから得ていますか(3つまでに○)。
----	----	---

◇福祉の情報はどの年代も広報「ふくしま」や回覧板から得ている人が圧倒的多数。

「町の広報「ふくしま」、回覧板」が73.6%と圧倒的多数です。「テレビ、ラジオ」(28.2%)、「新聞、雑誌」(28.1%)、「知人、友人」(20.9%)、「家族・親族(同居・別居を問わず)」(15.8%)などが続いています。「福祉(サービス)に関する情報が入ってこない」が4.2%見受けられます。

どの年代も「町の広報「ふくしま」、回覧板」が最も多いですが、全体に比べ多いものを見ると、50歳代の「新聞、雑誌」(33.5%)、60歳代の「テレビ、ラジオ」(35.5%)となっています。

図表 15 (全体)



図表 16 (年齢別)

	全体	町の広報「ふくしま」、回覧板	役場の窓口(地域包括支援センター含む)	福島町社会福祉協議会	民生委員・児童委員	所属している団体やサークル等	新聞、雑誌	テレビ、ラジオ	家族・親族(同居・別居を問わず)	知人、友人	近所の人	町のホームページ	インターネット	その他	福祉(サービス)に関する情報が入ってこない
合計	549 100.0	404 73.6	32 5.8	39 7.1	9 1.6	19 3.5	154 28.1	155 28.2	87 15.8	115 20.9	44 8.0	12 2.2	14 2.6	8 1.5	23 4.2
40歳未満	90 100.0	69 76.7	7 7.8	2 2.2	0 0.0	2 2.2	16 17.8	11 12.2	17 18.9	12 13.3	4 4.4	2 2.2	1 1.1	1 1.1	8 8.9
40歳代	98 100.0	69 70.4	3 3.1	5 5.1	1 1.0	3 3.1	23 23.5	23 23.5	11 11.2	22 22.4	5 5.1	2 2.0	5 5.1	6 6.1	4 4.1
50歳代	155 100.0	118 76.1	6 3.9	14 9.0	3 1.9	6 3.9	52 33.5	47 30.3	20 12.9	36 23.2	13 8.4	4 2.6	7 4.5	1 0.6	3 1.9
60歳代	197 100.0	142 72.1	16 8.1	17 8.6	5 2.5	8 4.1	58 29.4	70 35.5	37 18.8	45 22.8	21 10.7	4 2.0	1 0.5	0 0.0	8 4.1

3. 保健・福祉・介護サービスについて

(1) 保健・福祉・介護サービスの認知度

問5	MA	あなたは、次の保健・福祉・介護サービスを知っていますか(あてはまるものに○)。
----	----	---

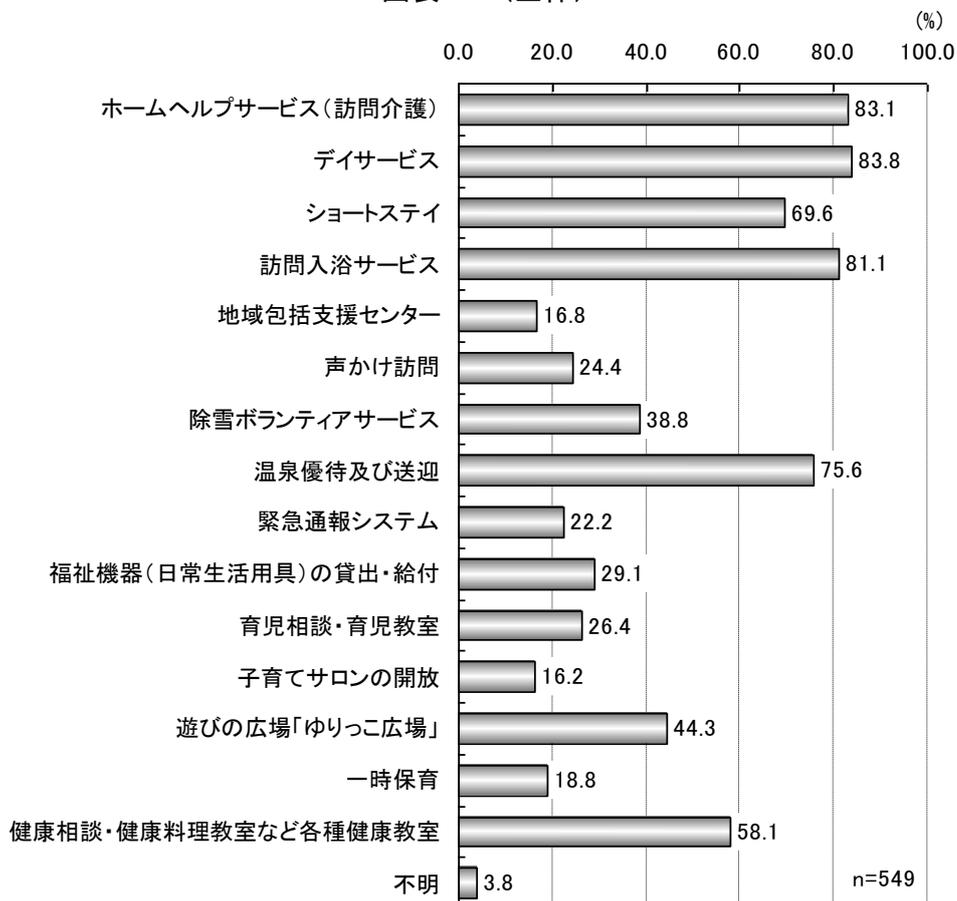
◇「デイサービス」「ホームヘルプサービス」「訪問入浴サービス」は8割を超える認知度。

◇60歳代は利用する可能性があるデイサービスや緊急通報システムも知らない人が多く、サービス全般に認知度が低い。

「デイサービス」(83.8%)、「ホームヘルプサービス(訪問介護)」(83.1%)、「訪問入浴サービス」(81.1%)の3つのサービスが8割を超えています。次いで「温泉優待及び送迎」(75.6%)、「健康相談・健康料理教室など各種健康教室」(58.1%)が続いています。

年齢別で見ると、40歳未満が「育児相談・育児教室」が多いなど年代に応じたサービスは知っている傾向が見られますが、60歳代では利用の可能性があるデイサービスや緊急通報システムが全体を下回るほか、すべてのサービスについて全体に比べ認知度が低くなっています。

図表 17 (全体)



図表 18 (年齢別)

	全体	ホームヘルプサービス(訪問介護)	デイサービス	ショートステイ	訪問入浴サービス	地域包括支援センター	声かけ訪問	除雪ボランティアサービス	温泉優待及び送迎
合計	549 100.0	456 83.1	460 83.8	382 69.6	445 81.1	92 16.8	134 24.4	213 38.8	415 75.6
40歳未満	90 100.0	69 76.7	70 77.8	48 53.3	64 71.1	11 12.2	20 22.2	28 31.1	59 65.6
40歳代	98 100.0	87 88.8	87 88.8	70 71.4	87 88.8	15 15.3	24 24.5	35 35.7	75 76.5
50歳代	155 100.0	139 89.7	143 92.3	127 81.9	138 89.0	38 24.5	49 31.6	77 49.7	133 85.8
60歳代	197 100.0	155 78.7	154 78.2	132 67.0	150 76.1	27 13.7	39 19.8	71 36.0	143 72.6
	全体	緊急通報システム	福祉機器(日常生活用具)の貸出・給付	育児相談・育児教室	子育てサロンの開放	遊びの広場「ゆりっこ広場」	一時保育	健康相談・健康料理教室など各種健康教室	不明
合計	549 100.0	122 22.2	160 29.1	145 26.4	89 16.2	243 44.3	103 18.8	319 58.1	21 3.8
40歳未満	90 100.0	16 17.8	14 15.6	41 45.6	25 27.8	53 58.9	26 28.9	38 42.2	5 5.6
40歳代	98 100.0	23 23.5	26 26.5	43 43.9	21 21.4	65 66.3	21 21.4	60 61.2	0 0.0
50歳代	155 100.0	49 31.6	64 41.3	42 27.1	26 16.8	72 46.5	30 19.4	110 71.0	4 2.6
60歳代	197 100.0	34 17.3	54 27.4	19 9.6	16 8.1	49 24.9	24 12.2	108 54.8	11 5.6

(2) 保健・福祉・介護サービスの利用

問6	SA	あなた自身又はあなたの家族が、保健・福祉・介護サービスを必要としたとき、前問のサービスなどを抵抗なく利用することができますか(1つに○)。
----	----	---

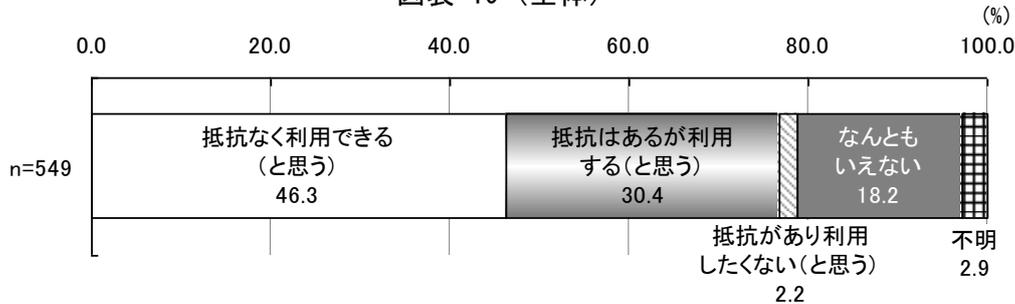


◇抵抗の有無を問わず、利用することができるとする人は4分の3。
 ◇サービスの利用に抵抗がある人は2.2%。

「抵抗なく利用できる(と思う)」が 46.3%、「抵抗はあるが利用する(と思う)」が 30.4%となつて、合わせて 76.7%は抵抗の有無を問わず利用できるとしています。一方、「抵抗があり利用したくない(と思う)」は 2.2%、「なんともいえない」は 18.2%です。

「抵抗なく利用できる(と思う)」は 50 歳代(52.9%)とひとり暮らしの世帯(62.5%)で多くなっています。

図表 19 (全体)



図表 20 (年齢別)

	全体	抵抗なく利用できる(と思う)	抵抗はあるが利用する(と思う)	抵抗があり利用したくない(と思う)	なんともいえない	不明
合計	549 100.0	254 46.3	167 30.4	12 2.2	100 18.2	16 2.9
40歳未満	90 100.0	43 47.8	26 28.9	1 1.1	20 22.2	0 0.0
40歳代	98 100.0	39 39.8	35 35.7	2 2.0	21 21.4	1 1.0
50歳代	155 100.0	82 52.9	42 27.1	2 1.3	24 15.5	5 3.2
60歳代	197 100.0	88 44.7	63 32.0	7 3.6	30 15.2	9 4.6

図表 21 (家族類型別)

	全体	抵抗なく利用できる(と思う)	抵抗はあるが利用する(と思う)	抵抗があり利用したくない(と思う)	なんともいえない	不明
合計	549 100.0	254 46.3	167 30.4	12 2.2	100 18.2	16 2.9
ひとり暮らし	40 100.0	25 62.5	8 20.0	0 0.0	5 12.5	2 5.0
夫婦のみ	199 100.0	91 45.7	62 31.2	6 3.0	32 16.1	8 4.0
親と子の2世代	211 100.0	93 44.1	73 34.6	3 1.4	40 19.0	2 0.9
親と子と孫の3世代	58 100.0	27 46.6	12 20.7	2 3.4	15 25.9	2 3.4
その他	33 100.0	16 48.5	10 30.3	0 0.0	5 15.2	2 6.1

問6 付問	MA	前問で2～3のいずれかに○を付けた方だけお答えください。 どのような抵抗を感じますか(あてはまるものに○)。
----------	----	---

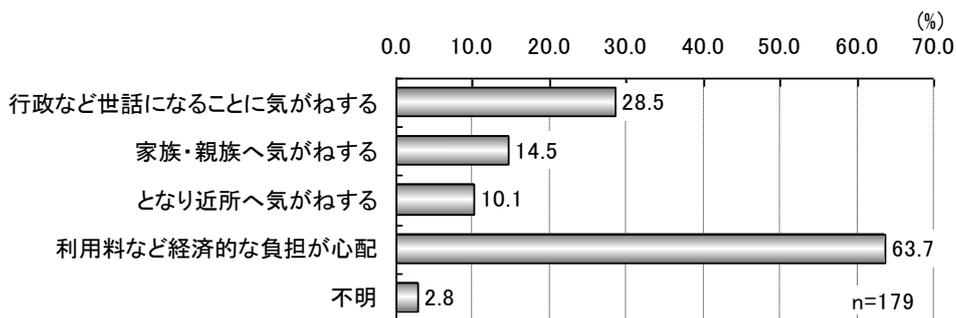


◇サービス利用に抵抗感がある最も大きな理由は「利用料の負担」で6割を超える。
 続いて「行政などへの気兼ね」が3割弱。
 ◇50歳代は家族等への気がね、60歳代はとなり近所への気がねが見られる。

前問で「抵抗はあるが利用する(と思う)」及び「抵抗があり利用したくない(と思う)」と回答した179人に抵抗感について質問したところ、「利用料など経済的な負担が心配」が63.7%と圧倒的な理由です。続いて「行政など世話になることに気がねする」(28.5%)、「家族・親族へ気がねする」(14.5%)、「となり近所へ気がねする」(10.1%)の順となっています。

年齢別で全体に比べ多いものを見ると、50歳代は「家族・親族へ気がねする」(22.7%)、60歳代は「となり近所へ気がねする」(15.7%)となっています。

図表 22 (全体)



図表 23 (年齢別)

	全体	行政など 世話にな ることに気 がねする	家族・親族 へ気がね する	となり近所 へ気がね する	利用料な ど経済的 な負担が 心配	不明
合計	179	51	26	18	114	5
	100.0	28.5	14.5	10.1	63.7	2.8
40歳未満	27	8	4	0	21	0
	100.0	29.6	14.8	0.0	77.8	0.0
40歳代	37	9	5	3	23	1
	100.0	24.3	13.5	8.1	62.2	2.7
50歳代	44	11	10	4	27	1
	100.0	25.0	22.7	9.1	61.4	2.3
60歳代	70	22	7	11	42	3
	100.0	31.4	10.0	15.7	60.0	4.3

4. 災害時について

(1) 緊急情報を知る手段

問7	MA	災害などの緊急事態が発生した場合、あなたが緊急情報を得る手段として活用するものは何ですか(あてはまるものに○)。
----	----	--

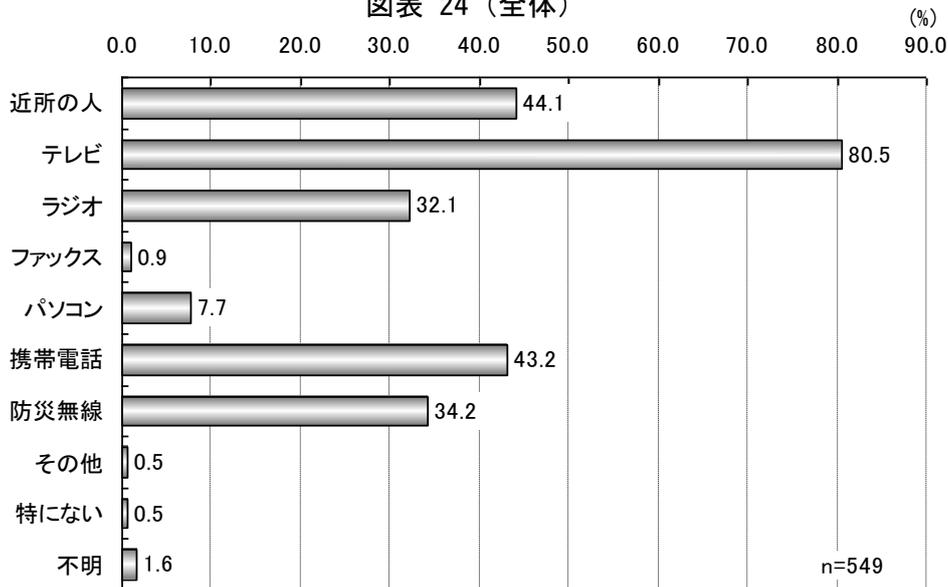


◇災害時の緊急情報の収集は「テレビ」からが8割。次に、「近所の人」「携帯電話」「防災無線」「ラジオ」の順。

「テレビ」が80.5%で圧倒的多数です。続いて「携帯電話」(43.2%)、「近所の人」(44.1%)、「防災無線」(34.2%)、「ラジオ」(32.1%)、「パソコン」(7.7%)などとなっています。「特にない」が0.5%見られます。

年齢別で全体に比べ多いものを見ると、40歳未満は「携帯電話」(64.4%)及び「パソコン」(17.8%)、40歳代は「テレビ」(86.7%)及び「防災無線」(40.8%)、50歳代は「テレビ」(89.0%)、「近所の人」(52.3%)、「防災無線」(40.6%)、「ラジオ」(38.1%)、60歳代は「近所の人」(49.7%)となっています。

図表 24 (全体)



図表 25 (年齢別)

	全体	近所の人	テレビ	ラジオ	ファックス	パソコン	携帯電話	防災無線	その他	特にない	不明
合計	549	242	442	176	5	42	237	188	3	3	9
	100.0	44.1	80.5	32.1	0.9	7.7	43.2	34.2	0.5	0.5	1.6
40歳未満	90	19	71	21	0	16	58	18	0	1	1
	100.0	21.1	78.9	23.3	0.0	17.8	64.4	20.0	0.0	1.1	1.1
40歳代	98	39	85	34	2	10	40	40	1	1	1
	100.0	39.8	86.7	34.7	2.0	10.2	40.8	40.8	1.0	1.0	1.0
50歳代	155	81	138	59	2	12	67	63	1	0	1
	100.0	52.3	89.0	38.1	1.3	7.7	43.2	40.6	0.6	0.0	0.6
60歳代	197	98	141	59	1	4	67	64	1	1	6
	100.0	49.7	71.6	29.9	0.5	2.0	34.0	32.5	0.5	0.5	3.0

(2) 災害時の避難

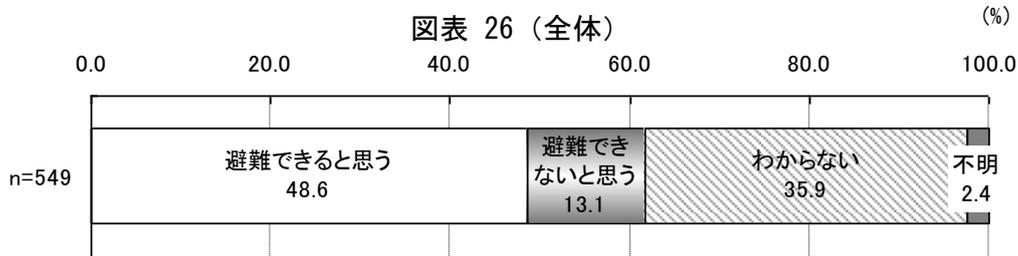
問8	SA	あなたは災害などの緊急事態が発生した場合、適切に避難できると思いますか(1つに○)。
----	----	--



◇災害時に避難できるとするのは半数に届かない。避難できないが1割を超える。
 ◇要介護や障がいのある人がいる家庭では避難できないとする傾向。

「避難できると思う」が 48.6%、「わからない」は 35.9%、「避難できないと思う」が 13.1%です。

年齢別に見ると、「避難できないと思う」は年代で特に差は見られませんが、介護の必要な人や障がいのある人がいる家庭で「避難できないと思う」がやや多くなっています。



図表 27 (年齢別)

	全体	避難でき ると思う	避難でき ないと思う	わから ない	不明
合計	549 100.0	267 48.6	72 13.1	197 35.9	13 2.4
40歳未満	90 100.0	36 40.0	12 13.3	42 46.7	0 0.0
40歳代	98 100.0	37 37.8	15 15.3	46 46.9	0 0.0
50歳代	155 100.0	84 54.2	14 9.0	52 33.5	5 3.2
60歳代	197 100.0	108 54.8	28 14.2	54 27.4	7 3.6

図表 28 (要援護者別)

	全体	避難でき ると思う	避難でき ないと思う	わから ない	不明
合計	549 100.0	267 48.6	72 13.1	197 35.9	13 2.4
介護の必要な人がい る	67 100.0	31 46.3	15 22.4	20 29.9	1 1.5
障がいのある人がい る	49 100.0	25 51.0	10 20.4	11 22.4	3 6.1
医療が必要な人がい る	6 100.0	2 33.3	1 16.7	2 33.3	1 16.7
小さい子ども(小学校 3年生まで)がいる	48 100.0	15 31.3	5 10.4	27 56.3	1 2.1
その他	11 100.0	4 36.4	1 9.1	6 54.5	0 0.0
援護が必要な人はい ない	267 100.0	134 50.2	32 12.0	97 36.3	4 1.5

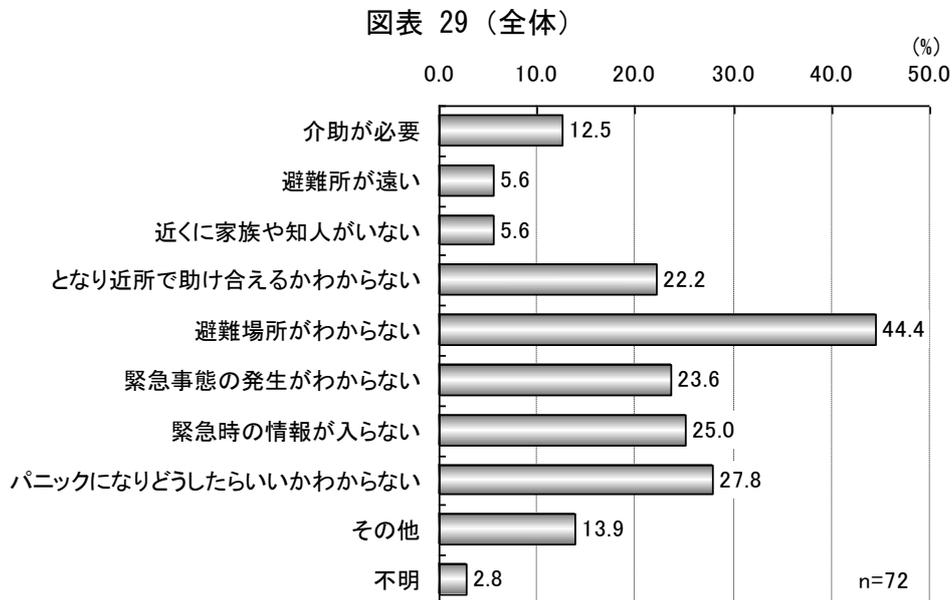
(3) 災害時の避難ができない理由

問8 付問	MA	(前問で2.に○を付けた方だけお答えください。 その理由はなんですか(あてはまるものに○)。
----------	----	---



◇災害時避難ができない理由は、「避難場所がわからない」が4割を超えて最も多い。

前問で避難できないと回答した 72 人について、避難できない理由は「避難場所がわからない」が 44.4%で最も多くなっています。そのほか「パニックになりどうしたらいいかわからない」(27.8%)、「緊急時の情報が入らない」(25.0%)のほか「緊急事態の発生がわからない」(23.6%)、「となり近所で助け合えるかわからない」(22.2%)が2割台で続いています。



5. 地域でのつき合いやつながりについて

(1) つき合いの状況

問9	SA	あなたは、となり近所や地域の人とどの程度のおつき合いがありますか(1つに○)。
----	----	---

◇ある程度助け合うことができるつき合いをしている人はおよそ65%。一方で、あいさつする程度の軽いつき合いが30%弱。

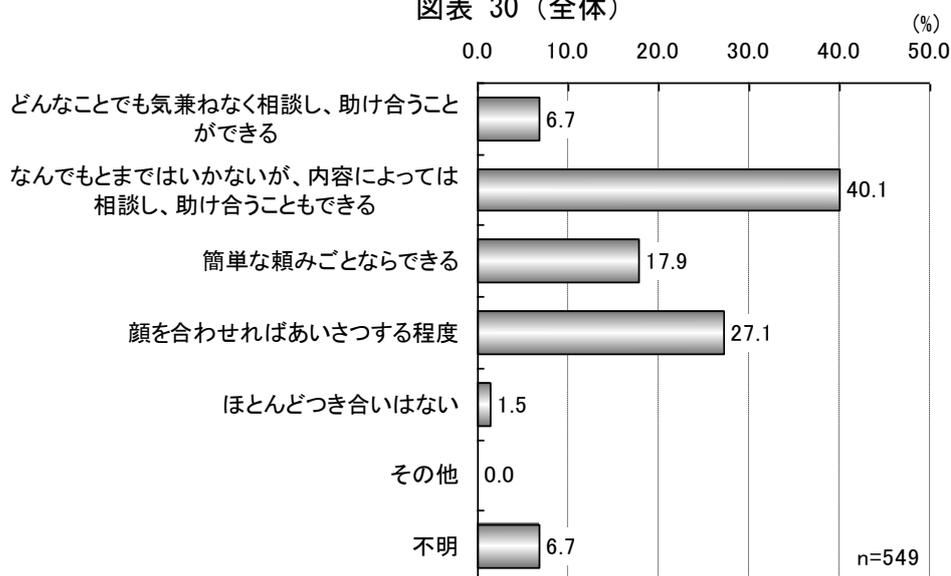
◇助け合うことができる近所づき合いは60歳代が多い。一方、あいさつする程度は40歳未満が多い。

「なんでもとまではいかないが、内容によっては相談し、助け合うこともできる」が40.1%で最も多くなっています。「簡単な頼みごとならできる」が17.9%、「どんなことでも気兼ねなく相談し、助け合うことができる」が6.7%となっており、近所と互いに助け合うことができるつき合いをしているのは64.7%です。このほか、「顔を合わせればあいさつする程度」が27.1%、「ほとんどつき合いはない」は1.5%となっています。

年齢別で全体に比べ多いものを見ると、40歳未満及び40歳代では「顔を合わせればあいさつする程度」(58.9%、35.7%)、60歳代では「なんでもとまではいかないが、内容によっては相談し、助け合うこともできる」が49.2%のほか「どんなことでも気兼ねなく相談し、助け合うことができる」が9.6%となるなど、助け合っている60歳代の様子がうかがわれます。

家族類型別ではひとり暮らしで「どんなことでも気兼ねなく相談し、助け合うことができる」(12.5%)、夫婦のみで「なんでもとまではいかないが、内容によっては相談し、助け合うこともできる」(46.7%)が多く、地区別では福島地区に比べ吉岡地区は“助け合うことができる”傾向が見られます。

図表 30 (全体)



図表 31 (年齢別)

	全体	どんなことでも気兼ねなく相談し、助け合うことができる	なんでもとまではいかないが、内容によっては相談し、助け合うこともできる	簡単な頼みごとならできる	顔を合わせればあいさつする程度	ほとんどつき合いはない	その他	不明
合計	549 100.0	37 6.7	220 40.1	98 17.9	149 27.1	8 1.5	0 0.0	37 6.7
40歳未満	90 100.0	4 4.4	17 18.9	11 12.2	53 58.9	5 5.6	0 0.0	0 0.0
40歳代	98 100.0	3 3.1	32 32.7	25 25.5	35 35.7	1 1.0	0 0.0	2 2.0
50歳代	155 100.0	10 6.5	69 44.5	28 18.1	35 22.6	2 1.3	0 0.0	11 7.1
60歳代	197 100.0	19 9.6	97 49.2	34 17.3	23 11.7	0 0.0	0 0.0	24 12.2

図表 32 (家族類型別)

	全体	どんなことでも気兼ねなく相談し、助け合うことができる	なんでもとまではいかないが、内容によっては相談し、助け合うこともできる	簡単な頼みごとならできる	顔を合わせればあいさつする程度	ほとんどつき合いはない	その他	不明
合計	549 100.0	37 6.7	220 40.1	98 17.9	149 27.1	8 1.5	0 0.0	37 6.7
ひとり暮らし	40 100.0	5 12.5	13 32.5	6 15.0	12 30.0	1 2.5	0 0.0	3 7.5
夫婦のみ	199 100.0	11 5.5	93 46.7	31 15.6	43 21.6	3 1.5	0 0.0	18 9.0
親と子の2世代	211 100.0	15 7.1	74 35.1	40 19.0	72 34.1	2 0.9	0 0.0	8 3.8
親と子と孫の3世代	58 100.0	5 8.6	23 39.7	9 15.5	16 27.6	2 3.4	0 0.0	3 5.2
その他	33 100.0	0 0.0	12 36.4	10 30.3	6 18.2	0 0.0	0 0.0	5 15.2

図表 33 (地区別)

	全体	どんなことでも気兼ねなく相談し、助け合うことができる	なんでもとまではいかないが、内容によっては相談し、助け合うこともできる	簡単な頼みごとならできる	顔を合わせればあいさつする程度	ほとんどつき合いはない	その他	不明
合計	549 100.0	37 6.7	220 40.1	98 17.9	149 27.1	8 1.5	0 0.0	37 6.7
福島地区	386 100.0	23 6.0	149 38.6	68 17.6	116 30.1	5 1.3	0 0.0	25 6.5
吉岡地区	104 100.0	7 6.7	47 45.2	21 20.2	21 20.2	1 1.0	0 0.0	7 6.7
不明	59 100.0	7 11.9	24 40.7	9 15.3	12 20.3	2 3.4	0 0.0	5 8.5

(2) 近所づきあいの意向

問10	SA	あなたは、近所づき合いについてどのようにお考えですか(1つに○)。
-----	----	-----------------------------------

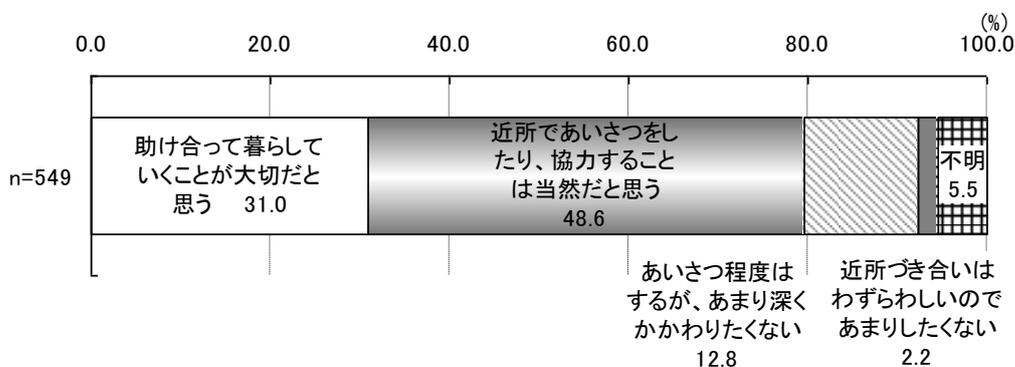


◇近所で助け合うことが大切とする積極派は3割。やや消極派が5割弱。
 ◇助け合いが当然とするのは60歳代、あいさつする程度でかかわりたくないは40歳未満が多い。

「近所であいさつをしたり、協力することは当然だと思う」が 48.6%で最も多く、「助け合って暮らしていくことが大切だと思う」が 31.0%で続いています。一方で「あいさつ程度はするが、あまり深くかかわりたくない」が 12.8%、「近所づき合いはわずらわしいのであまりしたくない」が 2.2%となっており、あまり近所づき合いを望んでいないのは合わせて 15%です。

年齢別で全体に比べ多いものを見ると、「助け合うことが当然」は 60歳代で 36.5%と最も多く、一方で「あいさつする程度でかかわりたくない」は 40歳未満が 27.8%と最も多くなっています。家族類型別では、「助け合うことが当然」は「ひとり暮らし」(37.5%)と「親と子と孫の3世代」(44.8%)で多くなっています。

図表 34 (全体)



図表 35 (年齢別)

	全体	助け合って暮らしていくことが大切だと思う	近所であいさつをしたり、協力することは当然だと思う	あいさつ程度はするが、あまり深くかかわりたくない	近所づき合いはわずらわしいのであまりしたくない	不明
合計	549 100.0	170 31.0	267 48.6	70 12.8	12 2.2	30 5.5
40歳未満	90 100.0	23 25.6	38 42.2	25 27.8	3 3.3	1 1.1
40歳代	98 100.0	24 24.5	51 52.0	16 16.3	5 5.1	2 2.0
50歳代	155 100.0	47 30.3	83 53.5	13 8.4	3 1.9	9 5.8
60歳代	197 100.0	72 36.5	91 46.2	15 7.6	1 0.5	18 9.1

図表 36 (家族類型別)

	全体	助け合っ て暮らして いくことが 大切だと思 う	近所であ いさつをし たり、協力 することは 当然だと思 う	あいさつ 程度はす るが、あま り深くかか わりたくな い	近所づき 合いはわ ずらわしい のであまり したくない	不明
合計	549 100.0	170 31.0	267 48.6	70 12.8	12 2.2	30 5.5
ひとり暮らし	40 100.0	15 37.5	17 42.5	4 10.0	3 7.5	1 2.5
夫婦のみ	199 100.0	56 28.1	102 51.3	25 12.6	3 1.5	13 6.5
親と子の2世代	211 100.0	60 28.4	106 50.2	30 14.2	4 1.9	11 5.2
親と子と孫の3世代	58 100.0	26 44.8	25 43.1	4 6.9	1 1.7	2 3.4
その他	33 100.0	9 27.3	13 39.4	7 21.2	1 3.0	3 9.1



(3) 近所づきあいへの満足度

問11	SA	あなたは、今の近所づき合いについて満足していますか(1つに○)。
-----	----	----------------------------------



◇近所づき合いに満足な人は7割を超える。60歳代で特に多い。
 ◇現在、助け合いをするつき合い方をしている人の満足度は高い傾向。

「まあ満足している」が59.0%と最も多く、「たいへん満足している」が12.2%と合わせて“概ね満足”は71.2%にのぼります。一方で「少し不満がある」が7.3%です。「どちらともいえない」は16.4%、「近所づき合いには関心がない」が3.3%、「たいへん不満」は回答がありませんでした。

年齢別に見ると、「たいへん満足している」は60歳代で多くなっています。

近所とのつき合いの状況(問9)との関係を見ると、「どんなことでも気兼ねなく相談し、助け合えることができる」とする人の64.9%は「たいへん満足」、「なんでもとまではいかないが、内容によっては相談し、助け合うこともできる」とする人の71.4%及び「簡単な頼みごとならできる」とする人の63.3%が「まあ満足している」とするなど、何らかのつき合いをしている人の満足度は高い傾向が見られます。

図表 37 (全体)



図表 38 (年齢別)

	全体	たいへん満足している	まあ満足している	少し不満がある	たいへん不満	どちらともいえない	近所づき合いには関心がない	不明
合計	549 100.0	67 12.2	324 59.0	40 7.3	4 0.7	90 16.4	18 3.3	6 1.1
40歳未満	90 100.0	9 10.0	47 52.2	6 6.7	1 1.1	18 20.0	9 10.0	0 0.0
40歳代	98 100.0	7 7.1	52 53.1	11 11.2	1 1.0	23 23.5	4 4.1	0 0.0
50歳代	155 100.0	17 11.0	96 61.9	9 5.8	1 0.6	28 18.1	3 1.9	1 0.6
60歳代	197 100.0	34 17.3	124 62.9	13 6.6	1 0.5	20 10.2	1 0.5	4 2.0

図表 39 (つき合いの程度別)

	全体	たいへん満足している	まあ満足している	少し不満がある	たいへん不満	どちらともいえない	近所つき合いには関心がない	不明
合計	549 100.0	67 12.2	324 59.0	40 7.3	4 0.7	90 16.4	18 3.3	6 1.1
どんなことでも気兼ねなく相談し、助け合うことができる	37 100.0	24 64.9	11 29.7	1 2.7	0 0.0	0 0.0	1 2.7	0 0.0
なんでもとまではいかないが、内容によっては相談し、助け合うこともできる	220 100.0	28 12.7	157 71.4	15 6.8	2 0.9	11 5.0	2 0.9	5 2.3
簡単な頼みごとならできる	98 100.0	8 8.2	62 63.3	8 8.2	0 0.0	19 19.4	1 1.0	0 0.0
顔を合わせればあいさつする程度	149 100.0	2 1.3	69 46.3	12 8.1	2 1.3	54 36.2	10 6.7	0 0.0
ほとんどつき合いはない	8 100.0	1 12.5	1 12.5	1 12.5	0 0.0	1 12.5	4 50.0	0 0.0
その他	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0



6. 地域での活動について

(1) この1年間の地域の行事や催しへの参加状況

問12	MA	あなたは、最近1年間で次のような地域の行事や催しに参加したことがありますか(あてはまるものに○)。
-----	----	---



◇地域活動などで最も参加が多いのは「町内会活動」で半数を超える。一方、どれも参加したことがない人は2割を上回る。

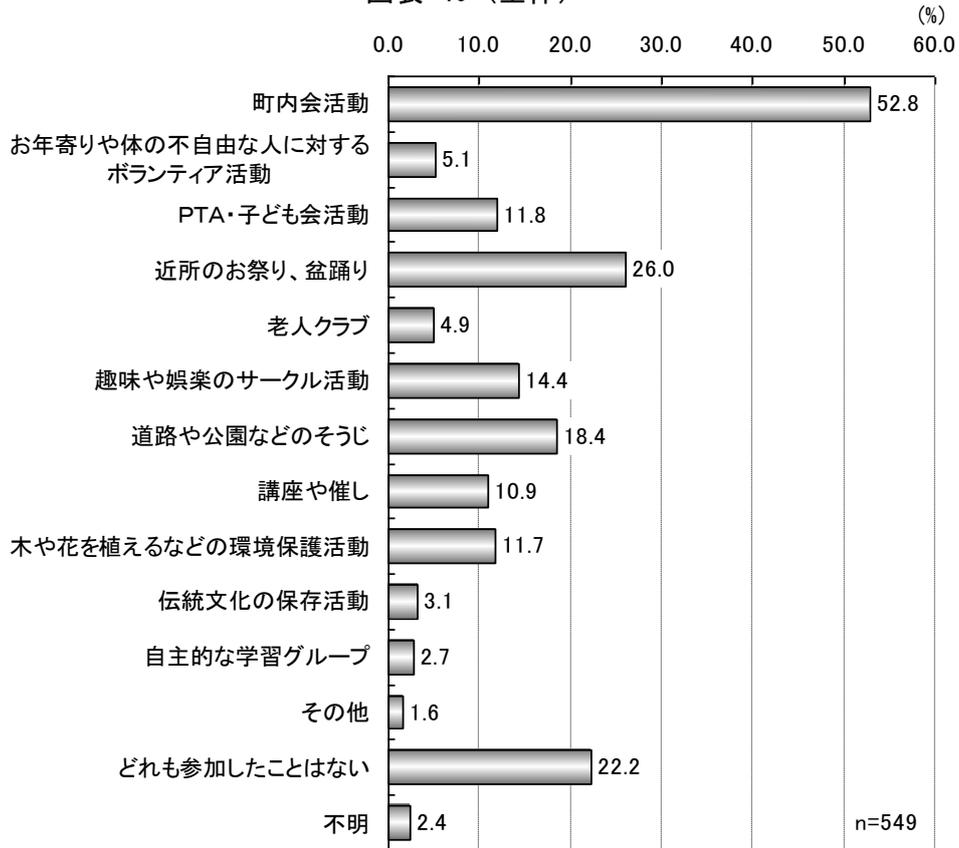
◇町内会活動、清掃活動や環境保護活動、趣味活動、老人クラブは60歳代が中心。

◇参加したことがないのは40歳未満が多い。

地域の行事や催しで参加したものは、「町内会活動」が52.8%と最も多くなっています。これに次いで「近所のお祭り、盆踊り」(26.0%)、「道路や公園などのそうじ」(18.4%)、「趣味や娯楽のサークル活動」(14.4%)、「PTA・子ども会活動」(11.8%)、「木や花を植えるなどの環境保護活動」(11.7%)、「講座や催し」(10.9%)などが続いています。一方、「どれも参加したことがない」は22.2%です。

年齢別で全体に比べ多いものを見ると、40歳代では「PTA・子ども会活動」(38.8%)、50歳代では「町内会活動」(57.4%)、60歳代では「町内会活動」(65.0%)、「道路や公園などのそうじ」(24.9%)、「趣味や娯楽のサークル活動」(19.3%)、「木や花を植えるなどの環境保護活動」(17.8%)、「老人クラブ」(11.2%)と多彩です。一方、参加したことがないのは40歳未満が33.3%と最も多くなっています。

図表 40 (全体)



図表 41 (年齢別)

	全体	町内会活動	お年寄りや体の不自由な人に対するボランティア活動	PTA・子ども会活動	近所のお祭り、盆踊り	老人クラブ	趣味や娯楽のサークル活動	道路や公園などのそうじ	講座や催し	木や花を植えるなどの環境保護活動	伝統文化の保存活動	自主的な学習グループ	その他	どれも参加したことはない	不明
合計	549 100.0	290 52.8	28 5.1	65 11.8	143 26.0	27 4.9	79 14.4	101 18.4	60 10.9	64 11.7	17 3.1	15 2.7	9 1.6	122 22.2	13 2.4
40歳未満	90 100.0	28 31.1	1 1.1	13 14.4	30 33.3	1 1.1	12 13.3	10 11.1	14 15.6	2 2.2	3 3.3	2 2.2	2 2.2	30 33.3	0 0.0
40歳代	98 100.0	43 43.9	3 3.1	38 38.8	34 34.7	0 0.0	10 10.2	12 12.2	8 8.2	7 7.1	5 5.1	1 1.0	1 1.0	22 22.4	2 2.0
50歳代	155 100.0	89 57.4	7 4.5	12 7.7	31 20.0	3 1.9	19 12.3	30 19.4	18 11.6	20 12.9	5 3.2	4 2.6	4 0.6	39 25.2	2 1.3
60歳代	197 100.0	128 65.0	17 8.6	2 1.0	47 23.9	22 11.2	38 19.3	49 24.9	20 10.2	35 17.8	4 2.0	8 4.1	4 2.0	27 13.7	9 4.6

(2) 地域の行事や催しに参加しなかった理由

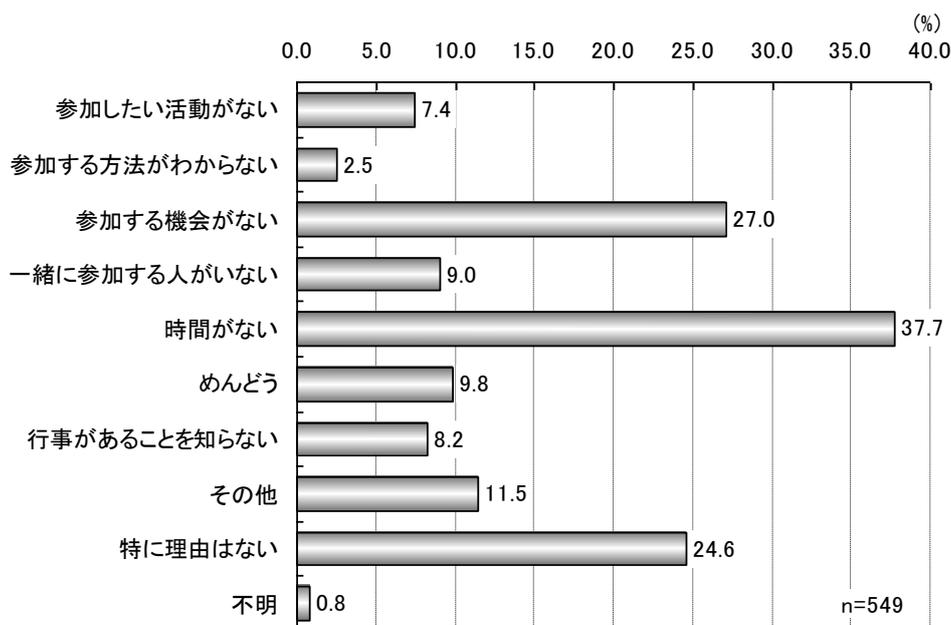
問12 付問	MA	(前問で13. に○を付けた方だけお答えください。 参加しなかった理由は何ですか(あてはまるものに○)。
-----------	----	---

◇行事や催しに参加しない大きな理由は、**時間がないこと、参加する機会がないこと。**
このほか特に理由がないも挙げる。
◇働いている人の不参加の理由は「**時間がない**」「**参加する機会がない**」。働いていない人の不参加の理由は「**めんどろ**」や「**特に理由がない**」。

前問で地域の行事や催しに参加しなかったと回答した 549 人について、不参加の理由で最も多いのは、「時間がない」で37.7%、次いで「参加する機会がない」が27.0%となっており、「特に理由はない」が 24.6%で続いています。このほか「めんどろ」(9.8%)、「一緒に参加する人がいない」(9.0%)、「行事があることを知らない」(8.2%)、「参加したい活動がない」(7.4%)、「参加する方法がわからない」(2.5%)などが見られます。

年齢別で全体に比べ多いものを見ると、「時間がない」は 50 歳代、「参加する機会がない」「一緒に参加する人がいない」はいずれも 40 歳代、「参加する機会がない」は 40 歳未満で多い傾向です。職業別では、「参加する機会がない」は勤め人に、「時間がない」は自営業と勤め人に、「めんどろ」や「特に理由はない」は無職・学生の方に多い傾向となっています。

図表 42 (全体)



図表 43 (年齢別)

	全体	参加したい活動がない	参加する方法がわからない	参加する機会がない	一緒に参加する人がいない	時間がない	めんどう	行事があることを知らない	その他	特に理由はない	不明
合計	122 100.0	9 7.4	3 2.5	33 27.0	11 9.0	46 37.7	12 9.8	10 8.2	14 11.5	30 24.6	1 0.8
40歳未満	30 100.0	2 6.7	0 0.0	10 33.3	2 6.7	9 30.0	4 13.3	3 10.0	5 16.7	7 23.3	0 0.0
40歳代	22 100.0	1 4.5	1 4.5	8 36.4	6 27.3	8 36.4	3 13.6	2 9.1	2 9.1	4 18.2	1 4.5
50歳代	39 100.0	4 10.3	2 5.1	11 28.2	1 2.6	17 43.6	2 5.1	4 10.3	4 10.3	9 23.1	0 0.0
60歳代	27 100.0	2 7.4	0 0.0	4 14.8	1 3.7	11 40.7	3 11.1	1 3.7	3 11.1	8 29.6	0 0.0

図表 44 (職業別)

	全体	参加したい活動がない	参加する方法がわからない	参加する機会がない	一緒に参加する人がいない	時間がない	めんどう	行事があることを知らない	その他	特に理由はない	不明
合計	122 100.0	9 7.4	3 2.5	33 27.0	11 9.0	46 37.7	12 9.8	10 8.2	14 11.5	30 24.6	1 0.8
自営・自由業など	19 100.0	0 0.0	0 0.0	3 15.8	1 5.3	9 47.4	4 21.1	1 5.3	1 5.3	4 21.1	0 0.0
会社・組織などに勤めている方	56 100.0	5 8.9	1 1.8	20 35.7	5 8.9	27 48.2	2 3.6	4 7.1	5 8.9	10 17.9	1 1.8
無職・学生の方	38 100.0	3 7.9	1 2.6	8 21.1	5 13.2	7 18.4	6 15.8	4 10.5	6 15.8	14 36.8	0 0.0
不明	9 100.0	1 11.1	1 11.1	2 22.2	0 0.0	3 33.3	0 0.0	1 11.1	2 22.2	2 22.2	0 0.0

(3) 地域で協力したほうがよいと思う事

問13	MA	地域でみんなで協力して行った方がいいと思うのはどのようなことですか(5つまでに○)。
-----	----	--



- ◇地域で最も協力すべきは「災害時の避難・救助や防災対策」で6割を超え、すべての年代で第1位。
- ◇第2位は「ひとり暮らし高齢者の見守り活動」で5割。

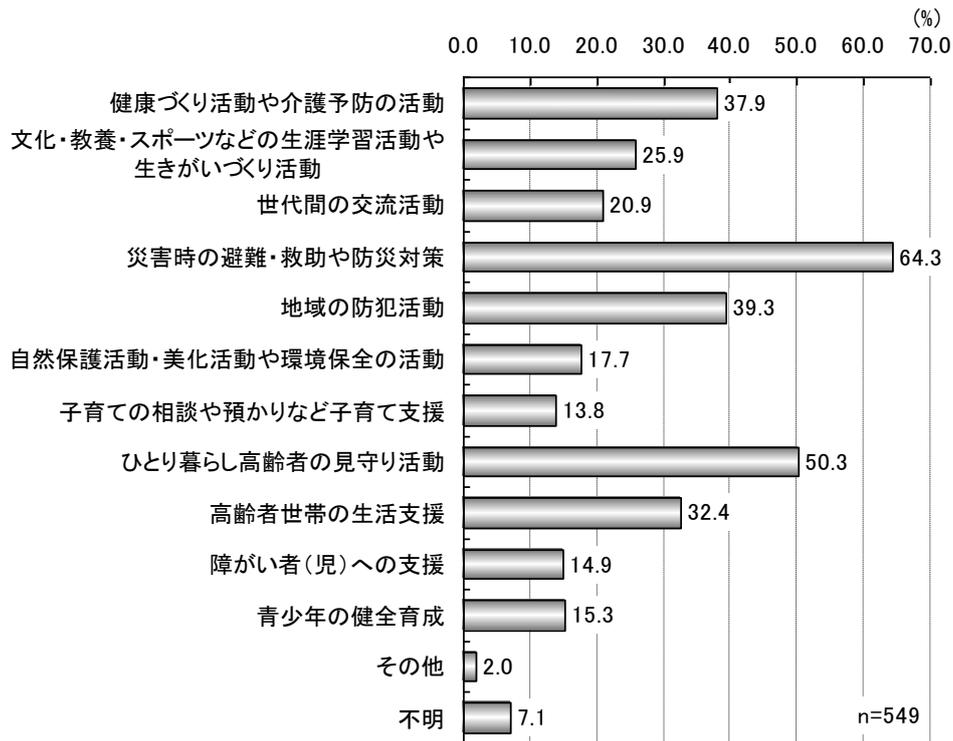
「災害時の避難・救助や防災対策」が64.3%で最も多く、「ひとり暮らし高齢者の見守り活動」が50.3%で続いています。次いで「地域の防犯活動」(39.3%)、「健康づくり活動や介護予防の活動」(37.9%)、「高齢者世帯の生活支援」(32.4%)、「文化・教養・スポーツなどの生涯学習活動や生きがいづくり活動」(25.9%)、「世代間の交流活動」(20.9%)、「自然保護活動・美化活動や環境保全の活動」(17.7%)、「青少年の健全育成」(15.3%)、「障がい者(児)への支援」(14.9%)、「子育ての相談や預かりなど子育て支援」(13.8%)の順となっています。

年齢別で全体に比べ多いものを見ると、40歳未満では「子育ての相談や預かりなど子育て支援」(32.2%)と「障がい者(児)への支援」(20.0%)、40歳代では「災害時の避難・救助や防災対策」(69.4%)と「青少年の健全育成」(21.4%)、50歳代では「地域の防犯活動」(46.5%)と「健康づくり活動や介護予防の活動」(43.2%)、60歳代では「健康づくり活動や介護予防の活動」(45.7%)です。

家族類型別で全体に比べ多いものを見ると、親と子と孫の3世代の「地域の防犯活動」(48.3%)です。

要介護者別で全体に比べ多いものを見ると、介護の必要な人がいる家庭では「高齢者世帯の生活支援」(52.2%)と「障がい者(児)への支援」(22.4%)、障がいのある人がいる家庭では「障がい者(児)への支援」(26.5%)、小さい子ども(小学校3年生まで)がいる家庭では「地域の防犯活動」(50.0%)、「子育ての相談や預かりなど子育て支援」(39.6%)、「障がい者(児)への支援」(20.8%)となっています。

図表 45 (全体)



図表 46 (年齢別)

	全体	健康づくり活動や介護予防の活動	文化・教養・スポーツなどの生涯学習活動や生きがいづくり活動	世代間の交流活動	災害時の避難・救助や防災対策	地域の防犯活動	自然保護活動・美化活動や環境保全の活動	子育ての相談や預かりなど子育て支援	ひとり暮らし高齢者の見守り活動	高齢者世帯の生活支援	障がい者(児)への支援	青少年の健全育成	その他	不明
合計	549 100.0	208 37.9	142 25.9	115 20.9	353 64.3	216 39.3	97 17.7	76 13.8	276 50.3	178 32.4	82 14.9	84 15.3	11 2.0	39 7.1
40歳未満	90 100.0	17 18.9	27 30.0	14 15.6	50 55.6	33 36.7	14 15.6	29 32.2	43 47.8	28 31.1	18 20.0	7 7.8	4 4.4	7 7.8
40歳代	98 100.0	30 30.6	23 23.5	18 18.4	68 69.4	42 42.9	13 13.3	19 19.4	42 42.9	35 35.7	18 18.4	21 21.4	3 3.1	3 3.1
50歳代	155 100.0	67 43.2	46 29.7	39 25.2	106 68.4	72 46.5	34 21.9	19 12.3	81 52.3	56 36.1	21 13.5	25 16.1	1 0.6	5 3.2
60歳代	197 100.0	90 45.7	45 22.8	43 21.8	123 62.4	65 33.0	34 17.3	8 4.1	106 53.8	56 28.4	22 11.2	31 15.7	3 1.5	23 11.7

図表 47 (家族類型別)

	全体	健康づくり活動や介護予防の活動	文化・教養・スポーツなどの生涯学習活動や生きがいづくり活動	世代間の交流活動	災害時の避難・救助や防災対策	地域の防犯活動	自然保護活動・美化活動や環境保全の活動	子育ての相談や預かりなど子育て支援	ひとり暮らし高齢者の見守り活動	高齢者世帯の生活支援	障がい者(児)への支援	青少年の健全育成	その他	不明
合計	549 100.0	208 37.9	142 25.9	115 20.9	353 64.3	216 39.3	97 17.7	76 13.8	276 50.3	178 32.4	82 14.9	84 15.3	11 2.0	39 7.1
ひとり暮らし	40 100.0	15 37.5	12 30.0	8 20.0	24 60.0	14 35.0	7 17.5	3 7.5	18 45.0	8 20.0	5 12.5	7 17.5	1 2.5	2 5.0
夫婦のみ	199 100.0	81 40.7	54 27.1	41 20.6	125 62.8	73 36.7	40 20.1	25 12.6	104 52.3	57 28.6	23 11.6	23 11.6	3 1.5	17 8.5
親と子の2世代	211 100.0	77 36.5	55 26.1	48 22.7	144 68.2	87 41.2	33 15.6	27 12.8	110 52.1	73 34.6	33 15.6	40 19.0	4 1.9	16 7.6
親と子と孫の3世代	58 100.0	14 24.1	9 15.5	10 17.2	34 58.6	28 48.3	9 15.5	16 27.6	26 44.8	22 37.9	13 22.4	10 17.2	3 5.2	2 3.4
その他	33 100.0	15 45.5	9 27.3	8 24.2	23 69.7	12 36.4	6 18.2	5 15.2	13 39.4	15 45.5	7 21.2	2 6.1	0 0.0	2 6.1

図表 48 (要援護者別)

	全体	健康づくり活動や介護予防の活動	文化・教養・スポーツなどの生涯学習活動や生きがいづくり活動	世代間の交流活動	災害時の避難・救助や防災対策	地域の防犯活動	自然保護活動・美化活動や環境保全の活動	子育ての相談や預かりなど子育て支援	ひとり暮らし高齢者の見守り活動	高齢者世帯の生活支援	障がい者(児)への支援	青少年の健全育成	その他	不明
合計	549 100.0	208 37.9	142 25.9	115 20.9	353 64.3	216 39.3	97 17.7	76 13.8	276 50.3	178 32.4	82 14.9	84 15.3	11 2.0	39 7.1
介護の必要な人がいる	67 100.0	28 41.8	12 17.9	10 14.9	39 58.2	22 32.8	14 20.9	6 9.0	36 53.7	35 52.2	15 22.4	11 16.4	2 3.0	6 9.0
障がいのある人がいる	49 100.0	21 42.9	12 24.5	12 24.5	27 55.1	15 30.6	9 18.4	9 18.4	23 46.9	18 36.7	13 26.5	7 14.3	0 0.0	3 6.1
医療が必要な人がいる	6 100.0	2 33.3	0 0.0	0 0.0	2 33.3	2 33.3	0 0.0	2 33.3	2 33.3	3 50.0	2 33.3	2 33.3	0 0.0	1 16.7
小さい子ども(小学校3年生まで)がいる	48 100.0	10 20.8	11 22.9	11 22.9	28 58.3	24 50.0	8 16.7	19 39.6	21 43.8	15 31.3	10 20.8	8 16.7	4 8.3	3 6.3
その他	11 100.0	5 45.5	2 18.2	2 18.2	8 72.7	3 27.3	3 27.3	0 0.0	4 36.4	2 18.2	0 0.0	1 9.1	0 0.0	0 0.0
援護が必要な人はいない	267 100.0	97 36.3	71 26.6	59 22.1	189 70.8	113 42.3	52 19.5	38 14.2	136 50.9	77 28.8	38 14.2	45 16.9	3 1.1	20 7.5



7. 地域の福祉について

(1) 近所や地域の中で手助けできること

問14	SA	あなたは、となり近所や地域の中で、高齢者や障がい者(児)の介護、あるいは子育てなどで悩んだり困っている世帯があったら、何か手助けをしたいと思いますか(1つに○)。
-----	----	---

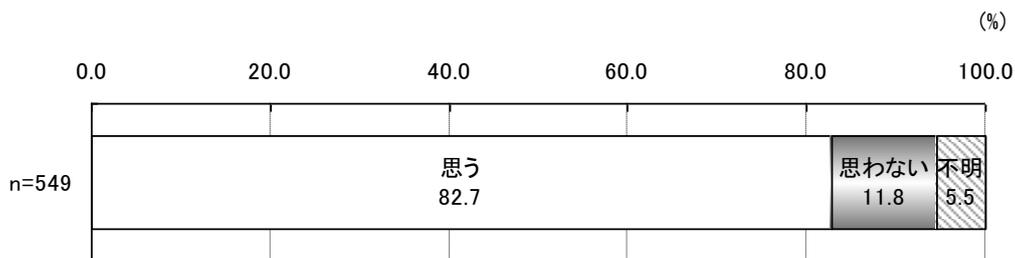


◇地域で悩みや困っている世帯に手助けをしたい人は8割を超える。50歳代でやや多い。

近所や地域で悩みや困っている世帯に手助けをしたいとする人は 82.7%にのぼります。一方、そう思わない人は 11.8%です。

年齢別では、50歳代で「思う」は 87.7%とやや多く、一方の「思わない」は 40歳代で 18.4%と全年代中で最も多くなっています。

図表 49 (全体)



図表 50 (年齢別)

	全体	思う	思わない	不明
合計	549	454	65	30
	100.0	82.7	11.8	5.5
40歳未満	90	73	15	2
	100.0	81.1	16.7	2.2
40歳代	98	79	18	1
	100.0	80.6	18.4	1.0
50歳代	155	136	14	5
	100.0	87.7	9.0	3.2
60歳代	197	159	16	22
	100.0	80.7	8.1	11.2

(2) 手伝えること

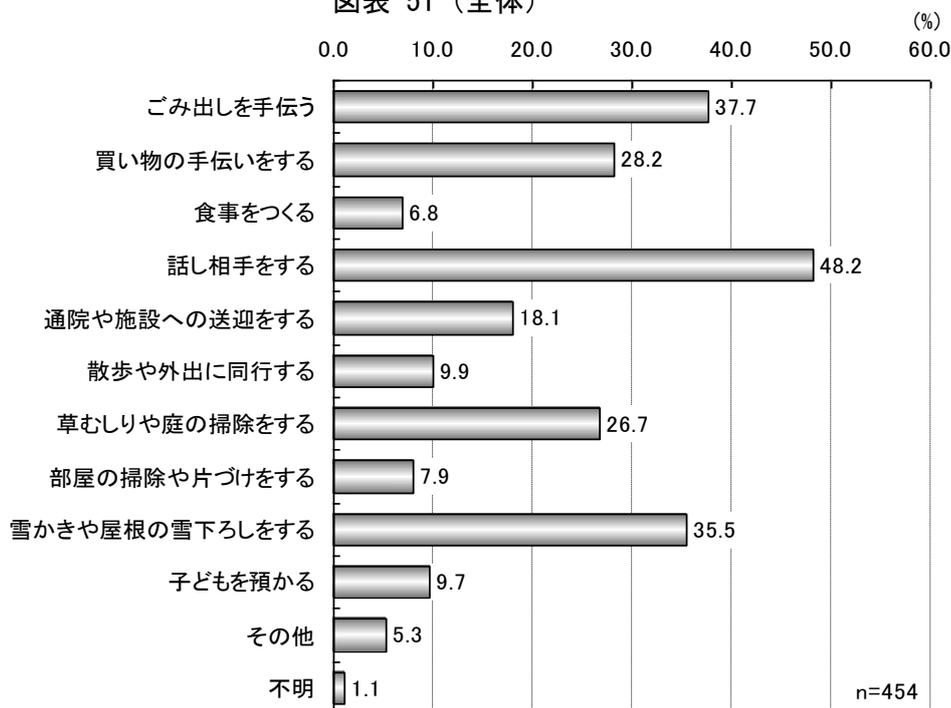
問14 付問	MA	(前問で1.に○を付けた方だけお答えください。) それは、どのような手伝いですか(あてはまるものに○)。
-----------	----	---

◇手伝えることは「話し相手」が最も多く、次いで「ごみ出し」「雪かきや屋根の雪下ろし」が続く。雪かきや雪下ろしは40歳代以下、買い物の手伝いは50歳代が多い。

前問で手助けしたいと思うと回答した 454 人について、内容を聞いたところ「話し相手をする」が 48.2%で最も多く、「ごみ出しを手伝う」(37.7%)、「雪かきや屋根の雪下ろしをする」(35.5%)、「買い物の手伝いをする」(28.2%)、「草むしりや庭の掃除をする」(26.7%)、「通院や施設への送迎をする」(18.1%)、「散歩や外出に同行する」(9.9%)、「子どもを預かる」(9.7%)、「部屋の掃除や片づけをする」(7.9%)、「食事をつくる」(6.8%)の順で続いています。

年齢別で全体に比べ多いものを見ると、40歳未満は「雪かきや屋根の雪下ろしをする」(46.6%)、40歳代は「ごみ出しを手伝う」(45.6%)、「雪かきや屋根の雪下ろしをする」(46.8%)、50歳代は「買い物の手伝いをする」(34.6%)となっています。

図表 51 (全体)



図表 52 (年齢別)

	全体	ごみ出しを手伝う	買い物の手伝いをする	食事をつくる	話し相手をする	通院や施設への送迎をする	散歩や外出に同行する	草むしりや庭の掃除をする	部屋の掃除や片づけをする	雪かきや屋根の雪下ろしをする	子どもを預かる	その他	不明
合計	454	171	128	31	219	82	45	121	36	161	44	24	5
	100.0	37.7	28.2	6.8	48.2	18.1	9.9	26.7	7.9	35.5	9.7	5.3	1.1
40歳未満	73	30	20	2	33	16	4	13	3	34	11	5	0
	100.0	41.1	27.4	2.7	45.2	21.9	5.5	17.8	4.1	46.6	15.1	6.8	0.0
40歳代	79	36	19	5	32	15	8	19	7	37	8	4	2
	100.0	45.6	24.1	6.3	40.5	19.0	10.1	24.1	8.9	46.8	10.1	5.1	2.5
50歳代	136	52	47	12	66	27	16	42	14	44	17	9	1
	100.0	38.2	34.6	8.8	48.5	19.9	11.8	30.9	10.3	32.4	12.5	6.6	0.7
60歳代	159	48	41	10	84	23	15	45	10	44	7	6	2
	100.0	30.2	25.8	6.3	52.8	14.5	9.4	28.3	6.3	27.7	4.4	3.8	1.3

(3) 福祉への関心

問15	SA	あなたは、「福祉」について関心がありますか(1つに○)。
-----	----	------------------------------

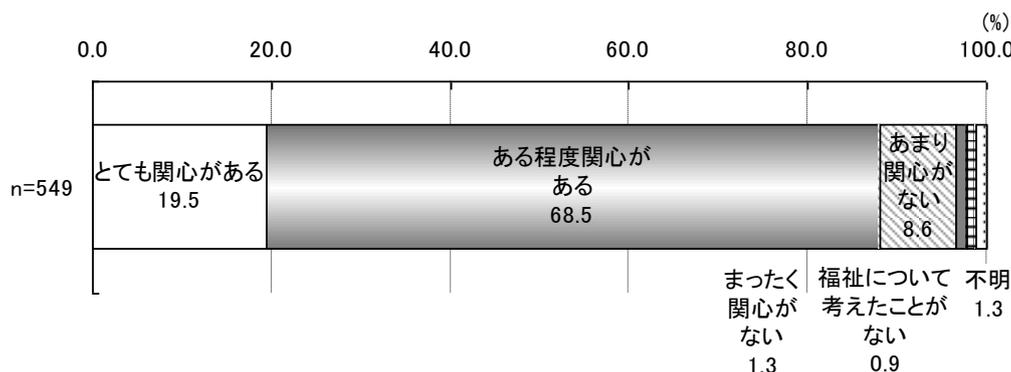


◇福祉に関心がある人は**9割近く**。若い世代で福祉への関心がやや低い。

福祉に「ある程度関心がある」が 68.5%、「とても関心がある」が 19.5%と合わせて関心がある人は 88.0%です。一方、「あまり関心がない」が 8.6%、「まったく関心がない」が 1.3%と合わせて 9.9%は関心がないとしています。また、「福祉について考えたことがない」のは 0.9%です。

年齢別では、年齢が**高く**ほど「とても関心がある」が多くなり、60歳代では 29.9%に**のぼり**ます。一方、年齢が**低く**なるほど「あまり関心がない」が多くなり、40歳未満で 17.8%、40歳代で 12.2%となっています。

図表 53 (全体)



図表 54 (年齢別)

	全体	とても関心がある	ある程度関心がある	あまり関心がない	まったく関心がない	福祉について考えたことがない	不明
合計	549 100.0	107 19.5	376 68.5	47 8.6	7 1.3	5 0.9	7 1.3
40歳未満	90 100.0	8 8.9	59 65.6	16 17.8	4 4.4	2 2.2	1 1.1
40歳代	98 100.0	10 10.2	72 73.5	12 12.2	3 3.1	0 0.0	1 1.0
50歳代	155 100.0	29 18.7	112 72.3	10 6.5	0 0.0	1 0.6	3 1.9
60歳代	197 100.0	59 29.9	127 64.5	7 3.6	0 0.0	2 1.0	2 1.0

(4) 福島町社会福祉協議会の認知度

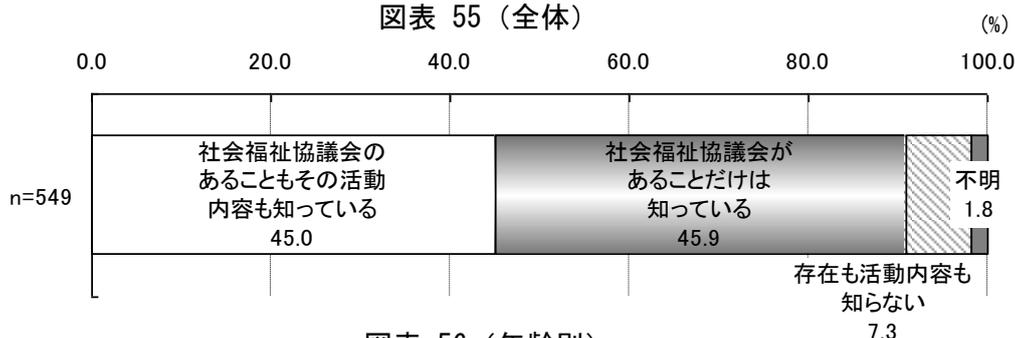
問16	SA	あなたは、福島町社会福祉協議会を知っていますか(1つに○)。
-----	----	--------------------------------

- ◇福島町社会福祉協議会の活動内容を知らない人が半数を超える。
- ◇40歳代以下で活動内容の認知度は低下する傾向。

「社会福祉協議会があることだけは知っている」が 45.9%、「社会福祉協議会のあることもその活動内容も知っている」が 45.0%とほぼ両者が拮抗していますが、「存在も活動内容も知らない」が 7.3%と、社会福祉協議会の活動内容を知らない人が 53.2%と半数を超えています。

年齢別では、50 歳代以上で活動内容を知っている人の方が多く、40 歳代以下は逆転し、「あることだけは知っている」が多くなっているほか、40 歳未満では「存在も活動内容も知らない」が 23.3%にのぼります。地区別では吉岡地区でやや認知度が低い傾向です。

図表 55 (全体)



図表 56 (年齢別)

	全体	社会福祉協議会のあることもその活動内容も知っている	社会福祉協議会があることだけは知っている	存在も活動内容も知らない	不明
合計	549 100.0	247 45.0	252 45.9	40 7.3	10 1.8
40歳未満	90 100.0	28 31.1	40 44.4	21 23.3	1 1.1
40歳代	98 100.0	38 38.8	54 55.1	6 6.1	0 0.0
50歳代	155 100.0	81 52.3	68 43.9	3 1.9	3 1.9
60歳代	197 100.0	98 49.7	84 42.6	10 5.1	5 2.5

図表 57 (地区別)

	全体	社会福祉協議会のあることもその活動内容も知っている	社会福祉協議会があることだけは知っている	存在も活動内容も知らない	不明
合計	549 100.0	247 45.0	252 45.9	40 7.3	10 1.8
福島地区	386 100.0	191 49.5	160 41.5	29 7.5	6 1.6
吉岡地区	104 100.0	34 32.7	59 56.7	10 9.6	1 1.0
不明	59 100.0	22 37.3	33 55.9	1 1.7	3 5.1

(5) これからの福祉への考え

問17 MA これからの福祉について、あなたはどのように考えますか(2つまでに○)。

◇これからの福祉は行政と住民が協働すべきとする人が7割を超える。

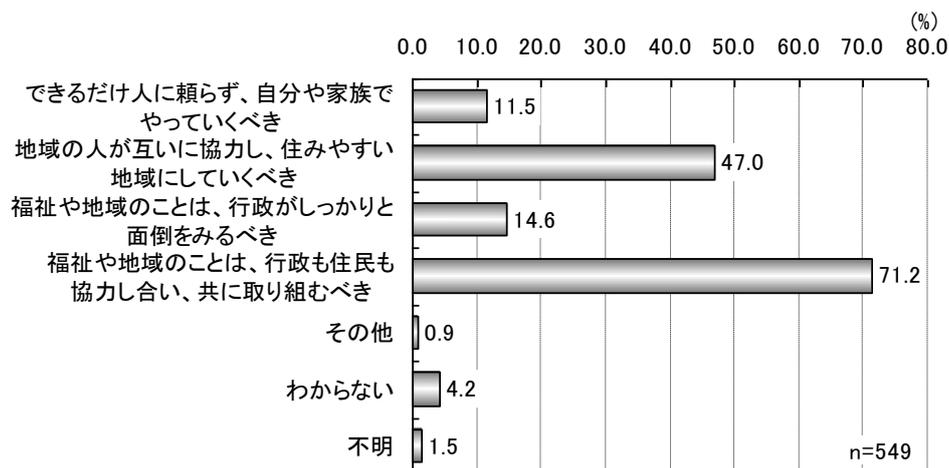
「福祉や地域のことは、行政も住民も協力し合い、共に取り組むべき」が71.2%で最も多くなっています。続いて「地域の人が互いに協力し、住みやすい地域にしていくべき」が47.0%となっており、「福祉や地域のことは、行政がしっかりと面倒をみるべき」は14.6%、「できるだけ人に頼らず、自分や家族でやっていくべき」は11.5%です。

年齢別に見ると、50歳代で「地域の人が互いに協力し、住みやすい地域にしていくべき」が58.1%と全年代で最大となっているほか、60歳代では「できるだけ人に頼らず、自分や家族でやっていくべき」が20.8%にのぼり、全体(11.5%)を上回っています。

家族類型別では、親と子と孫の3世代で「福祉や地域のことは、行政も住民も協力し合い、共に取り組むべき」が81.0%と全年代で最も多くなっています。

地区別で見ると、「できるだけ人に頼らず、自分や家族でやっていくべき」が吉岡地区で16.3%とやや多くなっています。

図表 58 (全体)



図表 59 (年齢別)

	全体	できるだけ人に頼らず、自分や家族でやっていくべき	地域の人々が互いに協力し、住みやすい地域にしていくべき	福祉や地域のことは、行政がしっかりと面倒をみるべき	福祉や地域のことは、行政も住民も協力し合い、共に取り組むべき	その他	わからない	不明
合計	549 100.0	63 11.5	258 47.0	80 14.6	391 71.2	5 0.9	23 4.2	8 1.5
40歳未満	90 100.0	6 6.7	38 42.2	14 15.6	53 58.9	2 2.2	8 8.9	1 1.1
40歳代	98 100.0	4 4.1	36 36.7	14 14.3	74 75.5	2 2.0	5 5.1	1 1.0
50歳代	155 100.0	11 7.1	90 58.1	23 14.8	113 72.9	0 0.0	3 1.9	3 1.9
60歳代	197 100.0	41 20.8	92 46.7	28 14.2	145 73.6	1 0.5	7 3.6	2 1.0

図表 60 (家族類型別)

	全体	できるだけ人に頼らず、自分や家族でやっていくべき	地域の人々が互いに協力し、住みやすい地域にしていくべき	福祉や地域のことは、行政がしっかりと面倒をみるべき	福祉や地域のことは、行政も住民も協力し合い、共に取り組むべき	その他	わからない	不明
合計	549 100.0	63 11.5	258 47.0	80 14.6	391 71.2	5 0.9	23 4.2	8 1.5
ひとり暮らし	40 100.0	6 15.0	19 47.5	7 17.5	24 60.0	2 5.0	2 5.0	0 0.0
夫婦のみ	199 100.0	30 15.1	97 48.7	30 15.1	144 72.4	2 1.0	3 1.5	6 3.0
親と子の2世代	211 100.0	13 6.2	105 49.8	29 13.7	152 72.0	1 0.5	11 5.2	2 0.9
親と子と孫の3世代	58 100.0	8 13.8	22 37.9	4 6.9	47 81.0	0 0.0	2 3.4	0 0.0
その他	33 100.0	4 12.1	10 30.3	8 24.2	20 60.6	0 0.0	5 15.2	0 0.0

図表 61 (地区別)

	全体	できるだけ人に頼らず、自分や家族でやっていくべき	地域の人々が互いに協力し、住みやすい地域にしていくべき	福祉や地域のことは、行政がしっかりと面倒をみるべき	福祉や地域のことは、行政も住民も協力し合い、共に取り組むべき	その他	わからない	不明
合計	549 100.0	63 11.5	258 47.0	80 14.6	391 71.2	5 0.9	23 4.2	8 1.5
福島地区	386 100.0	38 9.8	180 46.6	52 13.5	278 72.0	4 1.0	18 4.7	5 1.3
吉岡地区	104 100.0	17 16.3	48 46.2	18 17.3	71 68.3	1 1.0	5 4.8	1 1.0
不明	59 100.0	8 13.6	30 50.8	10 16.9	42 71.2	0 0.0	0 0.0	2 3.4

(6) 地域社会に支えられているか

問18	SA	あなたは地域社会に支えられていると思いますか(1つに○)。
-----	----	-------------------------------

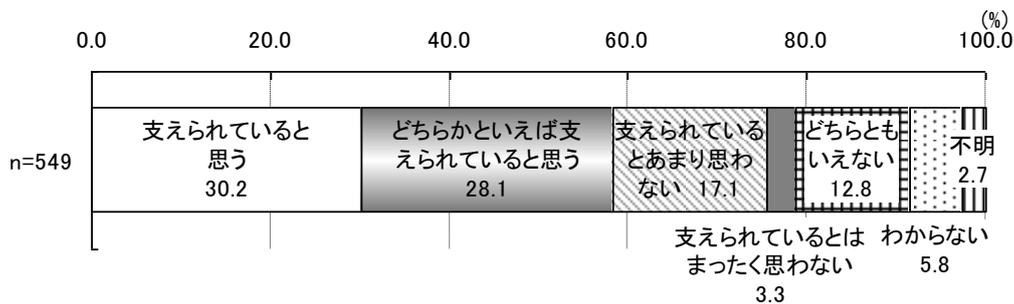


◇ “概ね支えられている” とする人が6割弱。50歳代以上で多い。一方の“概ね支えられていない” は2割。

「支えられていると思う」が 30.2%、「どちらかといえば支えられていると思う」が 28.1%と“概ね支えられている”が 58.3%にのびります。一方、「支えられているとあまり思わない」が 17.1%、「支えられているとはまったく思わない」が 3.3%と“概ね支えられていない”が 20.4%となっています。また、「どちらともいえない」は 12.8%、「わからない」は 5.8%です。

年齢別に見ると、50歳代で「支えられていると思う」が35.5%と全年代中最も多いなど、50歳代以上では“概ね支えられている”は多く、40歳代未満と40歳代は「どちらともいえない」や「わからない」が多くなっています。

図表 62 (全体)



図表 63 (年齢別)

	全体	支えられていると思う	どちらかといえば支えられていると思う	支えられているとあまり思わない	支えられているとはまったく思わない	どちらともいえない	わからない	不明
合計	549 100.0	166 30.2	154 28.1	94 17.1	18 3.3	70 12.8	32 5.8	15 2.7
40歳未満	90 100.0	19 21.1	24 26.7	17 18.9	5 5.6	14 15.6	10 11.1	1 1.1
40歳代	98 100.0	30 30.6	20 20.4	17 17.3	2 2.0	14 14.3	12 12.2	3 3.1
50歳代	155 100.0	55 35.5	44 28.4	22 14.2	4 2.6	20 12.9	5 3.2	5 3.2
60歳代	197 100.0	60 30.5	66 33.5	37 18.8	7 3.6	17 8.6	5 2.5	5 2.5

(7) 支え合い活動の発展に必要な事

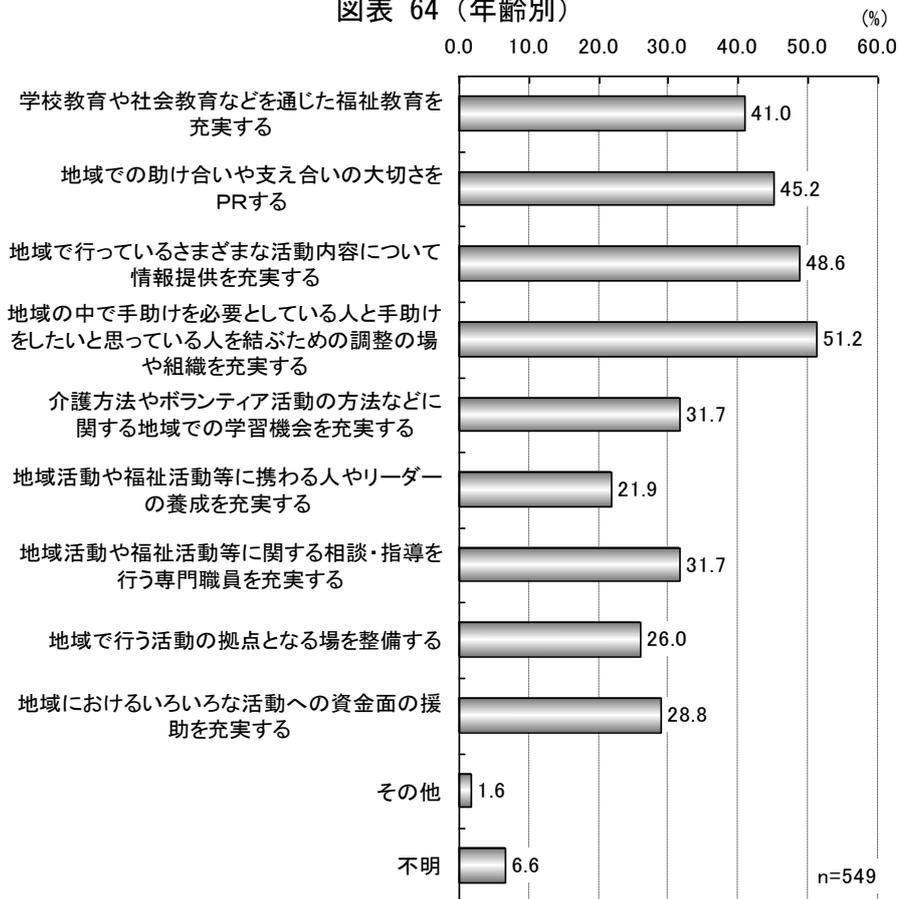
問19	MA	地域での助け合いや支え合いの活動の輪を広げるために、今後特にどのようなことが重要だと思いますか(5つまでに○)。
-----	----	--



◇地域での助け合いや支え合いの活動の輪を広げていくために最も必要なことの上位2項目は、「助けが必要な人と助けたい人とを結ぶ組織の充実」と「地域活動の情報提供の充実」。次いで、「地域での助け合いや支え合いの大切さのPR」「学校教育や社会教育などを通じた福祉教育の充実」が続く。

「地域の中で手助けを必要としている人と手助けをしたいと思っている人を結ぶための調整の場や組織を充実する」が 51.2%、「地域で行っているさまざまな活動内容について情報提供を充実する」が 48.6%、「地域での助け合いや支え合いの大切さをPRする」が 45.2%、「学校教育や社会教育などを通じた福祉教育を充実する」が 41.0%の順です。「介護方法やボランティア活動の方法などに関する地域での学習機会を充実する」及び「地域活動や福祉活動等に関する相談・指導を行う専門職員を充実する」(各 31.7%)、「地域におけるいろいろな活動への資金面の援助を充実する」(28.8%)、「地域で行う活動の拠点となる場を整備する」(26.0%)、「地域活動や福祉活動等に携わる人やリーダーの養成を充実する」(21.9%)など回答は多様です。

図表 64 (年齢別)



年齢別で全体に比べ多いものを見ると、40歳代で「学校教育や社会教育などを通じた福祉教育を充実する」(48.0%)及び「地域におけるいろいろな活動への資金面の援助を充実する」(33.7%)、50歳代で「地域の中で手助けを必要としている人と手助けをしたいと思っている人を結ぶための調整の場や組織を充実する」(61.9%)、「地域で行っているさまざまな活動内容について情報提供を充実する」(57.4%)、「地域での助け合いや支え合いの大切さをPRする」(52.9%)、60歳代で「地域での助け合いや支え合いの大切さをPRする」(57.9%)です。

家族類型別で全体に比べ多いものを見ると、ひとり暮らしでは「介護方法やボランティア活動の方法などに関する地域での学習機会を充実する」(40.0%)、「地域で行う活動の拠点となる場を整備する」(32.5%)及び「地域活動や福祉活動等に携わる人やリーダーの養成を充実する」(30.0%)、夫婦のみでは「地域での助け合いや支え合いの大切さをPRする」(50.3%)、親と子と孫の3世代では「学校教育や社会教育などを通じた福祉教育を充実する」(46.6%)及び「地域活動や福祉活動等に関する相談・指導を行う専門職員を充実する」(36.2%)です。

図表 65 (年齢別)

	全体	学校教育や社会教育などを通じた福祉教育を充実する	地域での助け合いや支え合いの大切さをPRする	地域で行っているさまざまな活動内容について情報提供を充実する	地域の中で手助けを必要としている人と手助けをしたいと思っている人を結ぶための調整の場や組織を充実する	介護方法やボランティア活動の方法などに関する地域での学習機会を充実する	地域活動や福祉活動等に携わる人やリーダーの養成を充実する	地域活動や福祉活動等に関する相談・指導を行う専門職員を充実する	地域で行う活動の拠点となる場を整備する	地域におけるいろいろな活動への資金面の援助を充実する	その他	不明
合計	549 100.0	225 41.0	248 45.2	267 48.6	281 51.2	174 31.7	120 21.9	174 31.7	143 26.0	158 28.8	9 1.6	36 6.6
40歳未満	90 100.0	31 34.4	18 20.0	42 46.7	47 52.2	20 22.2	12 13.3	28 31.1	25 27.8	23 25.6	3 3.3	6 6.7
40歳代	98 100.0	47 48.0	28 28.6	46 46.9	42 42.9	35 35.7	18 18.4	33 33.7	31 31.6	33 33.7	3 3.1	4 4.1
50歳代	155 100.0	71 45.8	82 52.9	89 57.4	96 61.9	55 35.5	39 25.2	45 29.0	46 29.7	42 27.1	1 0.6	6 3.9
60歳代	197 100.0	74 37.6	114 57.9	87 44.2	90 45.7	61 31.0	51 25.9	68 34.5	40 20.3	56 28.4	2 1.0	20 10.2

図表 66 (家族類型別)

	全体	学校教育や社会教育などを通じた福祉教育を充実する	地域での助け合いや支え合いの大切さをPRする	地域で行っているさまざまな活動内容について情報提供を充実する	地域の中で手助けを必要としている人と手助けをしたいと思っている人を結ぶための調整の場や組織を充実する	介護方法やボランティア活動の方法などに関する地域での学習機会を充実する	地域活動や福祉活動等に携わる人やリーダーの養成を充実する	地域活動や福祉活動等に関する相談・指導を行う専門職員を充実する	地域で行う活動の拠点となる場を整備する	地域におけるいろいろな活動への資金面の援助を充実する	その他	不明
合計	549 100.0	225 41.0	248 45.2	267 48.6	281 51.2	174 31.7	120 21.9	174 31.7	143 26.0	158 28.8	9 1.6	36 6.6
ひとり暮らし	40 100.0	12 30.0	17 42.5	19 47.5	19 47.5	16 40.0	12 30.0	12 30.0	13 32.5	11 27.5	0 0.0	2 5.0
夫婦のみ	199 100.0	71 35.7	100 50.3	105 52.8	99 49.7	60 30.2	46 23.1	60 30.2	48 24.1	53 26.6	4 2.0	16 8.0
親と子の2世代	211 100.0	96 45.5	89 42.2	101 47.9	118 55.9	65 30.8	44 20.9	66 31.3	56 26.5	64 30.3	2 0.9	10 4.7
親と子と孫の3世代	58 100.0	27 46.6	21 36.2	21 36.2	28 48.3	17 29.3	10 17.2	21 36.2	17 29.3	18 31.0	3 5.2	4 6.9
その他	33 100.0	15 45.5	16 48.5	18 54.5	13 39.4	13 39.4	8 24.2	13 39.4	8 24.2	11 33.3	0 0.0	1 3.0

III 自由意見

性別	年齢	記述内容	分野
男性	60歳以上	当町における表面に出ていない何らかの支援を要する潜在者はどのくらい居るのか。これに対し公的組織（例えば社会福祉協議会等）はどのような対応をしているのか。既に、「老・老共助」の必要な社会構成となっている事も念頭に、地域活動や福祉活動のあり方を考えなければならないと思う	計画
男性	50代	現在福島町が行っている事業を加速させれば「地域力」が高まり充実したものになる気がする。行政に頼ることなく、補助金をあてにするのではなく地域社会の充実と発展は各自の自覚と行動にあることを認識する	計画
男性	65歳以上	一人ひとりが地域に貢献するために何が出来るか町内会ごと調整をし、地域全体へ発展させる。安心安全な街づくりを形成	計画
女性	40代	吉岡はお祭りも盆踊りもありません。まずは集う機会が必要かと思う	交流
女性	50代	小学校の空きクラスに老人大学を作り子供と高齢者が交流できるといい	交流
女性	60代	老人学級、ふれあい教室等、何歳から入ることが出来るのか、65歳くらいの年齢になったら声かけてもらおうと入りやすいのでは？	交流
男性	65歳以上	お盆やお正月など里帰りする時期に町民が参加できる行事を設けて欲しい	交流
女性	60代	昔はいざというとき助け合うこともできましたが町内会の行事も少ない上つながりが全く無い。誰が参加しても良いような行事をかんがえてもいいのでは？	交流
女性	60代	町のイベントがあっても職員の参加が少ないような気がする。町民も吉岡の人は少ないように思う。盛り上げるために職員の参加を期待します	交流
女性	50代	お年寄りの集まりの場で話しやすい仲間、友達、知人たちが集まってストレス発散できる場所があれば気軽に誘って今日一日楽しんでこようと思いたくなる場所や集会を希望します	交流
男性	50代	古物で使えるものを回収する場があればいいと思う、無駄を出したくないから	交流
男性	60代	人生60年を過ぎた今、後何年生きられるか充分働き今身体が丈夫でいることが一番の幸せと存じます。近所づきあいが一番大切だと思う	交流
女性	65歳以上	年金を受け取っているのに自分はまだ若いといって地域の集会などに出席しない人が多くいるので老人クラブなどに入ってみんなで話し合うことに参加するようになると良いと思う	交流
女性	65歳以上	家族の少ない人には用はなくてもたずねて行って声をかける	交流
女性	29歳以下	みんなが自分から声をかけたり笑顔であいさつすることで助け合える関係に近づいていけると思います	交流
女性	50代	老人クラブなどの集まりに出席なくなり、話し相手など少なくなり、何か80歳を過ぎてもそれにかわる集まりが気兼ねせず出来ることなどないものかと思えます	交流
男性	60代	地域活動の基本は町内会であり、少子高齢化に対応する町内会の編成と会長の地位向上を検討すべき	町内会

性別	年齢	記述内容	分野
男性	40代	一人暮らしの方、高齢者の方の訪問をもう少し増やして欲しい話し相手を増やして欲しいです。寂しく暮らしている人のためにお願いします	高齢者
女性	40代	福祉について 老人介護施設の陽光園の介護職員の方々は決められたことを時間どりのにこなしているようにしかみえません。介護されている方を人間らしく扱って欲しいと思います。他の施設はとても良かった。面会の人たちへの挨拶もできない	高齢者
女性	50代	私は小さいときにはもう祖父母がいなかったのでお年寄りとお話会があったらなあと思う 昔話は勉強になることがたくさんあると思います	高齢者
女性	30代	冬などあまり外に出れない老人などに集まる場を作ってもらって家の中にこもらせないような活動があったら・・・	高齢者
女性	60代	自分がもし介護を必要としていたらと考えながら答えた。人口も減っているので近所で気軽に手助けが出来るような環境づくりをして欲しい	高齢者
女性	29歳以下	とにかく、ご近所同士の普段からの声の掛け合いが何かあったときに1番役立つと思う。何気ない声かけが高齢者にはとてもうれしいそんな気がします。	高齢者
女性	50代	核家族化が進み、自分さえ良ければ・・・や、口出しをしたものがよく言われたい傾向がある。近所同士もしくは行政に携わっている方が日ごろから活動や様々な福祉サービスがあることを知らせていって欲しい 役場の窓口も お堅く行きづらい	情報
女性	29歳以下	誰が具体的に援助を求めているのかを役場が情報収集し、広報や回覧で呼びかけ、手助けしたい人を役場で仲介するべき 資金援助を行政が行う場合は不正平等の無いようにするべき	情報
女性	60代	明日はわが身と思う心を個々に養い、1人で悩まず相談することは恥ずかしくないということをお知らせする機会を町で設けると良いのではないか？	相談
女性	40代	前に住んでいたところでは各戸に防災無線があり、毎日色々な情報が入手できましたが、ここは窓を開けないと聞こえず、寒いときはわからないと思う	災害
不明	60代	病気等の緊急時に備え、年齢に関係なく一人暮らしの世帯に関係なく発報装置の設置の必要性。屋内には発報ベルを設置、屋外には赤色灯と音で近隣に緊急事態を知らせる。これにより地域ぐるみでの助け合いとなる	災害
女性	60代	子供も大人も挨拶が足りないと思います。知らない人でもこんにちはひとつで困っているときに手助けしたりされたり出来ると今までの経験で思っています みんなで挨拶すると怖くない！	助け合い
女性	50代	明日はわが身と思い、近所づきあいを大切に、相手が嫌がる場所にははまっていらず、仲良い町内会でお互い助け合いましょう	助け合い
女性	29歳以下	地域で何かするときは連絡を密にしてみんなで助け合うようにしていればよいと思う	助け合い
女性	50代	自身が元気なので手助けしたいが仕事で時間が取れない	助け合い
女性	40代	役場の女性用トイレ（障害者用）は便器からトイレトペーパーまで離れていると思います。足が不自由な人のためのつくりになっていないと思います	バリアフリー
女性	50代	ボランティア、助け合いは重要だと思いますが、多種多様な活動も必要ですが、プライバシーがどこまで守られるか大変不安です	プライバシー
女性	60代	手助けは受け入れない人のほうが多いと思います 他人に自分のことを見られたくないとか生活の仕方が変わって近所でも近づくことが出来ないことが多々あります	プライバシー

性別	年齢	記述内容	分野
女性	40代	老人ホーム、社協のヘルパーなど個人の情報を他人に教えすぎていると思う。何で知ってるの?と思うようなことを歩けない老人が知っている。それはまずいのでは?	プライバシー
女性	50代	地域仲良しがとても素晴らしいことと思う。すべてにおいて口の軽い人は困りものです	プライバシー
女性	65歳以上	家庭の中のことを批評してもらいたくない 他人が入るとそういうことが心配です	プライバシー
女性	40代	福祉はあまりよくわかりませんが、お金が無い人が利用不可、順番待ちが長いと思います	全般
男性	60代	計画策定内容の素案的なものを、町内会総会等に説明・意見を聞くことについては?	全般
女性	29歳以下	社会福祉協議会での高齢者世帯の調査が終了したら、その地域への報告もし、地域に目配りし支援できるような体制づくりをしていただきたいです	全般
男性	30代	人間が最低限の生活を求めるには行政という公の組織である。「地域福祉」という名の切捨ては決して許さない、責任を持って	全般
女性	不明	私は仕事をしている事に甘え、地域や町内会とあまり協力してきてない。提案など書くのはいかがなものかと抵抗がありますが、高齢化独居と増えているこの町、各地区の民生委員が誰かも分からない独居の方も少なくない 自分もその一人です。色々なボランティアがあると思いますが、PRも大事かと。このアンケートは1,000人の方との事ですが、アンケートの内容に当てはまる人を選んで欲しい	全般
男性	40代	社会福祉協議会が本当に今の福島町のためになっているのか疑問です。色々な噂が耳に入ってきます。私みたいなウチイ人間でも耳に入ってきます。幹部の人がもう少ししっかりした方がいいと思います 私が知っていると言う事は色々な人が知っていると思います お金の行き先をキチンと考えて下さい しっかりした人員配置をお願いします	その他
不明	65歳以上	このようなアンケートはいいことだと思う	その他
男性	40代	基本的なことですが、今後助けられる人は増加し、助ける人の割合はどんどん低下していくと思われ 将来的に若者がこの町に残り、安心して働き、自立できる町になればいいと思います	町政
男性	60代	行政の強いリーダーシップを望む! 地域に頼りすぎないこと!	町政
男性	50代	まちづくり条例を活用する	町政
男性	40代	行政と住民が共に同目線に立って住民は行政、行政は住民の立場で物事を考えられる町づくりをするように町民を指導、教育する努力が行政に不足している	町政
男性	30代	町の出来ることは、医療費の助成、町立学校の費用の助成、町民税の増及び減税及び町発注の土木事業しかありません	町政
男性	50代	関係ないことで済みませんが・・・横綱記念館正面階段の横にある花壇がいつもだらしなくセンスのない植え方がっかりします 観光の場の建物なのでとても恥ずかしい、もっと気を遣って欲しい	その他
男性	40代	少子高齢化になる中で年齢とわずにいつまでも元気で健康であること	その他

IV 資料：アンケート票

福島町地域福祉計画策定のためのアンケート調査



平成21年10月発行

発行・編集 福島町町民課福祉グループ
住 所 〒049-1392
北海道松前郡福島町字福島820番地
電 話 0139-47-3001（代表）・4682（直通）
F A X 0139-47-4406・4504
E-MAIL fukushi-g@town.fukushima.hokkaido.jp
U R L <http://www.town.fukushima.hokkaido.jp/>